ぐだ男君と立香ちゃん

雷神デス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ぐだ男（ＰＬ）と藤丸立香（主人公）が適当に会話するだけの小説です。

目　次

ぐだ男君はソシャゲが好き ―― 1
立香ちゃんは甘いものが好き／ぐだ男君は寒いのが好き ―― 4
ぐだ男君はシルクハットが苦手／立香ちゃんはぐだ男君と一緒にいたい ―― 8
ぐだ男君は足が速い／ぐだ男君は●●● ―― 14
立香ちゃんは先輩のようです／怪しい男を見かけたら１１０当番 ―― 18
ぐだ男君は助けない／立香ちゃんは助けたい ―― 25
立香ちゃんは寂しがり／ぐだ男君は神出鬼没 ―― 35
やっちゃえバーサーカー！ ―― 46
ぐだ男君と立香ちゃんはハイタッチがお好き ―― 55
ぐだ男君は舞台に上がれない／立香ちゃんと所長は似た者同士 ―― 65
立香ちゃんは勝利したい／ぐだ男君はレフが嫌い ―― 76
たった一人の家族だもん ―― 85
グランドオーダー、開幕 ―― 93
立香ちゃんはぬいぐるみがお好き ―― 104
第一特異点　修復開始 ―― 113
蹂躙開始 ―― 121
変形武装は男の浪漫 ―― 129
ＶＳ吸血鬼組 ―― 138
聖女（鉄壁）と聖女（今回は鉄拳は無しです） ―― 147
閑話　織田信長ＶＳランスロット ―― 157
立香ちゃんは無茶しがち ―― 173

ぐだ男君はソシャゲが好き

私、藤丸立香はある悩みを抱えている。

常識を持った人間ならまあ「頭がおかしいのか」と言うような悩みだし、自分自身もそう思っているのだが実際に悩みの種が目の前にいるのだから仕方がない。

私の悩みとは、そう。

「おお、この世界でも刀剣乱舞はやってるんだ！ねぇ立香、プリペイドカード買ってよ」

「買うわけないでしょそんなもの……」

ふよふよと私の背後で浮いている、私だけにしか見えないこのヘンテコな霊のことである。

両親はすでに他界し、高校生となってからはバイトや祖父からの仕送りでなんとか暮らしている私の眼の前に、こいつは突然現れた。

『わー、人類最後のマスターがいる。藤丸立香だっけ、彼女も大変だなぁ』

いきなり現れて人のことを物騒な呼び方した挙句、初対面で自分の名前を当ててきたこいつに当初はすごく怯えた。悲鳴を上げ、塩投げたり御守りを投げたりした。

しかし何をやってもこいつには効かず、またこいつは私だけしか見

れないのだと知った。しかも私が見えているのだと知ると、こいつは更に憑き纏ってきたのだ。

『いやー、初めて俺を見れる奴に出会えたよ！これで暫くは退屈せずに済みそうだ！』

私は徹底的にこいつを無視すべきだったと激しく後悔したがもうあとの祭り。家に住みつかれ、しつこく構われるようになってしまいもう2年間もこいつと一緒にいる。

「長い付き合いだしいいじゃないか。今日給料日だろ？せっかくだし課金してみようぜ？金が無くなるまでガチャを回すのはいいぞぉ」

「沼に引きずり込まないでよ悪霊め。私はお金を無駄遣いできるほど裕福じゃないんだから」

この幽霊、本人はぐだ男と名乗っていたのだが。なんでもスマホでゲームをするのが好きだったらしく、私に頻繁にスマホのゲームを勧めてくるのだ。自分がやれない分、誰かがゲームをしているのが見たいというのだが、私はあまりそういうのは好きではないのでやっていない。

「ちょっとくらい使ったっていいだろうに。貯金もあるんだろ？」

「それは将来のためのお金。何をするにしてもお金は必要になるんだから、今のうちにためておかないといけないんだよ」

「へー。俺ならすぐ課金に使っちゃうな～」

「計画性が無いなぁ」

最初は怖かったのだが、この幽霊は特に私を害するでもなく単純に暇潰し目的で構ってきているとわかった後は、怖がるのも馬鹿らしくなり適当に付き合ってやることにした。

私自身、親が死んでから家では少し寂しかったので話し相手が欲しかったのかもしれない。

「あ、そうだ。今日も献血受けたりとかは無かったかい？」
「毎回それ聞いてくるね。別に無かったよ」
「そっか。……カルデア行きはまだか」
「ん、何か言った？」
「いいや、何も。ちなみに今日の献立は？」
「食べれない癖になんでわざわざ聞くのやら」

こいつは嘘をつくのが下手だ。出会った当初からずっと、私に何かを隠してる。けど隠し事を無理やり聞き出すほど私は無粋じゃないし、こいつもきっとそれが分かって私と一緒にいるのだろう。

恥ずかしい話だが、きっと私はこいつと離れるのが怖いのだと思う。いろいろと面倒なことを言うし、私のことを小馬鹿にするような喋り方をすることもあるが、それでもこいつに孤独感を癒してもらってるのも事実だ。

もしこいつがいなかったら、今の私はどんな性格をしていたのか分からない。少しだけ感謝してる。

「あ、パズドラもやってる！なあなあ立香」
「やらないってば！」

こんな騒がしい日常が何時までも続けばいいな、なんて柄にもなくそう思った。

立香ちゃんは甘いものが好き／ぐだ男君は寒いのが好き

「ん～、美味しい！」
「あんまり甘いもの食べると太るよ～？」

都内の有名なケーキ屋で買ったチーズケーキ、噂に違わず頬が落ちるくらい美味しかった。
デリカシーの欠片も無い余計なことを言うぐだ男の言葉は無視して、今日もバイトと学業を頑張った自分のご褒美にと口の中一杯に広がる甘い香りを堪能する。

「羨ましいな～。俺もそんなの食べたいんだけど」
「ぐだ男は食べれないから仕方ないでしょ。ほら、匂いだけでも嗅ぐ？」
「余計に食べたくなっちゃうからいらないや」

ぐだ男は基本的に何かに干渉したりはできない。私が触ろうとしてもすり抜けるし、壁にぶつかったとしてもふよふよと通り抜けてしまう。
それが利点になることも多いのだろうが、本人としては不便なようだ。まあ、何かを食べることも触れることもできないので娯楽品を味わえなくなると思うと、当たり前だろう。

「なんとか実体化する方法を探さないとなぁ。ずっとこの姿だとやっぱり不便だ」
「人形とかに取り憑いたりできないの？幽霊なんだし、それくらいできるんじゃない？」
「できたらもうやってるよ。試したけどすり抜けるだけ」
「へー。不便なんだね」

「あと試してないことと言えば～……」

うーん、と悩んだ後あっと声を出し、私の方を見る。なんだか嫌な予感がした。

「人に憑依するとかは試して無かった！一回試してみようか」
「ちょ、それ実験台私？」
「うん、君しかいないし。それじゃ、レッツトライ！」

本人の了承も無しに私の体に突っ込んでくるぐだ男。
おなかの方に半透明な男が突っ込んでくる異様な光景に思わず少し後ずさろうとするが、身体が動かない。私の体が言うことを聞かず、勝手に右手を上げたりしてる。

「おお、成功だ！」
「（勝手に人の身体乗っ取らないでよ!?）」
「わぁ、身体の中から声が聞こえてくる！不思議だなぁ。あ、そうだ」

なんとこのバカ幽霊は、私の買ってきたケーキを食べ始めた。身体を乗っ取られた私にケーキの味は伝わらない。どうやらこの状態だと、味覚とかは全部ぐだ男の方に行ってるようだ。

「わ、美味しい！立香がパクパク食ってたのも納得だね。うまうま」
「（ちょっと、太るでしょ！そんなに食べないでよ！）」
「さっきまで僕がそれ言っても食べるのやめなかったじゃん」
「（自分が食べた物で太るのと他人が食べた物で太るのは全然違うのよ！）」
「そういうもんかな。まあ美味しかったし返すね。……あれ？」
「（え、どうしたの？）」

突然無言になり、ばたばたと私の身体を動かすぐだ男に不安を覚え

る。ぐだ男はしばらく動いた後、頷いて言った。

「戻り方分かんないや！」

「（ちょっと!?）」

その後、暫く試行錯誤した後にようやく戻れた。もう身体は貸さないと心に誓った。

冷たい、冷たい、冷たい。

今日もまた筆箱を隠されたり、机に落書きをされたりした。

前まではそれでずっと泣いてたけど、今はぐだ男が筆箱を探し出してくれたり、慰めてくれたりするから笑顔でいられた。けどそれが気に入らなかったらしい。

まさか、トイレに入ってる途中に水をぶっかけるとかいうのを現実でやられるなんて思わなかった。

替えの服なんて持ってなかったから、冬だというのにびしょぬれで帰らなくちゃいけなかった。

冷たいのは嫌いだった。父さんと母さんが棺に入ってるときの肌の温度を思い出してしまうから。あの時の光景が蘇って、クスクスと笑われる自分が惨めで、泣きそうになった。

「（……あれ？）」

急に冷たい感触が無くなった。前と同じ感覚がして、いつの間にかぐだ男が私の体に乗っ取ったのだと分かった。ぐだ男が体を使ってる間は、私は何も感じない状態でいられるけど、ぐだ男がその代わりに感じてしまう。

「(やめなよ、ぐだ男。寒いでしょ？)」

「平気平気。俺、寒いの好きなんだ」

私の顔に似合わない、ニコニコとした能天気な笑顔を浮かべながら歩いていく。

それが気に入らなかったようで、彼女たちはどこかに行ってしまった。

「帰ったらお風呂入ろうか～。冷えた体を温めるのは気持ちいいよ～」

「(……覗かないでね？)」

「覗かないよ！変態扱いはやめてよもぉ」

今は何も感じないはずなのに、なんだかほんのり暖かかった。

ぐだ男君はシルクハットが苦手／立香ちゃんはぐだ男君と一緒にいたい

「いやー楽しみだな。ありがとね立香！」
「ちゃーんと約束は守ってね？」
「勿論！やるのが楽しみだなぁ！」

今日は珍しくゲーム屋に来ている。なんでもぐだ男がどうしても欲しいゲームが出たらしく、何度もお願いしてくるので私の体を使って家の家事をやらせるという条件でゲームを買ってあげることにした。
最近は体を使われるのは割と慣れて、ぐだ男が体を動かしてる間はゆっくり休むことにできる。……実は時々私の代わりに授業に出てもらってるのは内緒だ。

「それにしても、それ面白いの？カードゲームみたいだけど」
「面白いよ、英雄史大戦！やったことないけど！」
「英雄とかは、私あんまりわからないなぁ」

なんでも、一度はやってみたい！とずっと思っていたゲームらしい。
簡単にルールを聞いてみたけどチンプンカンプンだったので私はあまり興味無いが、ぐだ男が楽しそうに私の周りを飛び回っているのを見ているとつい私も嬉しくなった。
けど、ぐだ男を見ていたからかつい前をちゃんと見ておらず、歩いている途中に誰かの背中にぶつかって転んでしまう。我ながら間抜けな転び方で、服が少し汚れてしまった。

「あ、す、すいません！」

「ああ、構わないよ。怪我はないかい？」

その人は、シルクハットをかぶった紳士的な人だった。人の好さそうな微笑みを浮かべ、ぼさぼさの赤みがかった長髪のおじさん。いい人そうだな、と思った。

「はい、大丈夫です。えと、ほんとすいません、こっちの不注意で」
「謝ることはないさ。避けれなかった私にも非は……ん。おや、服が汚れてしまったようだね」
「あ、これくらい大丈夫ですよ。慣れてますし」
「慣れている？しかしレディの服を汚してしまったままとなると、こちらも申し訳ない。ついてきてくれるかな？違う服を見繕うよ。勿論、代金は私が出すさ」
「え、いやあの」

ぶつかってしまった挙句、服を買ってもらうなんて、と戸惑っているとぐだ男が耳元まで近づいてくる。

「立香、ついていっちゃだめ」
「……？」
「いいから。早く帰ろう」
「……えと、すいません！私用事があるので、また！」
早口でそう言って、紳士風な人の横を駆け抜け帰路につく。
失礼なことしたな、と思ったがぐだ男がこうやって助言をする時はいつだって正しいことばかりだった。あの人には悪いけど、今日はぐだ男に従って家に帰ろうとする。
しかし、彼の横を通り抜ける途中に腕を掴まれてしまった。

「なに、そう時間は取らせない。非礼を働いてしまったんだ、せめてそれくらいは――――！」

気が付けばぐだ男が私の体を使い、捕まれていた手を強引に引き離していた。
ぐだ男は今まで見たことない眼で男を見ると、そのまま走って家に向かって走り出した。

「……ほう。存外面白いものに出会えたな」

ぐだ男は帰った後すぐに玄関の鍵を閉め、カーテンを閉めてソファに座り込んだ。
私の体から離れた後、重い口調で言葉を発した。

「立香。あの人とは、関わっちゃいけない。きっと碌なことにならない」
「……いきなり言われてもわからないよ。事情を説明してよ、ぐだ男」

「それ、は……」

ぐだ男は口を閉じ、真剣な顔で悩み始める。それは私に真実を話していいのか迷っているように見えた。
うんうんと唸っているところを見て、ため息をつく。

「はぁ、もういいや。私に知られると不味いかもしれないことなんでしょ？」
「……ごめん」

「別に？ぐだ男がなんか隠し事してるのはこれに限ったことじゃないし」

ぐだ男は何かを隠しているのは分かっていたし、それを喋りたくないのも分かってる。多分あの男のことも、私に喋りたくないことに関係しているのだろう。

私もぐだ男には喋りたくないことも幾つかあるし、しょうがないことだと思う。けど。

私に心を許してくれていないようで、少しだけ悔しかった。

「はい、話は終わり！ほら、約束通り家事ちゃんとしてね！ゲームはそれから！」

「あ、忘れてた。えーと、洗濯と掃除と料理と～」

「お風呂は私が入るからね？絶対覗かないでね！」

「はいはい」

お互い話辛いことがあったら、すぐに話を逸らす。こういうところが似てるから、私はこいつと上手くやれているのかもしれない。

今はダメでも、いつかは話してほしい。いつかこいつが私に全部話してくれるようになるくらい、ぐだ男に信頼されたいな。

「ねぇ、立香。変な質問していい？」

「ん～？」

掃除や洗濯、ゲームも終わり寝ることになる夜、ぐだ男がまた変な

ことを言ってきた。

「変なことを言うのはいつも通りじゃん。それで、何？」

「……もしも、この世界が終わるとして」

「いきなりすごいスケールになったね」

仮定からすごい設定で少し驚いた。またいつもの冗談かな、とも思ったけどぐだ男の眼は真剣だった。だから私も、真剣に考えることにする。

「立香が頑張れば、世界を救える。けど、その頑張ることはすごく辛くて、死んじゃった方が楽かもしれないと思うかもしれないほど過酷で残酷だ」

「うん」

「もし頑張って世界を救っても、立香を恨む人が出てくるかもしれない。立香は悪くないのに命を狙われるかもしれないし、謂われない罵倒を言われるかもしれない」

「うん」

「……立香は、世界が滅びるのと自分が辛い思いをするの。どっちかを選択しなきゃならない時、どっちを選ぶ？」

少しだけ、考えて。一番重要なことを聞いていないので、質問する。

「ねぇ、ぐだ男。世界が滅びると、ぐだ男と一緒にいられなくなる？」

「そう、だね。一緒にはいられないかな、きっと」

「世界を救うために頑張るのって、ぐだ男が一緒にいてくれる？」

「……うん、いるよ。絶対に、立香と一緒にいる」

「なら、世界でもなんでも救っちゃうかな～」

辛い思いをするのはもちろん嫌だ。前までなら、もしかしたら世界が滅びようとそれを選ばなかったかもしれない。けど。

「ぐだ男と一緒なら、辛いことだって楽しい思い出になるから」
「……そっか」

ぐだ男は優しく微笑んで、私の頭に手を置いた。
触れないのだけれど、少しだけ心が温かくなった気がした。

ぐだ男君は足が速い／ぐだ男君は●●●

「……ねぇ、ぐだ男」
「ん？」
「私たちなんで飛行機乗ってるんだろ？」
「ん～……拉致られたからじゃない？」

現在、私たちはなぜか飛行機に乗ってなぜかどっかの土地に向かっていた。
おかしい、献血に協力しただけなのに。

「そういえばぐだ男、やたら献血のこと気にしてたよね？もしかしてこうなるって分かってた？」
「……ヒュ、ヒュヒュヒュ～」
「口笛吹けてないよ」

この野郎多分知ってやがったな……！
ぐだ男は目を泳がせつつ下手な口笛を吹いている、嘘が下手だなぁ。

「なんかレイシフト適性とかなんとか言ってたんだけど、一体私何されるんだろ……」
「何されるんだろうねぇ。あ、見てみて立香。鳥がたくさんいるよ」
「呑気だなぁ」
「いや、割と呑気じゃなかったりするよ？だって油断すればほら」
「へ？」

突然ぐだ男の姿が消える。いや、あれは消えたのではない。すごい勢いで後ろにぶっ飛ばされていった!?と思ったらまた同じ場所にいて、少し疲れた様子で額を拭った。

「ふぅ、危ない！置いてけぼりになるところだった！」
「いやいやいや何があったの今の!?」
「え？ほら、俺物体すり抜けて飛ぶでしょ？だから車とか飛行機に乗ると、ほら。なんだっけか、慣性の法則ってやつで、そのまま止まってた場合置いていかれるんだよね」
「いや待って。今まで電車とか一緒に乗ってたよね？その時はどうしてたの？」
「めっちゃ頑張って追いついてたよ？」
「言ってよ！言ってくれたら体貸したよ!?」
「あ、そっか。立香の体に入れば追いつかなくてもいいんだね！」

というわけで、着くまでの間ぐだ男に体を貸すことになった。
というか、つまりぐだ男はその気になれば飛行機に追いつくレベルで素早く移動できるということなのか。今更ながらぐだ男の新たな一面を知った。

「（ちなみに、本気出したらどれくらい早く移動できるの？）」
「ん？そうだね。立香に出会う前に一回地球一周しようと思ってしたら半日経たずにできたくらい？」
「（え、何それすごい）」

「立香？……眠っちゃったか」

自分の体を使われてるのに呑気だなぁ、なんて思いながら飛行機から降りる。

たしか、カルデアに入る時はシミュレートがあったはずだ。
原作ではアルトリア、クーフーリン、アーラシュだったか。本来なら、練習がてら立香にさせるのが良いのだろうけど。

「残念ながら、起こす方法も無いしなぁ。うん、これはしょうがないことだ」

まあ、本物のサーヴァントを動かす機会に恵まれているのに高揚するな、と言われても無理な話だろう。立香には少し悪いが、このテストは代わりに俺が受けることにした。どのくらい差異があるのかも確認しなければならない。

『――塩基配列　ヒトゲノムと確認。――霊基属性　善性・中立と確認』
『ようこそ、人類の未来を守る資料館へ。ここは人理継続保証機関カルデア』
『指紋認証　声帯認証　遺伝子認証　クリア　魔術回路の測定……完了しました』
『登録名と一致します。貴方を霊長類の一員であることを認めます』
『はじめまして。貴方は本日、最後の来館者です。どうぞ、良き時間をお過ごしください』

全てが問題なく進行しているのを見て、思わず苦笑いを浮かべる。
ああ、きっと当然なのだろう。俺と立香はきっと、ある一点を除いて、ほぼ全てが写し身のように一緒なのだろう。
当然だ、当然なのだけど……どうしようもなく、それが今後立香に起きるであろう運命（Fate）を確定づけるものであるように思えて、自分の不甲斐なさに嫌気が差してくる。

『……申し訳ありません。入館手続き完了まで後１８０秒必要です』
『その間、模擬戦闘をお楽しみください』

ようやく告げられた模擬戦の開始に、ポキポキと手を鳴らす。このまま始まらなかったら拍子抜けだった。立香の体に問題無し、魔力回路も通常運転、頭も回ってる。

『レギュレーション：シニア　契約サーヴァント：セイバー　ランサーアーチャー』

『スコアの記録はいたしません。どうぞ気の向くまま、自由にお楽しみください』

景色が切り替わる。眼の前に現れるサーヴァント達。相対するは巨大な体躯のゴーレム。

なんてことはない、ただの模擬戦だけど、どこか懐かしい感覚。

自分は今カルデアの門前にいるのだと、強く自覚する。

「さて。それじゃ、始めよう」

コマンドカードなんてものはない、ターンなんて概念はない、倒すか倒されるかの戦い。

だがしかし、なんてことはない。

藤丸立香（主人公）の味わう苦しみに比べれば、なんてことはないさ。

……眠ってしまっていたようだ。ぐだ男に体を貸している間は、どうにも居心地が良くて少しだらけてしまう。こう、身体を持っている故に感じる痛みや気怠さやその他諸々が全て無くなるので、どうしても落ち着いてしまう。

何回かそれでぐだ男に迷惑をかけてしまったので、気を付けなければな～と思っているのだけど、意思が弱いのであんまりうまくいかないものだ。

「フォウ？フォウフォーウ？」

それはそうと、妙に顔が重い。そして飛行機にいたはずなのに、なぜか寝ころんでる感覚があるんだけど。あれ、ぐだ男どこ行った？

「キュー？フォウフォーウ！」

「きゃぁ!?」

ほ、頬を舐められた!?ガバッと起き上がり、眼を開く。目の前にはウサギだか犬だかわからないフォウと鳴く謎生物、そして……。

「……あの、朝でも夜でもありませんから、起きてください、先輩」

「へ……？」

淡い桜色の髪をした、美しい少女が私を見ていた。

「……つ、つまり先輩は拉致同然にここに連れてこられたというわけなんですか!?」
「まあ、うん。ていうかあれは拉致そのものだと思う。参っちゃうよね、ほんと」
「被害者のはずなのにとても軽いですね、先輩」

私のことを先輩と呼ぶ少女、マシュによればこの場所の名称は人理保証機関カルデア。そしてこの施設はレイシフト適性というものが高い人材を欲しているらしく、あの献血でレイシフト適性が高かったらしい私は、無理やりこの施設に連れてこられた、と。
いろいろ唐突な情報が出て頭が混乱するが纏めればこんな感じだろう。

「おそらく、入館時のシミュレートを受けた際に、慣れない霊子ダイブで半ば夢遊状態でここまで来たのだと思います」
「な、なるほど」

夢遊状態っていうか、多分ぐだ男がここまで私の体で歩いてきたんだと思うんだけど……なんで私が起きる前に私の体から離れたんだろ?普段なら、私が寝てても私が起きるまで代わりに体を動かしてくれてたんだけど。
いつだって一緒にいた相棒がいない状況に、少しだけ心細くなってしまう。そんな私の不安気な様子を察したのか、マシュが元気づけるように言う。

「急にこんな場所に連れてこられて、こんな話を聞かされても困ってしまうと思います。けど、安心してください!先輩がこのカルデアに慣れるよう、私が先輩のサポートをします!」
「えっと、それはうれしいんだけど。……なんで先輩?私の立場的に、

マシュのが先輩なんじゃ……ってわぁ!?」
「先輩!?」

マシュと話していてずっと疑問だったことを口にしようとしたとき、視界の端から見知った顔がにゅっと顔を出す。私を置いてどっかに行ってたらしいぐだ男だ。
ぐだ男は舌をペロリと出し、『やっちゃった☆』とでもいうように頭をコツンと叩く。その様子を見て青筋が立った私は悪くないと思う。
「せ、先輩大丈夫ですか!?もしや、まだ霊子ダイブの影響で体調が……」
「だ、大丈夫!大丈夫だから、うん!それで、私はこれから何すればいいのかな!?」

頭のおかしい人だとか思われたくないので急いで話を逸らす。ぐだ男はいつものように私の横でピタリと待機し、慌てる私の様子を見てニコニコとほくそ笑んでる。この野郎。
「そうですね、今からオルガマリー所長による説明会が行われます。そこでおおよその説明をオルガマリー所長がしてくださるので、それに出席した方がいいと思います」
「そっか。それじゃあ、さっそく行ってみるね。……えーと、案内してもらっていい、かな?」
「勿論です、先輩!」

先導してくれるマシュに付いていきながら、マシュに聞こえないようぐだ男と小声で話す。
「ちょっと、今までどこに行ってたの?なぜか廊下で寝てたんだけど、私」
「アハハ、ごめんごめん。ちょっと用事が出来たからしばらくの間留

守にしてたんだ。それで、そっちはあの子と仲良くなったみたいだね？」
「仲良く……なってるのかな？マシュは私に良くしてくれてるみたいだけど、なんで先輩って呼ばれるのかも分からないし……」
「ん～、そうだね。……立香に危険性が全く感じられないから、とか？」
「なんでそれが先輩って呼ぶ理由に繋がるのよ……」
「さあね？あ、ほら立香。あんまり喋ってるとマシュに不審がられるよ？喋るなら俺みたいな男じゃなくて、かわいい女の子と喋りなよ」

人前で喋るとたしかに不気味なので、ひとまず喋るのをやめる。しかし、初対面のマシュに話を振るのは少し気恥ずかしいし、実は滅茶苦茶眠いので話すのをやめると立ったまま寝てしまいそうだ。

「先輩、着きました。……その、本当に大丈夫ですか？」
「へーき、へーき……」

あまり働かない頭を無理やり動かし、マシュに促され空いている席につく。オルガマリー所長というのはこの白髪の美人さんだそうだ。若いのに所長なんてすごいなぁ。

「時間通りとは行きませんが、全員揃ったようですね。特務機関カルデアにようこそ。所長のオルガマリー・アニムスフィアです」
「あ、友達いない説がある所長だ」
「……！」

あ、あっぶない!?急に何を言い出すんだこのぐだ男は！たしかにきつそうな性格で友達少ないかもしれないが……！不意打ちで変なことを言うのはやめてほしい、ほんとに。

「……次の遅刻は許しません。私の命令は絶対ということを覚えてお

くように」

しまった、吹きだしかけたせいで睨まれた。おのれ、ぐだ男のせいだ。だがおかげで意識は覚醒した、これならなんとか説明が終わるまで堪え……。

「では話を戻します。あなた達は各国から選抜あるいは発見された……そこのあなた、なんでそんな笑いを堪えているのかしら？」

「い、いえ……！そんな、ことは……！」

こいつぅ!?所長の腹から真顔で出てくるんじゃない！なんだ、なんでこのタイミングで私を笑わせようとするんだ!?ダメだ、これ以上何か来たら堪えられない……！

「呆れたわ。どうやらあなたはこの状況を理解できていないようね？いい、あなたは何千、何万の確率の人間の中で幸運にも～～～～」

不味い、所長の話が全然頭に入ってこない。ぐだ男が次何をするのかに意識が割かれる。おのれ、こいつ一体何をするつもりだ。

ぐだ男はおもむろに何かを思いついたように、所長のほぼ真後ろに立つ。そして、一歩、また一歩と所長に近づき、その身体をくっつけさせ。

「女体化した俺」

「ぶっはぁ!?」

顔だけ突き出し、オルガマリー所長の体にぐだ男の頭がくっついているとかいう状況に思わず噴き出した私は、その後所長にびんたされて追い出されました。

「だ、大丈夫ですか？先輩」
「大丈夫だよ、マシュ。滅茶苦茶痛いけど」

横で爆笑するぐだ男を思い切り殴りたい衝動に襲われながらも、なんとか耐え忍ぶ。お前家に帰ったら覚えとけよ、ゲーム全部捨ててやるからな。
何はともあれ、私は最初のミッションとやらから外され自室待機を命令されてしまった。マシュに案内され、自室に向かっている途中だ。

「それにしても、なんであそこで笑ってしまったんですか？私には笑う要素が分からなかったのですけど……」
「あーいや、ほら。思い出し笑いというか、なんというか。人には笑いたくなる時があるものなんだ」
「なるほど、そうなんですね。勉強になります！」

あれ、鵜呑みにしちゃった？なんだか幼い子供をだましているみたいでとても罪悪感が……！

「わー、悪い大人だぁ」

シャラップ元凶。

「お待たせしました、こちらがマイルームです。できれば状況説明をしておきたいのですが……」
「ああ、いいよいいよ。適当な人に聞くから。あの部屋に戻らなきゃいけないんでしょ？マシュはたしか、えーと」
「Ａチームですね。先輩に負けず劣らず、個性豊かな人が揃っていま

すよ」
「わー、私もうマシュから変人認定受けてるんだ～」
「ふふっ。それでは、私はこれで。運が良ければ、またお会いできると思います」
「うん。またね、マシュ」

さて、マシュと別れたしこいつに散々文句を言ってやろう。ここに来てからの災難は９割こいつのせいだ、許してもらえると思うなよぐだ男……！
そう意気込みを新たに扉を開けると。

「はーい、入ってまー……ってうぇえええ!?誰だ君は!?ここは空き部屋だぞ、僕のさぼり場だぞ!?誰のことわりがあって入ってくるんだい!?」

……そこには、白衣を着た男性がおかし片手にくつろいでいる姿があった。

「女の子の部屋でくつろいでいる男。なるほど、ギルティ！」
「もしもしポリスメン？」
「ちょっと!?」

怪しい男を見かけたら１１０番、これ常識です。

ぐだ男君は助けない／立香ちゃんは助けたい

誰も近づかないとされているかつて前所長が談話室として使っていた一室、ロストルーム。
本来なら誰もいないはずのその部屋に、一人の男性が入ってくる。
「……ここならばいいだろう。姿は見えないが、いるのだろう？」
そう言った男、レフ・ライノールの眼前に独りでに紙が浮かび上がる。異常なこの光景を前にしても、彼の表情は崩れることは無い。それどころか、笑みを深くした。
「それで対話を試みるということか。いいだろう。さて、単刀直入に言おう。我々と手を組まないか？」
『断る。俺はお前達などとは違う』
一枚の紙に描かれた簡素なその文に、思わず男は嘲笑する。何を馬鹿な、と。
「いいや、同じだとも。君が彼女の体を借りている時に見せたあの目は確かに我々と同じだった。我々と同じ、『何かに失望した者の目』だった。それが世界であれ人類であれ、運命（Fate）であれ。君と我々の本質はそう違わないと思うのだがね」
男は思う。あの目は、あの場所で出会った自分が見たあの目は。自分たちと同じであると。何かを見、何かを知り、何かに失望してしまった者のみが見せる眼であると。
「君がどのような存在で、どのようにして生まれたかにはあまり興味はない。だが、我々は君に興味を抱いているんだ。自分たち以外でそ

の目をした何かに出会い、そして――その目をした者がなぜ、人間などと共にいるのかを」

強い風が吹く。室内だというのに台風の真っただ中のようなその暴風に、レフ・ライノールは思わず帽子を押さえる。

「答える気はないと。いいだろう、今は何も聞かないでおこう。ああ、だがしかし――」

獣は笑う。自分達とは違うと嘯いているこの何かは、しかし。これから起こる何人もの人間が死ぬ行為に対し、なんら対策をしないその歪みに気づき、嗤う。

「なんとも愉快な道化だね、君は」

男が部屋から出ていくのを、『何か』は止めなかった。

そのことが、男にとって何よりも愉快だった。

「なるほど、君が最後のマスター候補の藤丸立香ちゃんか。初めまして、僕は医療部門のトップ、ロマニ・アーキマン。なぜか皆からはドクターロマンと略されててね。理由は分からないけど言いやすいし、君も遠慮なくロマンと呼んでくれていいよ！……ところで、これ解いてくれるかなぁ？」

「いやー、すいません。てっきりうら若き乙女の部屋に勝手に入り込む性犯罪者かと思いまして」

「やめて!?女性の部屋だとは知らなかったんだよ～！」

現在、私の部屋を占領してた男性、ドクターロマンが簀巻きにされた状態で地面に転がっている。いやーしかしまさかの医療部トップとは驚いた。カルデア、濃い人が多いなぁ。

偉い人を縛ったままなのも不味いので、拘束を解いてあげる。

「ふぅ、もうすぐで豚小屋にぶちこまれるところだった。あ、紅茶飲む？お菓子もあるよ」

「一応ここ、私の部屋なんですけどね。どっちもお願いします！」

「はいはーい」

ほほう、これはなかなかお高いお菓子。しかしこの人、どことなく緩いというか、テンションがぐだ男に似ているというか。なんとなく、気分が落ち着く。

「ぐだ男、この人の親戚だったりしない？」

「何言ってるの、性格全然違うでしょ？」

小声でひそひそと話し合っていると、ドクターロマンが私のテーブルにお茶を出してくれる。

「そういえば、君はなぜこの部屋に？今は所長の説明会があるはずだけど」

「あ、ちょっと所長を怒らせて追い出されちゃいました。いやー、やらかしましたね！」

「うん、すごくやらかしちゃったね～」

ぐだ男のせいだからね？

「なるほど、なら僕と同じだね！いやー、実は第一実験の開始までにやることが無くてね！コフィンに入ったマスターのバイタルチェックは機械がやった方が正確だし、やることなくてそわそわしてたら『ロ

マニが現場にいると空気が緩むのよ！』って言われて所長に追い出されちゃってね。仕方なくここで拗ねてたんだけど、立香ちゃんが来てくれて助かった！地獄に仏、ボッチにメル友とはまさにこのこと！というわけで一緒にお茶飲みながら世間話でもしよう！」
「そうですね。この部屋元々私のですけど」
「そこは気にしない方向で！」
「フォウフォウ」

　というわけで、ドクターロマンに私がここに来るまでの経緯とか、マシュとの出会いとかを話した。あと、ドクターロマンからはある程度ここに関することを説明してもらった。ていうかいつの間にいたんだこのへんてこな獣。マシュによればフォウ君と言うらしいが。

「なるほど、この施設は標高六千メートルの雪山に作られた地下工房と。いろいろスケール大きいなぁ」
「僕らから見てもすごい場所だし、一般人が驚くのも無理はない。まあ、それでこの施設が建てられた目的だけど……」

　ピピっ、という音が部屋に響く。そしてどこからか男の声が聞こえてきた。

『ロマニ、あと少しでレイシフト開始だ。万が一に備えてこちらに来てくれないか？Aチームは万全だが、Bチーム以下、慣れてない者に若干の変調が見られる。おそらくは不安から来るものだろう』
「なるほど、それは気の毒だな。ちょっと麻酔をかけに行くよ」
『ああ、急いでくれ。今医務室だろ？そこからなら二分でつくはずだ』

　そう言って、声は途切れた。……どこか聞いたことある声だった気がする。それと、ぐだ男の顔が少しだけ険しくなった。理由は分からないけど、何か嫌な予感がした。

「……しまったな。ここからじゃ急いでもあと五分はかかるぞ」
「さぼってた天罰が下ったんですかね？」
「アハハ、それは言わないでほしいなぁ。けどまあ、Ａチームは大丈夫なようだし、多少遅刻しても怒られないだろう、多分！」
「わー、ダメな大人だぁ。まあ私も学校結構サボったりしてましたから人のこと言えないけど」
「学校さぼってするゲームは蜜の味だったよね～」

中学生時代よりはましとはいえ、私も結構悪い奴になったものだ。ぐだ男がやってるゲームを眺めて茶々入れるのは結構楽しかったです。

「お喋りに付き合ってくれてありがとう、立香ちゃん。落ち着いたら医務室に来てくれ、今度は美味しいケーキをごちそうするよ」
「楽しみにしてますね、ドクターロマン」

そうやって、ドクターロマンを見送ろうとした、その時だった。
急に周囲が暗くなり、大音量の警報が響く。

『緊急事態発生。緊急事態発生。中央発電所、及び中央管理室で火災が発生しました。中央区画の隔壁は９０秒後に閉鎖されます。職員は速やかに第二ゲートから退避してください』
「……へ？」
「……」
「今のは爆発音か!?いったい何が……モニター！管制室を映してくれ！」

ドクターロマンが、焦りながらも迅速に対応している横で、私は何がなんだか分からず立ち尽くすしかなかった。しかし、画面に映し出された燃え上がるその部屋には見覚えがあった。
――説明会を受けた場所。あの子（マシュ）がいる場所……！

「立香ちゃん、すぐに避難してくれ！僕は管制室に向かう。もうじき隔壁が閉鎖する、その前に君だけでも避難するんだ。いいね！」

ドクターが部屋から出て管制室に向かう。

……ドクターからは、逃げろと言われたけど。

「……ぐだ男。どうすればいいかな？」

「ん？……そうだな」

ぐだ男は私の眼を見る。こいつは何かと、私が何を思っているか見通すようなことをする。だからきっと、私が何をやりたいかも理解しているのだろう。なぜか、少し寂しそうに目を細めてぐだ男は言った。

「立香のやりたいことをやりな。僕もついて行ってあげるさ」

「フォウフォウ！」

「フォウ君も行けって行ってるみたいだしね！」

「ありがと。このまま逃げるのは、女がすたる！」

部屋から出て、ドクターロマンの後に続く。ドクターロマンは私に気づきギョッとした顔を浮かべ、慌てて逆の方向を指さす。

「いや何をやっているんだ君は!?方向が逆だよ、第二ゲートは向こうだよ!?」

「人手があった方が助かるでしょ？それに、あそこには知り合った子もいるんです！」

「会ったときから思ってたけど、君って奔放だね!?言い合ってる時間も惜しいから手を借りるけど、隔壁が閉鎖するまでには戻るんだよ！」

「善処します！」

管制室に入ると、凄まじい熱気が伝わってきた。燃える盛る部屋、落ちる瓦礫、黒い煙。それがトラウマと被り一瞬だけ躊躇するが、マシュのことを思い出し一歩踏み込み、中に入る。

「クソ、ダメだ！生存者はいない、無事なのはカルデアスだけか……！おそらくは、ここが爆発の基点。これは事故なんかじゃない、人為的な破壊工作だ！」

「人為的って……」

それはつまり、こんなことをするように仕込んだ誰かが、このカルデアにいたということ。誰がやったのかは知らないが、大勢の人を殺すような行為を行った犯人に怒りが湧いてくる。

『動力部の停止を確認。発電量が不足しています。予備電源の切り替えに異常あり、職員は手動で切り替えてください』

「僕は地下の発電所に行く。カルデアの火を止めるわけにはいかない。君は急いで、来た道を戻るんだ。いいか、絶対だよ!?」

「分かりましたから、ドクターロマンも早く！」

「絶対だからね!?君にはなぜか不安を覚えるんだよなぁ！」

「勘がいいねぇあの人」

「フォウ」

おっとそれはどういう意味だ幽霊とへんてこ獣。

ドクターが部屋から出た後、アナウンスが再度響き渡る。

『システム　レイシフト最終段階に移行します。座標　西暦２００４年　１月　３０日　日本　冬木』

『ラプラスによる転移保護　成立。特異点への因子追加　確保』

『アンサモンプログラム　セット。マスターは最終調整に入ってください』

「……ぐだ男！あの子を一緒に探して！」
「いいのかい？このままじゃ、逃げられなくなる」
「そうなったらその時に一緒に考えよ！今は、あの子のことを考える！それに危なくなったら助けてくれるでしょ？」
「アハハ、まったく無茶をする相棒だなぁ！」

ヒュン、と一瞬ぐだ男が消えたかと思えば、すぐに戻ってくる。

「見つけた、あそこ！」
「でかした！」
「フォウフォーウ!!」

見つかったマシュに駆け寄る。けど、マシュの身体を見て絶句する。
瓦礫による負傷で大量に血が出ている。人間の身体からどれだけ血が出ると死ぬかは分からないけど、この状態が絶望的だってことくらいは、素人目にもわかった。

「マシュ……！急いで助ける、ちょっと待ってて！」

それでもと、マシュを押しつぶしていた瓦礫を必死にどける。しかし、マシュは痛みを堪え言う。

「私のことはいいです、先輩。この傷じゃ、もう助かりません。先輩は、早く、逃げないと……」
「死にそうな人を置いて、逃げるなんてできるかぁ!!」

もう、あんなのは懲り懲りだ。私は変わった、勇気ができた。もう、逃げない！
必死に瓦礫をどかしている私の耳に、再度アナウンスが聞こえてくる。

『観測スタッフに警告。カルデアスの状態が変化しました。シバによる近未来観測データを書き換えます。近未来１００年までにおいて、人類の痕跡は　発見　できません』
『人類の生存は　確認　できません』
『人類の未来は　保証　できません』
『中央隔壁　封鎖します。館内清浄開始まで　あと　１８０秒です』
「煩いなぁ黙っててよ！」

隔壁が閉鎖したって構うものか。絶対に助ける。絶対に……！

「隔壁、閉まっちゃいました……。もう、外には……」
「なんとかなる、なんとかする！私たちが、絶対に！だから諦めないで、マシュ！」

鳴り響くアラートも、煩いアナウンスももうどうでもいい。
私が今気にするのは、マシュとぐだ男と、あとフォウ君の声で充分！

「……あの、せん、ぱい」
「どうしたの、マシュ」
「手を、握ってもらっていいですか？」
「そんなことなら喜んで」

ギュっ、とマシュの手を握る。……自分の恐怖が伝わっていないか心配だ。心臓の鼓動が煩い、死ぬかもしれないと何度も何度も考える。
そんな私の手を、誰かが握る。
「ほらほら、そんな怖がらないで。なんとかなるさ。立香が言うと信用ならないけど、俺が言うと信じられるだろ？」

「……ほんと、もう……！」

こういう時にこういうことをしてくるから、こいつは……！

もう、恐怖はない。なんとかこの状況を切り抜けるために、頭が回り始める。

『ファーストオーダー開始まで、あと　３　２　１　』

『全工程完了（クリア）。ファーストオーダー　実証を　開始します』

突然、光が溢れていく。

意識が急激に暗くなり、気絶する寸前に聞こえてきたのは。

「……ずっと、ずっと一緒だとも。君が望むのであれば、ずっと」

いつも一緒にいる迷惑な幽霊の、変に安心する声だった。

立香ちゃんは寂しがり／ぐだ男君は神出鬼没

燃え盛る業火、崩れ落ちる家屋、泣き叫ぶ誰か。
現実感の無い光景に、あの時の私は何もできなかった。
分かったのは、たった二つ。私だけがあの火事から助かったこと。そして、私の両親を含む大勢の人が、この火事が原因で亡くなったこと。
誰も助けてくれなかった。誰かに助けを求める方法なんて知らなかった。何の力も持たず、反撃もできず、ただ自分が悪いのだと思い込むことでしか生き延びられなかった。
両親が残してくれた遺産や祖父母が送ってくれる仕送りで金にはあまり困らなかったが、それ以上にあの火事で助かったのが自分一人であるという事実だけが、私には重くのしかかった。
ずっとずっと、そうやって生きていくのだと思っていた。

『俺が見れるの？ラッキー、ようやくまともにコミュニケーションが取れるね！』

あいつが現れるまでは。

『ほらほら、涙なんて流さない。藤丸立香は涙よりも、笑顔が似合う女だろ？』

私が悲しんでる時も、笑ってる時も、泣いている時も。いつでも一緒にいて、それが当たり前になっていた。本当の名前も、なぜ幽霊になっているのかも、なぜ私にだけしか見れないのかも。全部が全部分からなかったけど、それでも良いと思えるくらいあいつと一緒にいるのは居心地が良くて、救われた気がした。

『……ごめんね、立香。お別れ、みたいだ』

だから、こんな夢は間違いだ。

『お前なら、この先もずっと俺がいなくたって進んで行ける』

ずっと一緒だって、約束したんだ。

『……バイバイ、立香』

「――私を、置いて行かないでよ!!」

――――――――

「フォーウ!!」

「……先輩？」

「え、あ……」

夢から覚める。最悪な目覚めだ。すぐに、周りを見渡して――ぐだ男がいないことに気付く。

心臓が早鐘を鳴らし、汗がドッと噴き出す。まさか、そんな。

「大丈夫ですか!?やはり、初めてのレイシフトの影響で何か異常が――」

「いや、大丈夫。……うん、大丈夫、だよ」

落ち着け。ぐだ男が私を置いて消えるなんて、あるもんか。あいつがふらりとどこかに行ったことなんて、一度や二度じゃなかったろう。何かが理由で、少しの間離れているだけだ、きっと。

改めて、周囲を見渡す。落ち着いてみてみると、辺りはどうやらカルデアの管制室ではないようだった。業火が広がるという点においてはあまり変わりないが、こちらは部屋ではなく外、それも見た感じ町のように思える。

そして、マシュとフォウ君。フォウ君はまあ、いつも通りの謎生物

だが――マシュがかなり様変わりしてる。こう、なんて言うのだろうか。ピッチリとした、露出の多い鎧？みたいなのを着て、巨大な盾を軽々と持っていた。

「マシュ、その恰好どうしたの？それに、ここは一体……」

「はい。先輩もおそらくは混乱しっぱなしだと思うので、説明をしたいところなのですが――」

どこからか音が響く。その方向を見てみると、なんと骨が歩き、そして武器を持ち自分達のところへと歩いてきていた。どんなファンタジーよ、と思うが私の相棒もそんな変わらなかったっけ。

『ＧＩ、ＧＡＡＡ!!!』

「先輩……いえ、マスター。指示をお願いします！この状況を二人で切り抜けしょう！」

「ま、マスター？指示？」

何がなんだか分からないが、なんにせよこの状況を切り抜ける、というのには同意だった。それに、指示にはほんの少しだけ自信がある。私がどれくらい、あの便利幽霊（ぐだ男）を顎で使ったと思っている！伊達に幽霊と長く付き合ってはいない！

「分かった！行くよ、マシュ！」

「はい！」

戦闘などしたことは無いが、ぐだ男がやってるアクションゲームを見てなんとなくだがやり方は分かる。まず、マシュの武器？はあの大盾らしい。

それに対し、あの骨……スケルトン達が持っているのは剣。そして見るからにボロボロなあの刃が、マシュの持つ盾を壊せるとは思えない。ならば。

「マシュ、まずは盾を構えて突進！その後、相手に背後を取らせないように動いて！」
「――――！了解です！」

ボッ！音にすればそんなくらいの勢いで、マシュが地を蹴りスケルトン達に突進する。猪も真っ青なその一撃を喰らったスケルトンの内1体は、バラバラになり砕け散る。
続く2体目がマシュを切り裂かんと剣を振るが、前方からの攻撃ほど受けやすい物も無い。簡単にそれを防ぎ、剣を弾き盾で殴りつける。
かかった時間は5秒、いやもっと短いか――――瞬殺だった。
「ふぅ、戦闘終了。不安でしたが、なんとかなりました。素晴らしい指示でした、マスター」
「う、うんお疲れ。けど、今のは一体」

明らかに、人間の出していい力ではなかった。まるで漫画やアニメのような強さ。あのスケルトン達はあまり強そうには見えなかったが、それを抜きにしてもマシュの戦いは常軌を逸していた。

「はい。それは、私が――――」
『ああ、やっと繋がった！もしもし、こちらカルデア管制室だよ！聞こえるかい!?』
「あ、ドクターロマン！」
『立香ちゃん、やっぱり君もレイシフトに巻き込まれていたんだね。コフィン無しでよく意味消失に耐えてくれた。けど、マシュ！その恰好は一体!?』
「はい。この恰好は――――」
『ハレンチすぎる！僕はそんな子に育てた覚えが無いぞ!?』
「は、ハレンチではありません！これはいろいろ事情があって――――」

その後のマシュやロマンからの説明を簡単にまとめると、マシュがああなったのはとある英霊という幽霊の上位互換みたいな存在から力を借り、その結果マシュ自身がサーヴァントというのになったというものだった。ちなみに幽霊の力を借りられるのはマシュだからであって、私じゃダメらしい。ぐだ男の力を借りて戦うとか面白そうと思ったのは内緒だ。

『なるほど、しかしマシュがサーヴァントになったというのなら話は早いね。立香ちゃん。今現在、マスターとして活動できるのは君しかいない。君には、マシュのマスターとして……そして、人類最後のマスターとしてその特異点で活動してもらわなきゃならない』

「えっと……」

『何も説明できず、こんなことになって申し訳ない。けど、安心してくれ！君はサーヴァントという、人類最強の兵器を持っている』

「あの、ドクター。人類最強、というのは言い過ぎかと。他のサーヴァントの方ならともかく、宝具を使用できない私では……」

『立香ちゃんにサーヴァントがどれほどの存在かを理解してもらえればいいんだ。ただし、サーヴァントには弱点がある』

「弱点？」

『サーヴァントは、魔力の供給元となる人間……マスターがいなければ消えてしまうんだ。君はマシュと契約を結び、マシュのマスターとなっている。それはつまり、君がいなければマシュが活動できなくなるということだ』

「すいませんドクターロマン！ほとんど分かりませんね！」

『うん、だろうね！ごめんね!?ほんとなら色々説明したいんだけど、どうやらシバが安定してないみたいだ！もうすぐ通信が切れる！』

うん、相棒の存在である程度怪奇現象に慣れてる私だけど色々と新ワードが多すぎるからね！一気に理解できるわけないでしょこんなの！自慢じゃないけど私はぐだ男より勉強は苦手なんだぞぉ！

『いいかい、二人とも。そこから2キロほど移動したところに霊脈の強いポイントがある。そこでなら通信も安定するだろうから、まずはそこに行ってほしい。いいかな、くれぐれも無茶な行動は控えるように。こっちでもできる限り早く電力を――――』

「……通信、途切れました」

「フォウフォウ」

「……えーと、とりあえず指示された場所に行こうか、マシュ」

「はい。これからもよろしくお願いします、マスター」

……やっぱり、視界の端であいつが茶々を入れてこないと落ち着かないな。

――――――

「キャアーーー!?」

マシュ、フォウ君と一緒に指定されたポイントに向っている途中、甲高い女性の悲鳴が聞こえた。この声、たしか管制室で聞いた事がある。所長だ！

「急ぎましょう、先輩！」

「うん！お願いねマシュ！」

マシュに抱えられ移動した先には、やはりというかスケルトン達に追いかけられている所長の姿があった。生き残りが私たち以外にもいたことに少しホッとする。

「なんでなの!?なんで私ばっかりこんな目に合わなきゃいけないのよ！レフ、助けてレフ！いつだって貴方が助けてくれたじゃない！」

大事な人に助けを求める姿が、大事な人が隣にいない恐怖が。今の自分と重なった。
うん、このまま見ていられるわけもない！

「マシュ、ＧＯ！」
「はい！」

―――――

「ちょっと、なんで貴女みたいな一般人がマシュと契約してるの!?サーヴァントと契約できるのは一流の魔術師だけ、それがなんで私の顔見て笑うような子が！手の令呪を見せびらかして、そんなに私に自慢したいの!?」

助けたらなぜか怒られました。私はあなたの顔を見て笑ったのではなく相棒の姿を見て笑ったのです、と訂正したいけど頭のおかしい人と思われるだけというジレンマ。おのれぐだ男！
あと今更だけど、手に赤い模様がついていた。いろいろと大変すぎて気づかなかったけど、これは令呪というらしい。

「お、落ち着いてください所長！経緯を説明しますと――――」

マシュが簡単に私たちにがここに来た経緯を説明する。それを聞いて、納得はしていないがとりあえず矛先を納めてくれたようだ。

「……なるほどね。だいたいのことは理解したわ。それで、カルデアと連絡を取るためにベースキャンプを探していて、ここにたどり着いた、と。……あなた達と私がここに来れた理由は、コフィンに入ってなかったから、でしょうね」
「というと？」
「コフィンにはレイシフト成功率が９５％以下になると電源が落ちる

機能、要はブレーカーがあるの。あの事故でそれが９５％以下になったことで、コフィン内のマスター達はここに来ることはなく、コフィンの外にいた私たちが生き残った、ということなのでしょう。おそらく、ここにいるのは私たちだけよ」
「流石の推理です、所長」
「頼りになります！」
「ふ、ふん！あなたと違って私はエリートだからね！ここが違うのよ ここが！」

トントン、と頭を叩くオルガマリー所長。なるほど、この人との付き合い方が分かったぞ。褒めておけば機嫌が良くなるからおだてれば割と良好な関係を築けると見た。かわいい。
あとこれは本人に言ったら怒られそうだけど、大事な人との関係がすこーしだけ似てる気がする。この人と相棒トークをすれば案外仲良くなれるかもしれない。

「何はともあれ、藤丸立香。あなたにはここから私の指示に従ってもらいます。マシュ、盾をこの地面に設置しなさい。宝具を触媒にして、召喚サークルを設置するわ」
「了解しました、所長」

でかい盾、宝具というらしいものを地面に設置する。すると盾を中心に青い魔法陣のようなものが広がり、クルクルとその魔法陣が回り始める。

「これは、カルデアにあった召喚実験場と同じ……」
『シーキュー、シーキュー。もしもーし！よし、通信が戻ったようだね！これで――――』
「ちょっと！なんであなたが指揮を執ってるのよ！レフは、レフはどうしたのよ!?」
『げぇ、所長!?』

その後、ドクターロマンがキレられたり情報交換が行われたり所長が指示出したりドクターロマンがキレられたりした。

――――――――

「さて。ひとまず、この特異点を調査することになったけど。……マシュ一人だと、少し戦力が心配ね。少し不安が残るけど、サーヴァントをもう一騎召喚しましょう」
「サーヴァントを召喚、ですか？」
「藤丸立香。サーヴァントについてはどれくらい知識があるかしら？」
「てんでさっぱりです！」
「でしょうね」

所長がため息をつく。申し訳ないが、一から説明してくれないと何も分からないので説明してもらう。
サーヴァントとは魔術の中でも最上級の奇跡、神話や伝説で語られる英雄を召喚し使い魔として使役し、兵器として運用する超すごい儀式らしい。

「凄いざっくりにまとめたわねあなた。クラスの説明とかちゃんと聞いてた？」
「聞いてましたけど、あんま理解できませんでした……」
「しょ、しょうがないですよ先輩！色々と難しい魔術用語が多かったですしね！」
「ちょっと！それ私の説明が悪いってこと!?……まあ、いいわ。藤丸立香、まずは召喚サークルの中心から少し離れた場所で、私が言う詠唱を唱えなさい」

「所長がそのサーヴァントを召喚すればいいのでは……」
「触媒も設備も無い場所でサーヴァント召喚なんて私がするわけないでしょう？サーヴァントの中にはマスターの命令に反する英霊もいるし、触媒が無いとそういう英霊も召喚される可能性が出てくる。私のような魔術師には、最高の環境が整って初めて――――」
「所長はマスター適性が無いので、サーヴァントを召喚することが難しいんです」
「ちょっとマシュ!?」

適性とかがあるんだな、と納得しながら怒るオルガマリー所長をなだめ、詠唱を行う。
ゆっくりと、所長の詠唱を真似し腕に力を籠める。不思議な感覚が手に集まり、何かが焼けるように熱くなる。少しだけ苦痛が出るが、それを堪え詠唱を続ける。

「抑止の輪より、来たれ。天秤の守り手よ――――！」

――――右手の令呪が光り輝く。
魔法陣の中心に表れたそのサーヴァントは、黒い鎧を身にまとう騎士。殺意と憎悪によって身を焦がし、ただ一つの目的のためにあらゆる全てを打ち砕く狂気に身を落とした最高の騎士。
そう、それは――――。

「Ａｒｒｒｒｔｈｕｒｒｒｒｒ!!!」
「わあああああああ!?なんかすっごい何かを吸い取られてる気がする!?なんかすっごいだるい!?」
「ば、バーサーカー!?落ち着いてください、先輩！とりあえず真名の確認などを……！」
「ちょっと、暴れさせないでね!?令呪使ってでもさっさと沈めなさい！」
「アハハ、ランスロットかぁ。大変そうだね～」

「いやいつの間にいたの!?」

いつの間にか私の後ろにいたぐだ男に怒鳴りながら、私は何か……多分魔力ってのが吸い取られる感覚で本日三度目の眠りについたのであった……。

やっちゃえバーサーカー！

藤丸立香です。気絶して起きたら召喚したサーヴァントが正座してました。

あと、召喚した時は出てた黒い霧も今は出てないみたいです。

「いいですか、バーサーカーさん！先輩はついさっきマスターになったばかり、それに魔力量も少ないのです！あなたが魔力を持っていこうとするとすぐに気絶しちゃうくらい少ないんです！そこのところをちゃんと理解した上で戦ってください！いいですね！」

「ｒｒｒｒ……」

「……これが、この情けない姿がサーヴァント……」

「あ、おはよう立香。なかなか面白いことになってるよ～」

「うん、だろうね。見れば分かるよ」

とりあえずぐだ男に色々言いたいことはあるのだが、それは後にしよう。今はいてくれるだけで心強い。

さて、とりあえず私はなんで気絶したのだろうか？

「あ、先輩！お目覚めになりましたか……よかった。先輩は、サーヴァントの中でも特に魔力を必要とするクラス、バーサーカーを呼んでしまい魔力不足で倒れてしまったんです。カルデアからの魔力供給もあるはずですが、それでも先輩の身体が魔力を吸われる衝撃に耐えきれず気絶してしまったようで……」

「魔力が吸われるのってあんな感じなんだ……。なんかこう、自分の生気みたいなのが奪われてくみたいな感じだったなぁ」

「まったく、初めて魔力を扱うにしても気絶するなんてね。私がマスターならばあんな醜態は晒さなかったのだけど。ひとまず、自分のサーヴァントのステータスを見てみなさい。真名やステータス、宝具なんかもそれで分かるはずよ」

「ステータスを見るって……あ、意識すれば案外簡単に見れるんだ。

ええと……真名はランスロット、らしいです」
「……ランスロット!?あの円卓最強の騎士ランスロット!?あなたそんなのを呼んだの!?大当たりじゃない……なんでこんな一般人が」

ぐぎぎ、と私に視線を向けてくるオルガマリー所長。だけど、ステータスというのを見てみればBとかCとかが多いようだ。宝具だけはAと出ているのだけど……。
ステータスや宝具を伝えると、所長は「まあ当然よね」と言って少し怒りを抑えてくれた。

「サーヴァントのステータスはマスターの力量によって左右されるわ。あなたみたいな三流マスターがいくら最高峰のサーヴァントを呼んだところで、全力なんて出せるわけない。それでもバーサーカーの狂化と元の強さで、サーヴァントとしては一級品だけど……。ひとまず、魔力消費が多い宝具は絶対に使わせないようにしなさい。下手をすれば、魔力切れで死にかねないわ」
「死……!?は、はい。肝に命じときます」
「サーランスロット、分かりましたか?」

ランスロットはぶんぶんと首を縦に振っている。……なんかマシュに尻に敷かれてないだろうか、バーサーカー。女の子に弱かったりするのだろうか。

「ま、そこらへんは後々分かるさ。ほら、立香もバーサーカーとはいえコミュニケーション取っておいた方がいいんじゃないかな?マスターとサーヴァントの関係性は、後々生死に関わるよ?」
「なんでそんなこと知ってるの……。ていうか、今までどこにいたのよぐだ男は」
「立香とは別の場所に飛ばされてたみたいだね〜。今までダッシュでそこらへんを探し回ってて、光が出た方に行ってみれば立香がいたって感じかな」

「ふーん……」

やっぱり、こいつが私を置いてどこかに行くはずも無かった。ほんの少しだけ疑ったことに自己嫌悪しそうになるが、今はそんな場合じゃないだろう。顔を叩き気合を入れ、バーサーカーに話しかける。

「ええと、バーサーカー。私があなたのマスター、藤丸立香って言います。私自身、何がどうなってるのかさっぱりなんだけど……私たちが生き残るために、協力してくれますか？」

「……」

バーサーカーは何も言わず私の眼を見た後、こくりと頷いた。

よかった、どうやらマスターとしては認められたみたいです。

「ひとまず、これでサーヴァントが二騎になったわね。それじゃあ改めてこの特異点を探索するわよ。三人とも、周囲を警戒しながら私についてきなさい」

「了解です、所長。先輩、気を引き締めて行きましょう！」

「うん。よろしくね、マシュ、バーサーカー！」

「ｕｒｒｒｒ……」

「楽しい旅になりそうだね～」

「ぐだ男ほんと後で覚えてなよ……」

ということで、皆で一緒に見て回ることになったのだが……。

「先輩、敵対存在を発見しました！突貫しま」

「ａｕｒｒｒｒｒ!!」

「ごめんマシュ、もうバーサーカーが全部倒してる……」

「……」

出てくる敵は。

「あれは、まさかシャドウサーヴァント!?先輩、危険です！下がってください」

「ｔｈｕｒｒｒｒｒ!!」

「わー、すっげー。パンチ一発でシャドウサーヴァントが……」

「ご、ごめんマシュ……今回は出番無いみたい」

「……」

だいたい。

「こ、今度は2体もシャドウサーヴァントが！先輩！ここはサーランスロットと私で迎撃を」

「ごめんマシュ、もう終わってる」

「……」

ランスロットが殲滅してくれたので。

「……マシュは、使えないサーヴァントです……」

「ｕｒｒｒｒ……？」

「だ、大丈夫だよマシュ！バーサーカーがちょっと強すぎるだけだから！マシュが私の隣にいるから私は安心できるから、ちゃんと役に立ってるよ!?」

「流石は円卓最強の騎士ってところかしら……マシュが出ない方が効率いいんじゃないかしら？」

「所長!!」

「な、なによ!?本当のこと言っただけじゃない！」

「真実は時に人を傷つけるものだね～」

ランスロット無双のせいでマシュの出番が無くなってしまったのだ。あまり魔力を使わないよう制限して戦ってもらっているのにこの戦闘力、本気ならどれくらい強いんだろうか……。

ちなみに、ぐだ男のアドバイスで宝具は基本使わないようにしてる。『騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）』という宝具ならあまり魔力消費は大きくないようだが、それでも通常時と比べればかなり燃費が悪いらしいし、『無毀なる湖光（アロンダイト）』なんて使ったら魔力がすっからかんになるらしい。まあそれ無しでもこの強さなわけだが……。

「藤丸立香、魔力の消費はどうかしら？」

「ええと……召喚した時よりはましですけど、戦闘した後はちょっと気だるげになる感じです。マシュが戦うのに比べて、やっぱり消費が大きいみたいです」

「まあ、あれだけ強ければ当然よね……。マシュ、雑魚戦はあなたが出なさい。バーサーカーは温存よ。何が出てくるか分からないから、最高戦力はおいそれと出せないわ。カルデアから魔力供給がされてなければ、今頃死んでてもおかしく無いわね……」

「……はい」

ズーン、と沈み込むマシュにランスロットがあたふたしている。最初はマシュにいいところを見せようと張り切っていたみたいなのだが、途中でマシュが落ち込んでいるのを見て現状を悟ったのかあまり闘志を見せず後ろで待機してる。

強すぎる力って、時に残酷なんだね。

「子供相手にゲームで本気出したお父さんみたいだね～」

「なんとなく分かる気がするなぁ……」

まあ、ランスロットとマシュの関係はあまり悪くないようだ。ランスロットはマシュを気遣っているしマシュもランスロットに負けな

いようにと気合を入れている。悪いことにはならないだろう。

「……立香、気を付けて」

「ん、どうしたの？」

「ヤバイ所に、近づいちゃったみたい」

ヤバイ所？そう疑問に思った直後、ランスロットが何かに気付いたように近くの森に視線を移す。遅れて、私もその森から放たれる危険な気配に気づいた。マシュや所長も、それに気づいたようだ。

一瞬、空気が静まった後、咆哮が響いた。

「■■■■■■■■■■■■!!!」

「――ッッ!?先輩！私の、後ろに！」

『なっ!?あ、あり得ない！これほどの霊基、通常の英霊じゃあないぞ！このレベルのものは、神代の英霊、それこそ大英雄レベルじゃないと……！』

「つまり、あのサーヴァントが大英雄レベルってことでしょう!?藤丸立香、逃げるわよ！あんなの相手にできるわけが無いわ！」

「ッ！はい!!」

一瞬、恐怖で足が止まったものの、所長の一喝で調子を取り戻しその場から離れようとして――

「立香!!右に跳べ！」

ぐだ男の声が聞こえた瞬間、考えるよりも体が動く。投げ出された体が地面に落ちると同時、さっきまで私がいた場所で謎のサーヴァントの斧剣をランスロットが白羽取りで受け止めていた。

「――!!」

「■■■■■■■!!!」

ランスロットが謎のサーヴァントのキックで吹き飛ばされ、壁にぶつかる。その間に少しでも距離をとるために走り出す。私に振るわれた斧剣を、マシュの盾が受け止め凄まじい轟音が響く。

「先輩、所長！すぐに逃げてください!!このサーヴァントは、現状戦力では歯が立ちません!!」

「嘘でしょう、最高レベルのサーヴァントでも歯が立たないなんて……！」

「所長、今はとにかく逃げましょう！」

所長の手を引き、崩れた廃墟の陰に隠れる。これで逃げられるとは思わないが、少しでも時間を稼ぐ必要がある。ランスロットでも力負けするようなサーヴァントを相手に、どう立ち向かう……!?

「……ぐだ男、どうすればいい？」

「サーヴァントを1体囮にすれば逃げられると思うけど、そうじゃないんでしょ？」

「当たり前！」

「なら、ランスロットに本気を出してもらうしかない。ただし――魔力切れを起こす可能性はある。そうしたらまた気絶する可能性がある。……どうする？」

「……うん。気絶したら、後は頼んだ！」

大声で、未だ戦っているランスロットに告げる。

「ランスロット！宝具使っちゃっていいよ、全力で！」

「――――」

ノイズ塗れで聞こえなかったが、ランスロットは何かを呟いた後、森の木を引っこ抜く。

その木はドス黒く変色していき、赤い線が脈打つランスロットの武器と化す。それと同時に、最初と同じようにひどく魔力が抜け落ちる感じがする。あまり長くは、持ちそうに無い。

「ａｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒ!!!」

「■■■■■■■■――――!?」

咆哮がぶつかり合う。巨漢の大英雄と最強の騎士が正面からぶつかり合う。先ほどとは違い、ランスロット単騎でも拮抗している。そこにマシュが加わることで――――。

「援護します、サーランスロット！」

「――――」

マシュがサーヴァントの攻撃を受け止め、ランスロットがその隙をつき攻撃をする。少しずつだが、押している。あと一手で、何かがあればあのサーヴァントを倒せる、が。

「すいません、所長……！私、そろそろ限界……！」

「ちょっと、何言ってるのよ!?ここで魔力切れなんて起こしたら私もろとも全員死ぬじゃない！もう少し待ちなさい！」

「そんなこと言っても……」

もう一つの宝具『無毀なる湖光（アロンダイト）』を使えば、おそらくはあのサーヴァントに打ち勝てるだろう。だが、それを使えば間違いなく私は倒れるし、このまま攻め続けたとしても倒し切る前に私の魔力に限界が来る。

どうすれば――――行き詰まりかけたその時、どこからか声が響く。

「よく頑張ったな、嬢ちゃん。後一手、俺が引き受けた――――」

現れるは炎の巨人。檻に入るべき生贄を求め彷徨う、神々の使者。
「我が魔術は炎の檻　茨の如き緑の巨人　因果応報、人事の厄を清める社――――」
「灼(ウィッ)き尽くす炎(カー)の檻(マン)!!」

炎の巨人が姿を現す。
荒ぶる巨人は巨漢の大英雄を包み、身体を焼き尽くす――――!

「よぉし!逃げろ嬢ちゃん達!あんま長くは持たねぇぞ!」
「え、あれで終わりじゃないの!?」
「あのバーサーカーがこの程度でやられるわけもねぇ!それにあいつは、この森に近づかなきゃ手を出してこねぇ!ほっとけほっとけ!」
「先輩、失礼します!」
「――――!」

マシュが私を、ランスロットが所長を抱え離脱する。チラリ、と後ろを見れば焼き尽くされたと思ったサーヴァントはすぐに再生していき、私たちがいないことを確認した後森に戻っていった。……うん、関わらない方が正解みたいだ。

「……森にこいついること、忘れてたな。今後気を付けないと」
「ぐだ男、なんか言った?」
「いいや、何も」

そして、相変わらず私の相棒は隠し事が多いらしい。

ぐだ男君と立香ちゃんはハイタッチがお好き

森のサーヴァントから逃げ切った私たちは、屋敷のような場所で休憩を取っていた。幸いにもここは火の手を免れたらしく、休憩するにはうってつけだった。

「ったく、嬢ちゃん達随分と運が悪いな！まさかあのバーサーカーとやり合っちまうとは。ま、それで生きてるんだから実力は確かなようだが」

「ｒｒｒｒ……」

「……」

「おいおい、警戒するのは分かるが一応助けてやったんだぜ？傷つくねぇ」

じりじりと青い外套のサーヴァントから距離を取る所長と警戒心を露わにするランスロット。なおぐだ男は横になってくつろいでる、この野郎。

『あー、聞こえるかい皆？バーサーカーとの交戦、ご苦労様。それで、そのサーヴァント……おそらくはキャスターとの対話はどんな感じかな？』

「それが、所長が警戒してあまり話が進んでおらず……」

「警戒するなっていう方が無理じゃない！こんな状況で見ず知らずのサーヴァントに助けられたって何かの罠かと思うのが当然でしょ!?それに、あの宝具の威力を見る限り騙し討ちでもされたら……！」

「ま、そうさな。普通の聖杯戦争じゃそれが正しいだろうが……生憎と、今は普通じゃないんでね。信頼できなくとも、無理やり納得してもらうしかないんだが……そこのマスターはどうだい？俺のこと、信じられるか？」

「……」

キャスターを見る。軽薄そうな言動だが、その言葉にはたしかな重みがあった。そして同時に、こちらが見定められているようにも思った。

『ダメそうなら切り捨てる』

ここで選択を誤れば、おそらくこの特異点とやらの修復は困難になる……。

チラリ、とぐだ男を見る。ぐだ男はこちらの視線に気づき、笑ってこくりと頷いた。よし。

「キャスターさん、私はあなたを信じます。私たちの戦力だけじゃこの特異点を何とかできるか分からないし、私たちを殺すつもりならあの場でバーサーカーと協力した方が良かったでしょうし」

「おう、そりゃよかった。お互いを信頼しなきゃ、話にもならねぇしな！さて、それじゃそこの警戒してる奴らの緊張をほぐすためにも、真名の開帳と行こうか。俺の真名はクー・フーリン。今はこんなクラスで召喚されてるが、もしあんたらが召喚するならランサーのクラスで頼むぜ？」

『クー・フーリン!?ケルト神話の英雄、光の御子のクー・フーリンかい!?ヘラクレスやランスロットにも引けを取らない大英雄じゃないか！』

「おう、褒められるのは悪くないが今は時間がねぇ、驚くのは後にしな軟弱男。ひとまずはお互いの情報交換と行こうぜ。まともそうな奴らがいたんで咄嗟に助けたが、あんたらがどういう立場なのかもいまいち分かってないんでな」

『な、軟弱男……！また初対面で言われちゃったな……』

「ロマニ、落ち込んでないで状況の説明をしなさい。現状一番こちら側の状況を持ってるのはあなたでしょう。仮にもレフの代わりを務めているのだから、そのくらいきっちりこなしなさい」

『了解です、所長。……えー、では。こちら側の説明を――――』

色々と難しい話をドクターロマンが喋り出した。特異点について、

カルデアについて、テロについて他色々。ちなみに私も特異点というものについてはぐだ男が横で捕捉説明をしてくれてようやく理解できた。
特異点とは過去にあった人類のターニングポイントとなる出来事が何らかの理由で歪められ、人類の未来を滅ぼしかねないほどに大きくなった時空のことを言うらしい。
カルデアはそれをどうにかして正しい方向に修正し、人類の未来を守るために活動しているそうだ。
色々スケールが大きいが、どちらにせよやることは変わらない。
私は私の日常を取り戻すために進み続ければいい。

「そうだ、それでいい。人類の運命なんて立香に背負えるわけないんだから、自分のためにと思い続けな。立香が背負う義理なんて無いしね」
「うん。あんまり深く考えると失敗するのは今までのことで経験済み。あ、勿論ぐだ男にも付き合ってもらうからね？こき使ってやるから覚悟してよ」
「うへぇ……報酬のゲームは？」
「できるようになったらやらせたげる」

そうこうしている内にカルデア側の情報提供は終わったらしい。クーフーリンは顎に手を置き考え込んでいるようだ。

『――――というのが、現在のカルデアの状況です』
「なるほどねぇ。んじゃ、こっちの事情も話しておくか。まああんたらも薄々察しているとは思うが、この冬木では聖杯戦争が行われた。7騎のサーヴァントとマスターが覇を競い合い聖杯を求める儀式……だったはずなんだが、いつの間にかそれが変わっちまってな」
「変わった？それはどういうことかしら？」
「町がいきなり炎に覆われて、人間がいなくなったのさ。残ったのはサーヴァントだけ、挙句にセイバーがそれでも聖杯戦争を続け、俺以

外の他のサーヴァントを全員倒した。そうしたら黒くなって、セイバーの手下になり何かを探し始めたのさ。うじゃうじゃ湧き出た怪物どもと一緒にな」
「……謎ばかりね。続けて」
「面倒なことに、その探し物にゃ俺も含まれてるみたいでな。そりゃ残ったのがセイバーと俺だけだ、聖杯戦争を終わらせるためにも狙うのは当然だろう。ま、つーわけであんたらカルデアに提案だ。俺と組んで、セイバーを倒さないか？この状況が元に戻るかは分からねぇが、少なくとも聖杯戦争は終わるはずだ」
「なるほど、状況は理解したわ。……そこのボーっと話を聞いてる三流マスターも理解できたかしら？」
「な、なんとか……？ひとまず、聖杯戦争ってのを終わらせればいいんですよね」
「……ま、それが分かれば上出来かしら。それにしても、あなたほどのサーヴァントが一人じゃ倒せないセイバーは何者なの？並みの英雄じゃないのでしょうけど」

クー・フーリンは『聞いたな？』とばかりににやり、と悪戯っぽい笑みを浮かべる。その反応に少し怖気つく所長の反応に愉快そうに笑いながら、セイバーの真名を口に出した。

「セイバーの真名はアーサー王。そこの黒騎士の主様さ」

それを聞いた瞬間、ランスロットから発される威圧感が増す。手を握り絞め、身体中から殺気が溢れ出す。その姿はまるで憎き仇敵を見つけたかのように思えたが、同時に怒られるのを待つ子供のような、ぐだ男が私の身体を使って悪さした後のような気まずさみたいなのを感じた。

『アーサー王……!?しかし、そうか。それならば他のサーヴァントを圧倒したのにも納得がいく。かの騎士王が最優のクラスたるセイ

バーで召喚されたんだ、敵うサーヴァントはごく僅かだろう』
「そういうこった。つーわけで、あいつに勝つためにもこっちが揃えられる最大の戦力で挑みたいわけだが……俺が満足に戦うには、マスターが必要だ。土地から魔力を吸ってなんとか戦えはするが、そう何時までも持つもんじゃねぇしな」
「……一応聞くけど、そのマスターってのは」
「そりゃそこの嬢ちゃんだろ。あんた、魔術師としては一流なのになぜかマスター適正だけはねぇもんな」
「煩いわね！余計なお世話よ！……藤丸立香、魔力はもう回復しきってるわね？」
「あ、はい。……なんだか吸い上げられるのと入り込まれるのが同時に来て、あんまり落ち着かないですけど……」
「慣れなさい。キャスターはあなたに任せるわ。せいぜい上手く使いなさい」
「この町限定の仮契約って形だが、よろしく頼むぜ。これでよーやく遠慮なく戦える！俺はそこのバーサーカーと違ってあんまり魔力は喰わねぇから安心しな！全力で戦ってやれるぜ」
「よろしくね、キャスター」
「よろしくお願いします、クー・フーリンさん！」
「おう、盾の嬢ちゃんもよろしくな。……さて、と」

キャスターが視線を背後に向ける。釣られて見ると、どうやらまたスケルトンが湧き出したようだ。バーサーカーは前回の指示通り後ろに下がり、マシュが前に出る。

「さーて！そんじゃ、クランの猛犬の実力！しっかりマスターに見せるとするかねぇ！」

この後スケルトンさん達は無事火葬されました。

「アンサズ!!いやー、やっぱマスターがいると消耗をあんま気にしなくていいから楽だな!それに今回のマスターは七面倒な指示は出さないと来た。これでランサーなら言うこと無しだったんだがなぁ」
「……うん、ランスロットが暴れまわるより疲れないね」
「そりゃそうだろ。バーサーカーみてぇな魔力喰いとキャスターじゃマスターの負担も段違いだ。盾の嬢ちゃんも、まあそこそこやれるじゃねぇか」
「ありがとうございます。……けど、やっぱり宝具が使えないとあまり戦力にはなりませんね……」
「ま、そうさな。宝具が無いとあるとじゃ、サーヴァントの強さは天と地ほどの差がある。セイバーとやり合う前には、宝具を使えるようになってほしいが……。……おい、バーサーカー!最初に言っておくが……手出しは無用だぜ?」
「……」

ランスロットはキャスターの声を聞き、無言で一歩下がる。何をしようと言うのだろうか?

「嬢ちゃんは宝具を使えるようになりたいと本気で思ってるんだな?」
「は、はい!」
「……そうかい。なら、俺がちょいと特訓をつけてやる。おいマスター」
「ん、私?」
「――嬢ちゃんを、自分のサーヴァントを信じられるか?」
「……」

――ぐだ男の方を見ようとして、いつの間にか眼前に歩み寄って

いたキャスターに頭を掴まれる。その目はまるで、こちらの心を見透かされているように鋭い。

「おい、マスター。あんたが前から何を見ているのかは知らねぇ。何を頼りにしてるのかは知らねぇ。だが、これはあんたが頼りにしてる『何か』じゃなく、『マスター』自身に聞いてるんだ。……お前は嬢ちゃんを信じられるか？自分の意思で応えな」

一瞬、ぐだ男に相談できないことに怯んで。それでも、マシュと一緒にいた時間を思い返し、応える。

「――信用する。私はマシュのマスターだから」

「よぉし！よく言ったマスター！うし、嬢ちゃん。今からお前に特訓をつけてやる」

「本当ですか!?ぜひ、お願いします！」

「おう！気合十分みてぇだな！そんじゃ！」

――キャスターは、私に向けて杖を構えた

「……へ？」

「しっかり守り抜けよ、嬢ちゃん。じゃねぇとマスターが死ぬぜ？」

まさかの、実戦訓練――!?

――

「そらそらどうした、俺の見込み違いだったか!?マスターに傷一つつけたく無いなら、本気で抗いな！じゃねぇと何時まで経っても宝具なんて使えねぇぞ!!」

「ぐぅ……!?」

「ちょ、ちょっと!?まさか本気で殺さないわよね!?今藤丸立香が死んだらランスロットもマシュも戦闘不能になるのよ!?」
「本気だとも!どっちにしろここで倒れるような奴が、あのセイバーに勝てるとは思えねぇしな!」

本気だ。キャスターは言葉通り、本気で私を殺す気で襲い掛かってきている。マシュが必死に食らいつき私を守るが、それでもキャスターは攻撃を止めない。

「――まどろっこしいのは無しだ。さあ、行くぜ嬢ちゃん。本気で防いで見せやがれ……!!」

キャスターが詠唱を開始すると同時、身体からかなりの量の魔力が持っていかれる感覚。宝具を撃つつもりだろうとすぐにわかった。マシュもそれに気づいたようで、盾を構え叫ぶ。

「マスター!逃げてください!私が防ぎきれなければ、後ろにいる先輩は……!」
「大丈夫だ、立香」

私の後ろで、ぐだ男が言う。肩に手を置き、勇気付けるように柄にも無く叫ぶ。

「君の相棒だろ、マシュは。なら、きっと防いでくれる!」
「――大丈夫。マシュは、私のサーヴァントだ!」

叫ぶ。相棒はこいつなので前半は間違ってるが、マシュが防いでくれるというのは同意だ。マシュは、私をマスターとして信頼してくれた。なら、私がマシュを信頼しないでどうする!
逃げず、留まる。彼女が必ず、宝具を出せると信じる!

「先輩……！……任せて、ください!!」
「――その意気だ。行くぜ、とっておきをくれてやる！焼き尽くせ木々の巨人!!そら、守りたいもんは全力で守りな！灼き尽くす炎の檻(ウィッカーマン)!!!」
「――先輩が信じてくれた。偽物でもいい！今だけでもいい！大切な人を、守る力を……！うおおおおぉぉ!!!!!」

――マシュの盾が青く輝く。それはまるで、マシュの想いが載せられているかのように強く、分厚く、何がなんでも守り抜くという覚悟が伝わってくる……！
炎の巨人の拳と、マシュの盾がぶつかり合う。数秒せめぎ合った後、マシュの盾がより一層輝きを増し、炎の巨人は自身の役目を終えたかのように崩れ落ちる。

「――合格だ。良いマスターとサーヴァントだよ、あんたらは」

ニッ、と笑うキャスターに釣られ私も笑い、両手を挙げる。何かに成功した時にいつもぐだ男とやる祝いの儀式。マシュはいきなり手を挙げた私に少し驚いたようだったが、少し戸惑った後に私と同じように両手を挙げ。

「イエーイ!!」
「い、イエーイ！です！」

一緒にハイタッチを決めたのだった。おいこらぐだ男、何傍でニコニコ笑っているんだお前もやるんだよ！
「……マスターの傍にいる奴が何なのかは分からねぇが。ま、悪い奴じゃなさそうだな。深くは突っ込まねぇことにするか」

最後にキャスターが何か言った気がしたが、はしゃぐ私の耳には聞

こえなかった。

ぐだ男君は舞台に上がれない／立香ちゃんと所長は似た者同士

『これでいいのかな？』

マシュの宝具は発動できたし、クーフーリンも仲間になった。このまま大聖杯の場所まで行き、セイバーを倒し、カルデアに戻り、物語は続く。

それでいいはずだ、原作通りに進めばいい。主人公（藤丸立香）が原作通りに進めば、世界は救える。

『本当に？』

オルガマリー所長についてはどうしようもない。彼女の肉体は爆発で死ぬし、爆発を阻止しようとすれば敵側がどんな行動をするかも分からない。そうだ、これで間違っていないはずだ。原作通り、進めばいい。

『立香は彼女と友達になりたいらしい』

不可能だ。彼女は序章で死ぬ。道筋を変えればどうなるか誰にも分からない。攻略法が分からない道を進んで負けたら、誰の責任になる。

『また未来に惑わされてる』

黙れ。

『代わり（主人公）がいて良かったね』

黙ってくれ。

『――結局君は、舞台には上がらないんだね』

ごめんなさい。

――――

「よし、私の勝ちね！それじゃ、マシュの宝具名は私の案で決まりよ！」

「くっそ～……！私のナスビシールドが……！」
「す、すいません先輩……。今回は所長の方を応援してました」

ハイタッチを決めた後、マシュの宝具名を考えることになった。どうやら宝具の発動はできたが、真名と宝具名が分からないので真の力は発揮できないらしいのだ。
私とオルガマリー所長が案を出し合い、お互いの名前を懸けた決死のじゃんけんの結果宝具名は仮想宝具（ロード・）擬似展開（カルデ）／人理の礎（アス）に決定した。おのれ所長め、かっこいい名前を考えおって……！
じゃんけんに負けた時の、所長のどや顔が忘れられない。
あと心底ホッとしてる様子のランスロットとマシュが少しショックだった。私、そんなにネーミングセンス無いのだろうか……？

「うん、無いね！」
「シレっと心を読まないでくれる!?」
「立香は顔に出やすいからね～。ポーカーフェイスとか学んだ方がいいかもよ？」
「うぐ……考えとく」

ぐだ男も自分にぐだ男とかいうネーミングセンス皆無というか、なぜそんな名前にしたのか分からないのを私に言わせてるくせに！お前も同類だ！

「さて、それじゃあ宝具名も決まったことだし、最期のサーヴァントを倒しに行くわよ！キャスター、案内してちょうだい」
「お、もう終わったか？そんじゃ、行くとするかね。しっかりついてこいよ、嬢ちゃん達」

ということで移動を開始した。途中でスケルトンの進化形態みたいなのが出てきたが、マシュとクーフーリンで問題なく倒すことができた、のだが。

「……？何よ、そんなに見て」
「所長、戦えたんですか!?」
「私は魔術師よ!?カルデアの所長にして名門アニムスフィア家の当主よ!?戦えないわけないじゃない！」
「すいません、ずっと私と同じくらい弱いんじゃないかと思ってました」
「よし、そんなにガンドを喰らいたいのね？」

なんと、所長が指から魔力の弾丸みたいなのを打ち出してスケルトンを撃破してしまったのだ。他の皆は驚かなかったのだが、戦う姿を見てなかった私はすごく驚いた。

「けど今の凄かったですね！ガンドって言うんですか？うわー……かっこいい」
「そ、そんなに褒めたってなにも出ないわよ。それに、ガンドなんて魔術師にとっては初級レベルの魔術だし……」
「でも、私みたいな一般人から見たら凄いですよ！私ならあんなのに勝てるわけありませんし」
「ふん、当然よ。魔術師でない人間があれを倒そうとするなんて無謀にも程があるわ。……けどまあ、あなたが死ねばサーヴァントと契約する人間がいなくなるものね。しょうがないから、護身程度の魔術なら教えてあげるわ。ただし、前みたいに私の顔見て笑ったら蹴り飛ばすからね？」
「いいんですか!?よろしくお願いします、オルガマリー先生！」
「先生って……はぁ。それじゃ、まず基礎中の基礎から説明するからよく聞きなさい？」
「おーおー、仲がいいこって。ほれ、嬢ちゃんも混ざらなくていいのか？」
「え、けど……」
「マシュも一緒に受けようよ！すごく楽しそうだし！」

「……で、ではご一緒させていただきます！」

ということで、マシュと一緒に魔術の授業を歩きながら受けることになった。本来なら所長レベルの魔術師から手ほどきを受けるなど滅茶苦茶貴重なことらしい。難しい単語ばかりで頭が少し痛くなったりもしたが、所長は教え方が上手いらしく私に分かりやすいよう意訳したりしてくれた。

「まずは魔術回路の数を……あなた、一般人にしてはそこそこ多いのね。けどまあ私には遠く及ばないけど！とりあえず、まずは魔術回路を開くところから始めないといけないわね」

「魔術回路を、開く？」

「ええ。と言っても、これに関しては感覚的なものだから自分で頑張るしか無いのだけど。開く！っていう感覚が大事よ。一度魔力回路が開きさえすれば、あとは簡単に事が運ぶのだけど……まあ今は無理でしょうね。気長にやっていきなさい」

「ん～……あんまりイメージが湧かないかな」

「最初はだれでもそう、最初から上手くやれる奴なんて一部の化け物だけよ。まあ、そこら辺に関してはカルデアに帰った後に教えるわ」

「お、おお……。今の所長、すごく頼りになる！」

「ちょっとそれ前までは頼りにならなかったってこと？」

そんなこんなで、ワイワイ騒ぎながらセイバーがいるという場所に進んで行く。ある洞窟にたどり着く。オルガマリー所長によれば、この場所は魔術師が長い年月をかけて作り出した地下工房らしい。

「魔術師ってこんなものまで作るんだ……」

「この規模のものは稀だけどね。それで、キャスター。セイバーのところまではあとどれくらい？」

「もうそろそろ着くんだが……その前に、突破しなきゃならん敵がいてなぁ」

「突破しなければならない敵、ですか？それは一体――――!?」
「ａｒｒｒｒｒ!!」

突然、どこからか大量の剣が私たち目掛けて降り注いでくる。咄嗟に後ろに控えていたランスロットがそれを掴み、自身の宝具に変換し剣嵐を打ち払い、大きな岩に向けて剣を投擲する。剣は岩を撃ち砕き、その陰に潜んでいた何者かを焙り出した。

「ほう――――なかなか厄介なサーヴァントがいるらしい。これはますます、この先に行かせるわけにはいかなくなったな」

大弓と剣を携えた白髪の男性――――おそらくはアーチャーが、聞こえぬほど小さな声で何かを唱える。すると彼の周囲に何本もの剣が生み出され、それらが一斉に別方向から放たれた。

「ッチ……！てめぇかアーチャー！相変わらずあのセイバーを守ってやがるらしいな！」
「かくいう君も相変わらずしぶとい奴だ。雁首揃えて、ぞろぞろと引き連れてきたものだなクー・フーリン」

マシュが前に出て、飛来する剣を防ぐ。しかしマシュの盾であろうと四方八方から迫る剣を全て防ぐのは難しい。それを見かねたのか、バーサーカーが咆哮を上げ地面に突き刺さった剣を引き抜き、宝具により自身の武器とし振るう。

目にも止まらぬ英雄同士の激突、それに人間が加勢できることなど無いようだ。もし自分が少しでもこの場から動いてしまえば、格好の餌食とばかりにあのアーチャーに殺されるだろう……！

「……しょうがねぇ、ここで全員バテちまうとあのセイバーの相手をできなくなる。ここは俺に任せて先に行きな。なに、すぐ追いつく」
「クー・フーリン……！ごめん、頼んだ！」

「おう、任せなマスター！こちらと何度も死線潜り抜けてんだ、令呪で自害を命令されでもしない限り死にはしねぇよ！」

クー・フーリンを残し、先に進む。そうはさせまいとアーチャーが矢を射るが、こちらにはマシュとランスロットがいる。ランスロットが矢を弾き飛ばし、その矢が軌道を変えもう一度私を狙ったがそれをマシュが難なく受ける。防御に関しては、こちらの方が上だ。

「……行かれたか。あの騎士が行くのは少々厄介だな……貴様を殺し、さっさとあの騎士王の援護に行かなくてはならないか」

「そいつはこちらのセリフだぜ、アーチャー。いい加減てめぇとの腐れ縁にもうんざりしてんだよ。ここらでいっちょ、決着を付けるとするかぁ!!」

「抜かせ、魔術師!!」

炎の巨人と、無限の剣がぶつかり合う。

私たちはキャスターの勝利を祈り、先に進んだ。

「……」

「マシュ、大丈夫？」

走っている途中、マシュの顔が少し不安気なのに気づく。最初はクー・フーリンが心配なのかな、と思ったがそれだけではないようだ。

「その……私が本当にアーサー王と戦えるのか、今更ながらに不安になってきて……。クー・フーリンさんとランスロットさんがいればきっと勝てると思います。けど、クー・フーリンさんが抜けて、私だけになると……勝てるか、どうか」

「せっかく宝具使えるようになったのに、何を言ってるのよ。それに、

あのバーサーカーと戦っておいて今更そんなことが不安なの？」
「あ、あはは……あの時は無我夢中で、考える暇もありませんでしたから」

まあ、たしかに相手が格上とか考える暇も無かった。さて、ここはマスターとして少しメンタルケアするべきなのだろうけど、強敵との戦いに気後れする人の慰め方かぁ。

「……ぐだ男、何か良い慰め方ある？」
「ん？……そうだね、こういうのはどうだい？」

ぐだ男が慰め方を教えてくれるのだが……それ、いつもお前が私にやってるやつでは？……あれをやるのかぁ、いざ私がやると少し恥ずかしいなぁ。

「マシュ、ちょっとだけ屈んでもらっていい？」
「え？こう、ですか？」
「そうそう。じゃ、ちょっと失礼して」

ポンポン、と頭を撫でる。落ち込んでた時はよくぐだ男にしてもらったものだ。感触は無かったが、人に頭を撫でられながら慰めの言葉を言われるとそれなりに人間は落ち着くものらしい。
ただ、ぐだ男によれば当初は『怒らせて元気付けようとした』らしいのだけど、なんで頭を撫でられただけで怒ると思ったのだろうか……？

「大丈夫、大丈夫。私がついてる、絶対なんとかなるよ！」
「せ、先輩……！」
「うわ、マジでやってる……」

いやお前がやれって言ったじゃん!?不安になってマシュの顔を見

てみたが、少し顔を赤くしながらも嫌がっている様子は無かった。ほら、やっぱり頭撫でられるのって嬉しいものじゃん。

「あなた、よくそんな平然と恥ずかしいことできるわね……。まあいいわ。マシュ、あなたの盾に私たちの生死がかかってる。気合を入れていきなさい！」

「は、はい！頑張ります！」

マシュの気合十分な様子を見てこれなら大丈夫だと確信し、洞窟を抜け大聖杯があるという場所に向かう。珍しくぐだ男も真剣な顔をして、この先が決死の覚悟を抱かなければいかない場所であると嫌が応にも自覚する。

「……あの、先輩。こんな質問を今するのもどうかと思ったのですが」

「ん？どうしたの、マシュ」

「……先輩は、時々どこかを見る時がありますが。そこに何かいるのですか？」

――ぐだ男が、ばれた？

いや、おそらくばれてはいない。幾らなんでもマシュ達と一緒にいるときにぐだ男の方を見過ぎていた、多分純粋な疑念だ。思わずぐだ男にどうすればいいのか、と視線を送るが本人は私の判断に任せるようだ。

別に話しても問題ないとは思う。けど、マシュ自身にも見えないようだし自分が何かの病気だと疑われる可能性もあるし。

何より、私だけの秘密の相棒が他の人間にばれるのが少しだけ嫌だった。

「マシュ。今はそんなことを気にしている場合かしら？」

「す、すいません所長。どうしても、気になって」

「気持ちは分かるけど。これみよがしにチラチラと、助けを求めるよ

うにどこかに視線を送ってるんだもの。まるで、何かがそこにいるように」
「フォウフォウ」

所長が結構鋭い……！それに、フォウ君も同意してるように見える。以前までは隠せていたが、異常事態の連続でちょっと気が緩み過ぎていたか？だが、所長はそれ以上何も聞かず先に進む。

「別にあなたが何を隠していようが、私達に害が無いのであればそれを暴く必要も無いわ。魔術師なんて嘘や隠し事だらけなんだから、私があなたに何か言う義理も無いし。それに――あなたのその目、なんだか見覚えがあって叱りづらいのよ」
「……ありがとうございます、オルガマリー所長。いつか、所長やマシュにも私の秘密を話したいです」
「はい。その時を楽しみにしてますね、先輩」

今はまだ、話す勇気は無いけど。いつか二人にもぐだ男のことを知ってほしいと思った。所長とはなんとなくこの話題で気が合いそうだし。

ランスロットは私達の会話を無言で見つめている。兜で顔は見えないが、なんとなく微笑んでいるような気がした。

五人そろってカルデアに帰るため、歩を進める。

「……そっか。いつか話す、か」
「うん、二人には話したいなと思って。ダメだった？」
「いんや、問題ないさ。立香が喋りたいと思ったなら喋っていいよ～。二人ともいい人みたいだし、ね」
「……？そっか、よかった」

ぐだ男の少し悲しそうな笑みが少しだけ気になったが、いつものことだと思い先に進む。

そして、ようやくそれが見えた。
巨大なエネルギー、そうとしか表現できないような何かがそこにはあった。所長の眼が大きく見開かれる。

「これが、大聖杯。超抜級の魔力炉心じゃない。どうしてこんなものが極東の島国にあるのよ」
『資料によると、アインツベルンという錬金術の大家が制作したそうです』
「アインツベルン……聞いた事があるわね。確か……」
「所長。考察中のところ申し訳ありませんが、気づかれたようです」

マシュに言われ、尋常じゃない気配に気づく。それは大聖杯の前で超然と立っていた。
黒く赤いラインの入った、ランスロットと似た配色の鎧を纏い身体から魔力を放出する美しい少女。
彼女が、アーサー王なのだろうか？

「Ａｒｒｒｒｔｈｕｒｒｒｒｒｒｒ!!!」

ランスロットが雄たけびを上げる。あまり聞き取れないが、彼が彼女に向けてアーサーと言ったことは分かる。
つまり、彼女が……伝説の騎士王アーサー・ペンドラゴンということだろう。

「……ほう、まさか貴殿がいるとはな、ランスロット卿。そして、その盾。何か語っても見られる故、口を閉じていようと思ったが」

ニヤリ、とアーサー王が口端を上げる。その視線はマシュの盾に向けられていた。

「面白い。その宝具は面白い。構えるがいい、小娘、ランスロット卿。

その守りが真実かどうか、そしてその剣が私に届くかどうか。私の剣で、確かめてやろう」

剣から魔力が放たれる。ランスロットが私に視線を向ける。その目は、本気を出していいかと問うていた。

出し惜しみをして勝てる相手ではない。私も相手に負けじと不適に笑おうと震える口を開け、叫んだ。

「やっちゃって、ランスロット、マシュ！全力で、勝とう!!」
「はい！マシュ・キリエライト、出撃します！」
「Ｇｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕ!!」
「防御魔術を張るからあんたは下がっておきなさい！戦闘の衝撃で死にかねないわよ!?」
「ありがとうございます所長！」

こうして、冬木での最終決戦が始まったのだった。

立香ちゃんは勝利したい／ぐだ男君はレフが嫌い

「Ａｒｒｒｒｒｔｈｕｒｒｒｒｒｒｒｒｒ！」

最初に動いたのはランスロットだった。あのアーチャーから奪っていた剣でアーサー王に迫る。

それに対しアーサー王は剣から大量の黒い魔力を放出し、薙ぎ払うようにそれを振るう。

「随分と弱くなったな、ランスロット卿」

「――――!!」

咄嗟に跳躍し躱そうとするが、それを読んでいたかのようにアーサー王が切り上げるように剣を振う。

黒い魔力の放出が空中で身動きを取れないランスロットに迫るが、ランスロットは剣を捨て、その剣を足場に加速しその一撃を躱す。

そして、その勢いのままアーサー王の場所まで落ちていく。

「ｒｒｒｒｒｒｒ!!!!」

「この程度は避けるか。だが――――その程度で打ち取れると思っているなら、貴様は王を舐めすぎだ」

敵を捉えられなかった黒の閃光はしかし、それだけでは止まらなかった。

黒く染まる聖剣が再び、極光を帯びる。

「さあ、これはどう躱す？」

「Ｇａｌ――ａｈａｄ――――!!」

ランスロットが雄たけびを上げ、黒い魔力を相手に防御をする素振りも見せず拳を地に向け構える。

黒い極光はランスロットを蹂躙せんと迫る――――が。

「仮想宝具　疑似展開――――！人理の礎（ロード・カルデアス）!!」

「あれを防ぐか……。その盾を持つに相応しい力はあるようだな、小娘」

それをマシュの宝具が防ぎ、マシュとランスロットが同時にアーサー王に攻撃を仕掛ける。ランスロットは拳を、マシュは盾を、全力の力で打ち付ける。しかし、その一撃は……。

「――――その拳程度で、私を倒せると思ったか？」

アーサー王の眼を隠していたバイザーを砕く程度だった。アーサー王の手からジェット噴射のように魔力が放出され、音速を超えるほどの拳が振るわれる。

咄嗟にランスロットがマシュを突き飛ばし、その拳を受け流す、が。

「――――!?」

「どうした、ランスロット卿。よもや、この程度を受けきれないとは言うまい」

受け流した腕の鎧が砕け、生身の肉体が露出する。それを気にも留めず、アーサー王は更なる追撃を加える。

剣を振る。たった一回振るうだけのそれはしかし、私がいる場所にまで届く魔力の光線……！

「先輩！」

「ッツ、ありがとうマシュ！」

咄嗟にマシュが私と所長の前に立ち、閃光を盾で防ぎきる。ランスロットもそれを避け、アーサー王に反撃の一撃を与える。

だが、それは全く効いている気配が無い。拳が胴体を射貫くが、それは鎧を割ることさえ無かった。

「なぜ聖剣を出さない。まさか、あの小娘の魔力を気にしているのか？――――馬鹿者め」

「Ａｒｒ……ｔｈｕｒ……！」

「主の言葉が聞こえなかったか？貴様は言われたはずだろう、全力で勝てと」

ランスロットに諭すようにそう言いながら、アーサー王の剣が再び輝く。それは先ほどまでと違い、異質な程の重圧感を感じた。

それに気づいたランスロットだが、しかし避けるにはあまりにも範囲が広すぎる――――！

「約束された勝利の剣（エクスカリバー・モルガン）」

――――黒い魔力が、ランスロットに放たれる。

「ランスロット!!」

思わず叫ぶ。光が消失すると、そこには片腕を失ったランスロットの姿があった。

『咄嗟にあの宝具を、腕一本犠牲にして避けたのか!?なんて技量だ！』

「ロマニ、解説している暇があるならあの宝具の分析でもしなさい！」

『了解しました！』

このままじゃダメだ。クー・フーリンがいなくなったことで火力の無さが出ている。あのアーサー王を倒すためには、宝具の一撃が必要だ。

宝具自体は、ある。ランスロットの奥の手、湖の聖剣。しかし、そ

れを使われて自分が意識を保てるかは分からない。
――だが、全力で勝てと言ったのは、私だ！

「立香　。実は宝具を気絶せず使う手段があったりする」
「え、何それ!?なんで今まで教えてくれなかったの!?」
「いやー、切り札的なものだからさ？けど出し惜しみする状況でもなさそうだし言うけど――令呪を使いな、立香」
「令呪……？」
「そう、令呪。右手にある、それだ。使い方はまだ所長に教わってないだろうけど。君なら使える」
「使い方とかは？」
「立香なら僕から言わなくても使えるさ」

んな無茶苦茶な、と思ったが、なぜかそう言われて出来る気がしてきた。

「ちょっと藤丸立香！何を独り言してるのかは知らないけど、しっかりマシュやバーサーカーに指示を送りなさい！押されてるわよ！」
「あ、はい！……マシュ！」
「はい、先輩！待ってました!!」

名前を呼ばれ、凛々しく返事をする頼もしい後輩（立場的には先輩なのだけど）。
大した指示は出せない三流マスターだけど、三流マスターなりにやることはやってやる！

「ランスロットの前に出て、宝具準備をして私の前で待機！ランスロットはマシュの後ろで指示を待ってて！」
「了解です、マスター！」
「――」

マシュも、ランスロットも私の指示に従ってくれて私の前に立つ。それを見て、アーサー王は攻撃を止める。

「……なるほど、ようやく腹を括ったというわけか。いいだろう――――構えろ、盾の娘」

あちらもこっちの意図は理解しているはずだ。完全なるカウンター狙い。宝具発動後の隙を狙い、返しの一撃で宝具を当てるシンプルな作戦。

マシュが防ぎきれなければ私達諸共消し飛ばされ、ランスロットが仕留め損なえばそのまま押し切られるだろう。

だが、きっとこの作戦は成功する。マシュ達ならば、やれる。

「先輩。必ず、守ります！」

「卑王鉄槌、極光は反転する。光を呑め！約束された勝利の剣（エクスカリバー・モルガン）!!!」

二回目の宝具。マシュは息を吸い、グッと前を見据え、叫んだ。

「仮想宝具　疑似展開――――！人理の礎（ロード・カルデアス）!!」

青の光と、黒い光がぶつかり合う。マシュは足を地面につけ、踏ん張る。しかし、それだけでは足りない。距離が開き過ぎている。

マシュは歯を食いしばり足を前に進める。ほんの一瞬片足を地面から離しただけで押される体に鞭打ち、前へ、前へと進んで行く。

「おお――――おおおおおおおおおおぉおおお!!」

アーサー王の眼が見開かれる。防ぐのは予想していた、だがこの宝具を防ぎながら、歩を進めるとは予想外だった。

そして、それに追従するように最高の騎士が歩を進める。私は令呪をランスロットに突き出し、叫んだ。

「ランスロット！令呪を持って、命ずる！」

ランスロットの兜から赤い光が漏れる。自身の今の主の言葉を聞き逃すまいとするように、静かに佇む。

「――全力で、勝って!!」

「――了承した、我が主よ」

一瞬、耳を疑った。今までずっと意味のないような言葉しか発さなかったランスロットが、言葉を口出したからだ。

そして令呪から魔力がランスロットに送られる。ランスロットの手に、黒く脈打つ反転した聖剣が握られる。

「A――ｕｒｒｒｒｒッ!!」

――アーサー王の宝具の攻撃が止まるのと、ランスロットが飛び出すのはほぼ同時だった。

最高のタイミング、最高の宝具、最高のサーヴァント。そしてマシュの盾。それらを以て、今ようやく。

「――認めよう。お前達の勝利だ」

湖の騎士の刃が、騎士王の体を切り伏せた。

――

「先輩、大丈夫ですか!?」

「……なん、とか？」

「いつの間に令呪の使い方なんて覚えたのよ……。まあいいわ。これ

で勝った、わよね？」

ランスロットの宝具により体を斬られたアーサー王の身体は徐々に消えていく。アーサー王はフッと笑い、私達を見据えた。

「知らず、私も力が緩んでいたらしい。最後の最後で手を止めるとはな。聖杯を守り通す気でいたが、己が執着に傾いたあげく敗北してしまった」

「は、そりゃ違うぜセイバー。あんたが例え万全だろうと、こいつらはあんたに勝っただろうよ。なんせ、俺が認めた奴らだぜ？」

「クー・フーリンさん！無事だったんですね！」

「おう、きっちりあのいけ好かない野郎をぶっ倒してきてやった」

傷だらけではあるが、しっかりと仕事を果たしたケルトの大英雄は笑って私達の所に帰ってきた。

溜息をつき、アーサー王は口を開く。

「ふん……そういうことにしておいてやろう」

「あんたも負けず嫌いだなぁ」

「黙れクー・フーリン。……覚えておけ、グランドオーダー……聖杯を巡る旅は、まだ始まったばかりだという事を」

アーサー王の身体が完全に消えていった。ランスロットは、それをただ見ていただけだった。

それと同じく、クー・フーリンの身体も徐々に光に包まれていった。

「ッチ、俺もか……まあしょうがねぇ。嬢ちゃん達、こっからはお前らの仕事だ。何があろうと諦めんなよ？次に呼ぶなら、ランサーとして呼んでくれや！槍が無いとどうも落ち着かないんでね！」

「うん、ありがとねクー・フーリン！またあなたと会う日を楽しみにしてる！」

「おう！盾の嬢ちゃんと、所長さんも頑張りな！ああ、それと――――」

チラリ、と私の隣に目を向ける。

「てめぇも、しっかり守ってやれよ」

「……言葉は届かないだろうけど、勿論守るさ。任せてくれ」

最後にそう言って消えていった。

……完全にばれてたなぁ。

「……色々と不明な点は多いけど、これでミッションは終了とします。皆、よく頑張ったわ。冬木が特異点と化した原因はどう考えてもあれだし、早く回収してしまいましょう」

「はい、聖杯を回収し――――な!?」

その時だった。時空が歪み、トン、と一人の男が地面に足をつかせる。

その男は、どこか見覚えのあるシルクハットをかぶっている男性で――――。

「いやはや、まさか君たちがここまでやるとはね。計画の想定外にして予想外だ――――しかし、いいだろう。許そう、今回はそれ以上に面白いものが見られそうだ」

「――――あなたは」

「やあ、先ほどぶりだね。答えは変わったかな？」

「――――レフ・ライノール（フラウロス）」

男の姿を見て、忌々し気にその名前を呼ぶぐだ男を見て。

私はどうしようもなく、不安な気持ちにさせられた。

たった一人の家族だもん

「レフ、教授？」

『レフ!?レフ教授がそこにいるのかい!?』

「おや、その声はロマニ君かな？君も生き残ってしまったのか。すぐ管制室に来て欲しいと言ったのに、私の指示を聞かなかったんだね。まったく――」

レフ教授、と呼ばれた男の口が歪み、眼が大きく見開かれる。その瞳は黒く濁り、光を一切通さない深淵の闇のように思えた。

「どいつもこいつも統率の取れていないクズばかりだ。ああ、だがいいとも。今は機嫌がいい。それさえ許そう、人類など所詮は滅びる定めの生き物なのだから」

「――！マスター、下がってください！あの人はおそらく、敵です！」

「ｒｒｒｒｒｒ……！」

マシュとランスロットが私の前に出る。しかし、私の横でレフ教授に走り寄る人影があった。オルガマリー所長だ、彼女は安心しきったような笑みを浮かべレフ教授に近づく。

「レフ、ああレフ！生きていたのね！よかった、あなたがいなければ私、この先どうすればいいのか分からなかった！」

「所長!?待ってください、その人は！」

マシュが止める間も無く、所長はレフ教授のすぐ傍まで近づく。その時、レフ教授の眼が私を――いや、ぐだ男を見た気がした。ぐだ男は、珍しくただただ黙っている。

「――フフッ。やあ、オルガ。元気そうで何よりだ。君も大変だっ

たようだね？」
「ええ、ええ！そうなの、そうなのよレフ！管制室は爆発するしこの町は廃墟そのものだしカルデアには帰れないし！予想外のことばかりで、どうにかなりそうだった！けど、あなたがいれば大丈夫よね？だって今までもそうだったもの。また私を助けてくれるのよね？」
「フフ、ハハハ！」
「……レフ？」
「ああ、すまないねオルガマリー。いやはや、君が生き残ったのは予想外だった。爆弾を君の足元に設置したはずなのに、まさか生きているなんて」
「――――え？」

所長がようやく異変に気付く。目の前の男が今まで信頼していたレフ・ライノールとは異なるのだと。

「いいや、生きているとは違うか。君はもう死んでいる、肉体はとっくにね。トリスメギストスはご丁寧にも、残留思念となった君をこの土地に転移させてしまったんだ。ほら、君は生前、レイシフト適正が無かっただろう？肉体があったままでは転移できない」

レフ教授、いいやレフは、オルガマリー所長に言い聞かせるように、まるでダメな子に教えるように丁寧に話す。それがより一層、不気味さを助長させた。

「だから君はカルデアには戻れない。カルデアに戻った瞬間、君のその意識は消滅してしまうのだから」
「……え？え、消滅って、私が？ちょっと、待ってよ。カルデアに、戻れない？」
「そうだとも。だが、それではあまりにも哀れだろう？だから、生涯をカルデアに捧げた君のために、せめて今のカルデアがどうなっているのか見せてあげよう」

時空に穴ができる。そこには、真っ赤に染まったカルデアスが映っていた。

「嘘、なんで……。カルデアスが、赤く……」

「君のために時空を繋げてあげたのさ。聖杯があればこんなこともできる。さあ、よく見るといいアニムスフィアの末裔。あれが貴様達の愚行の末路だ！人類の生存を示す青色は一片も無く、あるのも燃え盛る赤色だけ！あれが今回のミッションが引き起こした結果だよ」

彼は、いや目の前の何かは嗤う。人類は滅びたと。お前たちの責任だと。諦めろ、と。

「ふざけないで！私の責任じゃないわ！私は失敗していない、私は死んでなんかいない！私は、私は――――！」

「はぁ、もういい。やはりくだらない人間だったなぁ、君は」

突如、所長の身体が宙に浮く。そして、空間の穴に――――カルデアスに引っ張られる。

「な、何かに、引っ張られる……!?」

「そのまま殺すのは簡単だ。だがそれではあまりに芸が無い。ほら、オルガマリー。君の宝物とやらに触れるといい。何、私からの慈悲だと思ってくれて構わないよ」

「え――――？な、なにを言っているの、レフ？私の宝物って、カルデアスの、こと？止めて、お願い、カルデアスよ？高濃度の情報体で、次元が異なる領域で――――」

「ああ、ブラックホールと変わらないね。もしくは太陽か、まあどちらでもいい。どちらにせよ人間が触れれば分子レベルで分解されるだろう。さあ、遠慮なく触れたまえ。生きたまま無限の死を味わう地獄への扉に」

――不味い。助けなくちゃ。だけど、私があそこに行けば私も吸い込まれ、死んでしまうかもしれない。そう考え、一度足が止まりかけて――それでも踏み出した。
所長は、良い人だ。きっと、友達になれる人だ。一緒にカルデアで過ごしたい。

「いいのかい？死ぬかもしれない」
「その時はぐだ男が助けて！」
「無茶言うなぁ。うん、けど……あの人を助けたいんだね？」
「うん！所長は、私と似てるんだ！助けてあげたい！」
「そっか」

後ろからマシュの声が聞こえる、行ってはダメだと言われている。ランスロットは静かに成り行きを見守っている。ドクターロマンは必死で何かを言っている。所長が私に手を伸ばす。
――ああ、ダメだ。間に合わな――！

「ちょっとだけ、体借りるね？」

――相棒の声が聞こえて、私は体の主導権を失った

――

そりゃ、助けたいに決まってるよね。主人公だもの、そう言うに決まってる。だから君は藤丸立香なんだろう。
綺麗なオレンジ色だった右の瞳が、濁った青に変色していく。立香は綺麗だと言ってくれたけど、俺にはとてもそうには思えなかった。
レフ・ライノールの……いや、フラウロスの顔が驚きに変わる。予想外だろうとも、言ったはずだ、俺はお前達なんかとは違うと。
消えるのは怖いとも。けど、立香に頼まれたんだ。ちっぽけな恐怖

など、心の片隅に追いやってやれ。

「あなた、なんで――――!?」

「手を!」

俺が伸ばした手から、即興で編み出した白い光の鎖が所長の手に巻き付いた。脳が痛む、知ってはいけない情報が大量に流れてくる。

体が震え、歯がカチカチと音を立てる。消えてしまうかもしれない、排除されるかもしれないという恐怖が今更になって押し寄せる。

「――――正気かね?消えるぞ、君は。例えここが特異点であれ、抑止力は君を見ているぞ。それ以上、その力を見せれば――――」

「黙っておけ、節穴野郎。そんなもんとっくに知ってるんだよ」

全知全能の力など、この世界がおいそれと簡単に認めるわけはない。そんなことは当然だ。死んだことはあれど、消えたことは無い。どのようなことになるのか、想像もつきはしない。けれど、そうだ。気に入らない。

「全部お前の思い通りになるのは、どうしようもなく気に入らない……!!」

鎖を引っ張る。所長が引き寄せられる。それと同時に、徐々に俺の自我が薄れていくのを感じる。やはり、こうなるか。

「そうか……残念だ、我らの同胞になるかもしれなかった、あの愚かな王とは違う道を歩んだかもしれない男よ。君は所詮、人間の枠組みから抜け出すことは無かったのだな」

所長の眼に希望が灯る。彼女の肉体を死から遠ざける方法も知ることができる。それをした作品を俺は知っている。

初めて行う原作破壊。この先がどうなるかは分からないが、藤丸立香であればそれを乗り越えることができると信じている。
最後に、鎖に力を籠め、所長の手を握ろうとして――。
『ダメだよ？』
――腕の力が抜ける
「――え」
『約束は、守らなきゃ』
聞いた事の無い声だった。何の感情も籠っていない、底冷えするような声。
体が元の持ち主のものに置き換わっていく。ダメだ、もう少し待っていてくれ。じゃないと、君の望みを叶えられない――！
「約束、したもんね？ずっと一緒にいるって」
所長が落ちる。鎖が消える。フラウロスが笑みを浮かべる。
俺は、また――。
「――ぐだ男は、私とずっと一緒じゃなきゃダメだもん」
最後に見たオルガマリー所長の顔を、俺はきっと忘れられない。

――

「――先、輩？」
「……」
『立香ちゃん、今のは一体……』

マシュとドクターロマンが呆然として問いかける。と言っても、私も何が起こったかは分からない。
ただ、ぐだ男が何かしようとして、私がそれを止めただけ。ぐだ男が何をしようとしたかなど私には分からないし、ぐだ男も多分答えてはくれないだろう。

「――ハハハ！いや、そうか。そうなるか――嗚呼、嗤わずにはいられない！」

男が嗤う。どうでもいい。さっさと消えてくれ。
私がそいつを睨みつけると、そいつはご機嫌そうに言う。

「ああ、もうこの特異点も限界か。楽しい劇だったが、仕方ない。こう見えて私にもまだまだ残っている仕事があるのでね。ここは引かせてもらうとしよう――」

男の姿が消える。ぐだ男は、ただ呆然とオルガマリー所長が消えていった場所を見つめていた。
けど、それじゃダメだ。オルガマリー所長が死んだのは、悲しいけれど。

「今は、とにかくここから脱出しなきゃ」

その声に、ドクターロマンはハッと我に返る。

『あ、ああ！少し待っていてくれ、レイシフトを実行する！』
「……あの、先輩」
「どうしたの？マシュ」

マシュが不安そうに私を見る。どうしたというのだろう？

「……いえ、すいません。なんでも、ありません」
「そっか。無事帰れるといいね。所長のことは、残念だったけど」

きっと、友達になれた。一緒にいれば楽しい人だったろうし、魔術についても教えてもらった。
とてもいい人だった。本当に、死んでほしく無かった。
けど、所詮は他人であるわけで。

「――ごめんね、所長。ぐだ男は渡せないや」

たった一人の家族と、友人になるかもしれない他人。どっちが大事かなど、一目瞭然なわけで。

「ぐだ男、帰ろう？」

泣きそうな顔をした相棒の姿に、愛おしさを覚えながら。
私達の意識は、暗転した。

グランドオーダー、開幕

――両親は正義感が強い人だった。
父親は消防士で、母親は警察官。二人とも誰かを守る職業だった。
どちらも、自分の命を顧みず誰かの命を助けるような、そんな人で。
だから、どちらも私を残して死んでいった。皆が、立派な人だと言っていた。
けど――そんな立派な人なら、なんで

『なんで、私を置いて行ったの？』

一人取り残された空間で、ポツリと出した私の言葉は消えていった。寒い、寒い、寒い。誰もいない部屋で食べる食事は、温かかったあの頃とは真逆のように冷たくて。
誰も来ない授業参観は、逃げ出したくなるほど惨めで、辛くて。
次第に私自身が暗くなって、鬱陶しく思われて、嫌われて。
全部、自分の自業自得でどんどんと状況が悪くなった。

『ほら、君が俺の話相手になれば俺の会話欲も満たせて、君の寂しさも減る！ｗｉｎｗｉｎって奴だろ？』

その時に差し伸べられた手は、今までのどんな物よりも暖かくて。

『うま!?うわ、一人暮らしの学生すげぇ……！こんなに料理美味くなるもんなのか』

誰かに料理を褒められたのも初めてで。

『ん？おぉ、新しい服？似合ってる似合ってる、ただ正直立香は何着ても同じだと思うよ？俺、今まで可愛いっていう感想しか出てないし』

誰かに服を褒められたりしたのも、お父さん達以来で。

『テストで９０点取ったの!?すごいじゃん！アルバイトしてる中でよくそんな勉強できるなぁ……』

誰かにテストを見せるのも、誰かと一緒にショッピングに行くのも、誰かと一緒にテレビを見るのも。

ずっと誰かとしたかったことを一緒にして、ずっと支えられて。

あなたが握ってくれた私の手は、どんどんと温かさを取り戻して。

『じゃあね、立香』

その温もりを手放せるわけも、無く

「それがあなたの想いなのね。ふふっ、綺麗だけど、どこか歪。あの子とほんとに似た者同士」

声がして、振り向く。そこには、和服を着た、黒髪の青い瞳の女性が立っていた。

その人は、微笑んで私に話しかける。

「けど、ここに来てはダメよ。ここは全てが見えてしまう場所。あなたがそれを知ってしまえば、あなたはあなたで無くなるでしょう。ここは名前を持つ人がいてはいけないのだから」

どういうことかと声を出したかったけど、出なかった。

「これは夢だと思いなさい。ほんの一時の夢、眼が覚めれば忘れてしまうようなもの。あの子も無理をするわね、本来は使ってはダメな力だと知っているのに。そのせいで、あなたまでここに迷い込んでしまった。ちゃんと叱ってあげたいけれど、今はまだ無理みたい」

意識が閉じる、いや覚める。この場所にいた記憶が、景色が、薄れていく。

「あの子は本来存在してはいけない物。いつかは別れる時が来るでしょう。けど、あの子はきっとあなたを置いてはいけないから。あなたが、あの子にお別れを言わなきゃならないの」

その言葉の意味を理解して、嫌だと叫ぼうとして、声が出なかった。

「その時が来るまで、あなた達がどれだけ大人になれるか。楽しみにしているわね」

最後にそう言って微笑む彼女。

私は夢から覚めていった。

「よーし、君は随分といい子でちゅねー。何か食べる？木の実？それとも魚？」

「フォウ……ンキュ、キュウぅ」

目が覚めると、フォウ君が謎の美女に甘やかされていた。隣を見ると、少し元気がないがぐだ男もいる。目が覚めた私に気付いたのか、いつものように笑みを浮かべて私の周囲を飛び回る。

「おはよう、立香。体の方は大丈夫？」

「うん、大丈夫。おはよ、ぐだ男」

私が起きたのに気づいてか、女性は私の方を向く。なんとなく、見

たことがあるような、無いような？

「おっと、本命の目が覚めたね。こんにちは、藤丸立香ちゃん。思考能力はちゃんと戻ってる？」
「えーと、あなたは……」
「私の名前はダ・ヴィンチちゃん。色々と聞きたいことはあるだろうけど、まずは管制室に行きなさい。君を待っている人がいるからね」
「待っている、人？ドクターロマンですか？」
「……いいや、それよりも大事な人がいるはずだよ。君のことをずっと守ってくれた少女が」
「フォウフォウ」

それを聞いて、ようやくマシュのことだと理解する。フォウ君にも急かされ、私は少し重い足に力を入れ、立ち上がる。ずっと夢を見ていたような感覚だ。でもきっと、あの特異点で起きたことは皆真実なのだろう。所長が死んだことも含めて。

「あ、立香。先に行っておいてくれるかな？」
「へ？なんで？」
「ちょっと用事があって。終わったら、すぐ合流するさ」
「……ん、分かった。それじゃ、行ってきます」
「行ってらっしゃい、立香」

ぐだ男に見送られ、私は管制室に向かう。手を振るぐだ男の姿に、嫌なことを思い出しながら、マシュやドクターロマンを待たせないために少し駆け足で歩いて行った。

「さて、と。こちらの意図を理解してくれている、と仮定した上で君と話をしよう。まあ今のところこっちは何も聞こえないし、そちらも何

も伝えられないのだろうけど」

美女の声に反応する反応は無い。だが、あの少女の反応や口の動き、目線などから彼女の隣にいた何かはこの部屋にいると確信していた。だから、対話を続ける。

「こちら、万能の天才ダ・ヴィンチちゃんが作成した憑依人形！君のために作った、寝ている間に拝借させてもらった髪の毛を編んで作ったぬいぐるみさ。少し作成に手間取ったが、これで君は彼女を介さずに私達に声を伝えることが可能なはずだ」

彼女は思う。人類最後のマスターの隣にいる『何か』の正体を。あの時、藤丸立香が使ったあの鎖。あれは魔術だ、それも超高度の、時計塔にいる魔術師だろうとあんなのを理解できるのはごく僅かだと断言できるほどの複雑な。

それほどの魔術を使う存在となれば、正体は限られてくる。例えば何らかの隠蔽能力を持ったサーヴァント、例えば何らかの目的で彼女を依代にしている魔術師、例えば――。

「さて、まずは名乗ってもらおうか？私の方は既に知っているだろう。こちらは君のことを推測でしか知らない。もし私達とコミュニケーションをとるつもりであれば、どうぞ喋ってくれて構わない」

……暫くの無音。これはダメか？と諦めかけた時、人形に取り付けられたスピーカーから声が鳴る。その声は、彼女が想定していたよりも。

『初めまして、ダ・ヴィンチちゃん。名前はぐだ男って呼ばれてます、よろしく』

若く、そして穏やかな少年の声だった。

―――

「おはようございます、先輩。ご無事で何よりです」
「おはよう、マシュ。そっちも無事でよかった」

管制室にはドクターロマンとマシュがいた。カルデアスは依然真っ赤なままだけど、部屋はテロ直後よりも掃除され、しっかりと清潔に整えられている。まだ少ししか経っていないだろうに、よくここまで持ち直したな、と感心する。カルデアスタッフさん達に感謝だ。

「まずは、生還おめでとう、立香ちゃん。そして、ミッション達成お疲れ様。なし崩し的にすべてを押し付けてしまったけど、君は勇敢にも事態に挑み、乗り越えてくれた。君のおかげでマシュとカルデアは救われた、心からの感謝を送ろう」

そう言った後、少しの間だけ沈黙し。

「所長のことは残念だったけど、今は弔うだけの余裕はない」
「……」

所長の死の間際の記憶が蘇る。最後はカルデアスに落ちていった所長は、ずっと誰かに認められたかったらしい。それはきっと、彼女にとって何よりも求めたことだったのだろう。彼女は凄い人だったと思う。

もし助けられたのなら、助けたかった。あの方法以外で。

「……先輩、大丈夫ですか？」
「うん、大丈夫。話を続けて、ドクターロマン」

マシュに少し心配されてしまった。気を持ち直せ、今はへこたれて

いる暇は無い。

「うん。彼女に代わり、僕らが人類を守る。それが彼女への手向けになるだろう。……おそらくレフの言っていたことは真実だ。既に人類は滅んでいる。このカルデアだけが無事な空間だ。宇宙空間内のコロニーのような、外に出れば死んでしまうようなものだと思ってくれればいい」

「……解決策はあるんですか？」

「勿論、まずはこのシバを見てほしいんだけど」

ドクターロマンによると、人類が滅んだのは特異点が７つ、作成されたからしい。

過去は多少変化しても人類が滅ぶほどの変化は起きないようになっているが、歴史の変換点が大きく乱され、最終的な着地点が変わってしまうとその後の歴史に大きな改変を生み出す。

そうして人類史の土台が崩された結果、２０１７年以降の人類は消滅してしまったのだとか。

そして、それをどうにかするためには。

「私達が７つの特異点を修復すればいい、と」

「そういうことだ。歴史を正しい方向に戻し、人類を救う。それが僕らカルデアの今の使命だ。しかし、今のカルデアにはあまりにも戦力が無い。マスター適正者は君を除いて凍結、所持するサーヴァントはマシュとランスロットだけだ。この状況で君にこれを言うのは、ほぼ強制に近いと理解している。それでも、僕はこういうしかない。最後のマスター適正者、藤丸立香」

言われ、姿勢を正す。選択肢は一つしかないだろうし、私もそれ以外を選ぶつもりはない。

「君に、７つの特異点を修復し、人類を救ってほしい」

「勿論。そうしないと、私の日常が戻ってきませんしね」

そういうと、ドクターロマンの顔がほころぶ。

「それを聞いて安心した。――――では、これより改めてカルデアにいる諸君に通達する」

ドクターロマンがマイクに手を当てる。スピーカーを通し、カルデア全区域の彼の声が届けられる。

「これよりカルデアは前所長オルガマリー・アニムスフィアが予定した通り、人理継続の尊命を全うする。目的は人類の保護、および奪還。例えどのような結末が待っていようと、僕らは戦い抜くしかない。これよりファーストオーダー、改め」

『――――人理守護指定・G（グランド）・O（オーダー）を開始する！』

こうして、私達の人理を修復するための旅が始まった。

――――

「というわけで、まずは戦力を増やさなければならない！さっきも言った通り、現在僕らのサーヴァントはマシュとランスロット、そして戦力としては数えないけどレオナルド・ダ・ヴィンチがいる。彼女、いや彼？のことはひとまず置いておいて」

「こらこら、しっかり紹介してくれたまえ。色々言わなきゃならないことがあるだろう？」

「いやー、モナ・リザが好きすぎるから姿をそれに変えたって言うのはちょっと僕には理解できないかな。紹介はそっちの方で勝手にやってもらえると……」

「しょうがない、不甲斐ないドクターに代わり自ら紹介するとしよう。私の名前はレオナルド・ダ・ヴィンチ！カルデアの技術顧問にしてカルデアに召喚されたサーヴァントさ！ダヴィンチちゃんって呼んでね」

召喚室に連れてこられた私は、ダヴィンチちゃんと名乗る女性の自己紹介を聞いていた。凄まじい性癖だとは思うけど、まあぐだ男がＴＳは良い文明とかなんとかほざいてたことがあるし、つまりそういう人なのだろう。あんま気にしてはいけない。

「私はカルデアで召喚され、カルデアから魔力供給を受けている状態だから君たちとは一緒に戦えないけど、裏から色々と支援はさせてもらおう。共に人理修復を成そうじゃないか。藤丸立香、マシュ。よろしく頼むよ」

「あ、はい！よろしくお願いします！」

「よろしくね、ダヴィンチちゃん」

凄まじい変態趣味にマシュが若干引いているが、それを気にせず握手をするダヴィンチちゃん。偉人ってのは皆こういう大物ばかりなのかもしれない。

「さて、改めて。カルデアは戦力不足だ、少なくともあと一騎、サーヴァントを召喚しておきたい。と言っても、現在のカルデアの魔力量ではどちらにせよあと一騎しか現界を維持することはできないのだけどね。大きな魔力の塊、要は聖杯を回収して魔力リソースに変えられれば、もう少しサーヴァントの数を増やせるのだろうけど」

「なるほど。そういえば、この左腕にあった令呪っての。なぜか回復してるんですけど、これって？」

「ああ。本来の令呪はサーヴァントに強制力のある強力な術式なのだけど、このカルデアで召喚した場合令呪はあまり強制力を持たない、言ってしまうとただの魔力リソースみたいなものだからね。カルデ

アから魔力供給を受ければ回復するから、危なくなったら遠慮せずバンバン使っちゃうといい。サーヴァントの強化や回復、瞬間移動など色々なことができる切り札のようなものだ。と言っても、回復には最低でも1日かかるから、無駄な場面では使わないよう気を付けてね？」
「ふむふむ」

ならあの時冬木でバンバン使っちゃってよかったかな？なんて思いつつ、ドクターロマンに指示された通りに地面に置かれたマシュの盾から溢れる光に手を掲げ、召喚するための口上を述べる。
ちなみに召喚室にはランスロットもいる、もし危ないサーヴァントが出た場合のための備えだそうだ。
そんなこんなで召喚サークルが回り、新たなサーヴァントが召喚される。

「これは……！立香ちゃん、今回も当たりみたいだ！トップサーヴァントレベルの霊基がある！」
「おー、凄いね君。ガチャ運ってのがある方なのかな？」
「ドクター、警戒は緩めないでください。危険なサーヴァントの可能性もあると先ほどドクター自身が言っていましたよね？」
「ああ、ごめんごめん！立香ちゃん、一応気を付けて！そのサーヴァントがどんな英霊なのか、しっかり見極めるんだよ！」
「はい！」

そうして、いよいよ召喚されたサーヴァントが姿を見せる。
輝く木瓜紋をあしらった軍帽と黒の軍服を纏い、長銃を杖代わりに地面に突き付ける黒髪の少女。彼女から放たれる覇気に、思わず平伏しそうになる。
そして少女は目を開け、ニカリと笑い。

「儂が魔人アーチャーこと、第六天魔王織田信長じゃ！さて――――お

主が儂のマスターか？」

自身の名――――日本においてその名を知らぬ者はいない、戦国の魔王。その名を冠する少女は、私を試すように愉快そうに笑いながら私に問いかけてきたのだった。

立香ちゃんはぬいぐるみがお好き

「織田、信長……！」

「おお、流石に知っておるか！別の国のマスターとかならどーしよとか思ってたんじゃよね、儂！いやー、良かった良かった！――――で」

空気が重くなり、重圧が増していくのを感じる。有無を言わさぬその覇気に、ランスロットもそれに対抗するように魔力を迸らせる。しかし、織田信長はそれを見もせず私だけを見ている。

「二度も言わせるな。――――お主が儂のマスターか、と聞いておる」

――――ここで間違えてはいけないだろう、と生存本能が告げる。慎重に言葉を選ばなければならない。目を閉じ、深く空気を吸い、怯えを極力排除して彼女と目を合わせる。

「私が、あなたのマスターだよアーチャー。藤丸立香。一緒に人理を守るために、私達と一緒に戦ってほしい」

ジッ、とこちらを見てくる。数秒程が経っただろうが、織田信長の顔が崩れる。そして、部屋に響くような大きな声で大笑いをした。

「ハッハッハッ！なんじゃなんじゃ、そう硬くなるでない！そうか、お主がマスターか。なるほどのぉ。ま、是非も無し、か」

纏っていた重圧が消える。ドクターロマンが重圧から解放されたかのように呼吸をし、マシュも戦闘態勢を崩し安堵の息を出す。しかし、まだランスロットだけは警戒を緩めようとはしなかった。

「ひとまず、召喚に応じてくださりありがとうございます、織田信長公。カルデアの事情などについての説明は……」

「それには及ばぬ、もやし男よ。召喚される際にある程度の事情は把握しておる、人理の危機という奴なのだろう。そして、戦力補充のために儂を呼んだと。うむうむ、実によい運をしておる！儂ってば滅茶苦茶強いサーヴァントじゃからな！」
「なぜでしょう先輩、先ほどはすごく怖かったのに今はなんだかぐだぐだしてます」
「多分、オンオフの切り替えが早いんじゃないかな……？」

何はともあれ、日本に限っての知名度であればヘラクレスやランスロットをも超えるサーヴァントを召喚できたのだ。素直に喜ぶべきだろう。

「ああ、それとマスター。分かり切っておるとは思うが……儂は戯れは許すが侮りは許さん。もしこの第六天魔王を軽んじるのであれば、即切り捨てるのでそのつもりでな！あ、儂の名前いちいち全部言うと長いじゃろうしノッブって呼んでよいぞ」
「あ、はい」

うん、このサーヴァントも結構危ないな！

「うん、これでカルデアが出せる最大戦力を揃えることができた！シールダーのマシュ、アーチャーの織田信長公、バーサーカーのランスロット。かなり強力な構成なんじゃないかな」
「と言っても、マシュ以外は強力な分扱いにくいサーヴァントだ。立香君、君が手綱を握らなきゃダメだぜ？くれぐれも、後ろから刺されないように気を付けること」
「あんまり脅かさないでやってくれ。それじゃ、立香ちゃん、マシュ。今は冬木から帰ってきたばかりだし、休息も必要だろう。三日後まで休息をとることにするから、今はゆっくりと休んでくれ」

「あ、はい。……あのー、ドクターロマン」
「ん？どうしたんだい、立香ちゃん」

少し気恥ずかしいが、聞いておかなければいけないことだ。少しだけ勇気を出して口に出す。

「お風呂って、どこあります？」
「あっと……そういえば言ってなかったか。そうだよね、君もさっきまで炎上する都市の中にいたんだ。埃とか煙で服も汚れていて当然か。ごめん、配慮が足りなかったよ」
「アハハ……」
「でしたら、私が案内します先輩。ちょうど私も汚れを落としたかったので」
「そう？それじゃ、お願いねマシュ。ノッブも一緒に来る？」
「なんじゃ、湯浴みか？もやし男よ、酒ある？酒」
「なんで皆僕のこともやしとか言うんだろ……？えーと、お酒は……備蓄が無いのであんまり消費しないでもらえると嬉しいかなぁ？」
「なーんじゃ、酒飲みながら湯に浸かるのが気持ち良いのじゃけどなぁ。酒が無いなら風呂はやめじゃな、お主ら二人で楽しんでくるといい」

ということで、マシュと一緒にカルデアにある浴槽に入ることになったのだが。
……マシュの肌、改めて見ると凄い綺麗だなぁ。白くて、もちもちで、女としては少し嫉妬してしまうくらいだ。その視線に気づいたのか、マシュは少し顔を赤くする。

「あ、あの、先輩。できればあまり見ないでもらえると……」
「うん、ごめんマシュ。ただあんまりにも綺麗だったから、つい」
「き、綺麗ですか!?そんなことは……それに、先輩もとっても綺麗ですよ！」

「アハハ、ありがとねマシュ」

いい子だなぁ。……多分お肌を保つための秘訣とかは特に無いんだろうなぁ。ちょっと女として敗北を味わったので、後で女性職員の人に良いボディソープとかが無いか聞いてみよう。

「……あの、先輩。一つ、聞きたいのですけど」
「ん？どうしたの、マシュ」
「先輩は……あの時、所長を助けようとしたんですか？」

――どう答えるか、少し考える。助けたいとは思ったし、助けようともした。けど、最終的には私が見殺しにしたのと同じようなものだ。ぐだ男の邪魔をしなければ、ぐだ男は所長を助けられただろう。

けど、それをしたらぐだ男は消えていたらしい。レフ・ライノールという男のことはあんまり信用しないが、多分あの時言ってた消えるっていうのは本当だ。もしあのまま邪魔をしなければ、所長が生き残る代わりにぐだ男が死んでいた。

どっちを取るか、という選択をして、ぐだ男を取った。助けようとしたとは、あまり言えない。

「……しなかった、かな？助けられるなら助けたかったけど、助けに行こうとしたら私達まで死んでたかもしれない。そうなったら、本末転倒だし」
「そう、ですか」

マシュが少し俯く。失望してるのだろうか？そうだったら、少し悲しいがまあ慣れている。マシュとは仲良くなりたいし、友達になりたいと思うけど、合う合わないもあるだろうし。

「……先輩は、所長のことをどう思っていましたか？」
「とてもいい人だと思った。ちょっとだけ見栄っ張りだけど、寂しが

り屋で、誰かと親しくなるのを望んでいるような人で。私に分からないことを色々教えてくれた、尊敬できる人だった」
「よく見てたんですね」
「ああいう人は好きなんだよね、私」

所長はきっと、色々な努力をしていた。だからあれだけ魔術を使えるし、あれだけ人に教えるのも上手なんだ。才能もあるけど、それを磨くのにはたゆまぬ努力が必要だったのだろう。努力をしている人は、好きになれる。

「……その、こんなことを聞くのは恥ずかしいのですけど。私のことは、どう思いますか？」
「滅茶苦茶いい子。謙虚でかわいくて肌モチモチで髪サラサラで、しかも性格がとてもかわいい。今までで出会ったこと無いくらい、理想の女の子って感じがする。とても好き」
「そんな風に思ってたんですか!?」
「え、そうだよ？今だって、マシュのこと可愛いな～って思ってるし」

マシュが顔をトマトのように赤くする。可愛いなぁ。

「所長と同じくらい、マシュも好きだよ」
「……そう、ですか。その、のぼせちゃったのでお先に上がります！そ、それじゃあ、またあとで！」
「うん、また後で」

マシュが顔を赤くしながら慌ただしく出て行った。うん、やっぱり可愛くて良い子だ。このカルデアにいる人たちは、きっと皆いい人達なんだろう。レフ・ライノールは除外するとして。誰も彼もが、人理修復を諦めていない目をしていた。皆が、私とマシュのことを信じていた。

「……重いなぁ」

それが少しだけ、重圧に感じるけれど。それでも、背負っていこうと決めた。

相棒と一緒なら、それもきっと耐えられるから。

「おや、立香ちゃん。温泉から上がったところ、かな？」

「あ、ダヴィンチちゃん。ダヴィンチちゃんも今入るとこ？」

「ああ、私の場合男か女か色々判断つきにくいからね～。ロマニの奴に言われて、特定の時間以外は入らないようにって厳命されてるのさ」

「アハハ……ま、まあしょうがないよね」

一応この人は、ノッブやアーサー王などと違い最初から女だったわけではなく、本当に女体化している元男だ。女性とも男性とも一緒に入るのは難しいだろう。

「立香ちゃんは今からマイルームに帰るところかな？」

「うん、疲れたし今日は休もうかな～って」

「ふふふ、そうかそうか。あ、それとマイルームにちょっとしたプレゼントを置いてきた。喜んでくれると嬉しいな」

「プレゼント？」

なんだろう、と思いながらも聞く前に上機嫌に風呂場に向ってしまった。流石に危険なものではないんだろうけど、なんだかあの人面白そうだからっていう理由で変なことやりそうで怖い。

少し不安になりながらもマイルームの扉を開ける。

「……？」

「フォウ？」

特に何もない。強いて言えば、フォウ君が私のベッドの上にいるだけだ。いや、よく見ればフォウ君が乗っている布団が少し盛り上がっている。布団の下に、何か隠れている？

「フォウ君、ちょっとどいてね？」

ヒョイ、とフォウ君をどけて布団をめくると、そこには。

なんだか妙に目が大きい、ぐだ男に似たぬいぐるみがあった。

「……んんん!?」

これが、ダヴィンチちゃんが言っていたプレゼントだろうか？だとしたら滅茶苦茶嬉しいのだが、なんでぐだ男の容姿を知っているんだろう。そもそもいつの間に人形なんかを……？

「……ま、いいや！可愛いからよし！」

色々聞くのは後にして、とりあえずもらったプレゼントを喜ぼう。ぎゅっ、とぬいぐるみを抱きしめる。ちょうどいい柔らかさ、流石万能の天才。ぬいぐるみを作るのだって一流の仕事のようだ。

ぐだ男は用事があると言ってどっかいったので少し寂しかったが、これがあれば今日は眠れそうだ。布団の中に潜り込み、ぬいぐるみを胸に抱き布団を被る。

「フォウ君も来る？」

「フォーウ」

フォウ君が布団の中に潜り込んでくる。ふふふ、可愛い奴め。

フォウ君のもふもふ具合とぬいぐるみの柔らかさが心地よい。ぐ

だ男に似ていることもあってか、少し照れてしまうのが玉に瑕だが。
……なんだか、このぬいぐるみの顔を見ていると。ほんの少し、ほんの少しだけなのだが魔が差してしまう。頭を撫でたり、手をきゅっとつかんだりしてみる。少しだけ暖かい。

「……」

ぬいぐるみに何をしているんだろうと思いながらも、ごくりと唾を飲む。今まで触れられず、話すだけしかできなかった幽霊、ぐだ男。それを模して作ったぬいぐるみが、私の腕に収まっている。
……本当に、別にやろうと思ったわけではないのだが。ぐだ男ぬいぐるみの頭を引き寄せ、枕の隣に置く。目線が合う。少しだけもぞもぞと動き、ぬいぐるみに近づく。
あとほんの2、3センチで触れ合うような距離になる。
――ほんの出来心で、私は

「フォウ」
「あいた!?」

フォウ君がぬいぐるみの頭を叩く。するとぬいぐるみから見知った声がする。
……
最悪の?????可能性に気付いて冷や汗がバッと出る。ぬいぐるみを見る。動かない。フォウ君を見る。呆れたような目で人形を見ている。ぬいぐるみの頬を抓る。

「立香、痛い。とても痛い」

……ぬいぐるみから、声がする。
もしかして、もしかしたらだが。

「……ぐだ男、これ(ぬいぐるみ)の中に入ってる？」
「……眼福でした」

思わず、私はぬいぐるみを地面に投げ捨てた。

――――

「ＯＫ落ち着こうか立香！出来心だったんだ、せっかく動ける体を手に入れたからドッキリを仕掛けるつもりだったんだ！いやだってあんな怪しいサーヴァントの作ったぬいぐるみを抱きしめたりキスしようとするなんて思うわけないじゃん!?」
「あああああああああああああ!!!」
「バーサーカーみたいになってる!?助けて、助けてフォウ君!!」
「……フォーウ」

この後ずっとこいつの記憶を消そうと思って殴り続けたけど、ぬいぐるみなので効きませんでした。

死にたい。

第一特異点　修復開始

「と、いうわけで。私が開発した立香ちゃん専用のメンタルケアロボット、ぐだ男君だ。立香ちゃんも気に入ってくれたようで何よりだ！」

「ちゃんと説明してください、ダヴィンチちゃん」

あの後、私が暴れている時にダヴィンチちゃんが部屋を訪ねてきた。まるで悪戯が成功した子供のように笑い、ぐだ男に関する説明をするということで落ち着かされ話を聞いている。

「ま、ぐだ男君の存在自体は君の様子である程度分かってはいた。冬木での君たちの行動は私も知っていたからね。そこで目線の動きやら誰にも聞こえないような声を聞き取り、思考を重ねた結果……君の隣のそのぬいぐるみの中に入っているぐだ男君の存在に気付いたというわけさ」

「……どうやってぐだ男をぬいぐるみ中に入れたんですか？」

「それについては少し苦労したんだよね～。ぐだ男君は基本的に何かに干渉することはできない。誰かと意思疎通することもできないし、何かに触れることもできないが……一人だけ例外がいた。それが君だ、藤丸立香。あの時、所長を助けようと謎の力を使ったのはぐだ男君だろう？」

「……」

殆どのことを見抜かれている。ぐだ男はさっきから黙って成り行きを見守っており、口出しする気配はない。なぜかダヴィンチちゃんの膝の上にいるのが少し腹立たしく思ったが、話を続ける。

「そして、ぐだ男君は君の体を使うことで外部と接触できるのではないか、という仮定を立て、試しに君が寝ている間に採取させてもらった髪の毛と色々な魔術を込めて作った人形を置いてみれば――――見

事、ぐだ男君が人形を使えたという訳さ」
「……勝手に髪の毛取ってたんですか」
「それに関しては謝ろう。けど、ぐだ男君がどんな存在なのか確認する必要があった。彼が危険な存在であれば、今後の特異点修復にどんな影響を与えるか分からないし」
「む……まあ、たしかに」

ダヴィンチちゃんからしてみれば、どんな存在かも分からない奴がカルデアの内部に潜んでいられるというのは当然許容できるものでは無いだろう。レフ・ライノールの味方という可能性もあるのだから、正体を突き止めるために手を尽くすのは当然だ。

「まあ、そんなわけで彼と話をしてみたんだけど……結果は問題無し。ロマニとも相談して、特に干渉することは無くていいっていう判断になった。彼がサーヴァントにすら見えない理由とかは気になるけど、それを解明するためには時間がかかりそうだしね」
「それじゃ、メンタルケアロボットっていうのは？」
「ぐだ男君がこのカルデアで活動しても他の人に不信感を与えないための言い訳さ。ぐだ男君も体が無いと不便だろうし、君の精神を安定させるためのメンタルケアロボットとしてカルデア職員にはぐだ男君のことを伝えてある。君も堂々とぐだ男君と話したいだろ？これについてはぐだ男君に事情を聴いて、お互いが合意の上で決めたことだ」
「……」

勝手に色々と話が進んでいたことに少しだけ口を尖らせる。何より腹立たしいのは、ぐだ男が私に相談なくダヴィンチちゃんと話を進めていたことだ。こんな大事な話であれば、私にも相談の一つくらいはするべきだと思う。

「ま、色々と不満に思う点もあるだろうけど目を瞑ってくれたまえ。

ぐだ男君に体が出来たこと自体は、君も嬉しいだろ？」
「……まあ、はい」
「ならよかった。第一特異点に向かうまでは後３日もある。その間、サーヴァントとコミュニケーションを取るなり休むなりするといい。それじゃ、私は少し用事があるのでここら辺で失礼するよ。じゃあね～」

ぐだ男をテーブルの上に置き、帰っていくダヴィンチちゃん。嵐のような人だ。
さて、本題に入るとしよう。ジトッとぐだ男を見る。ぐだ男は目を逸らす。今回ばかりは流石にそう簡単には許さない、覚悟してもらおうか。

「えーと、立香。結構怒ってるかい？」
「そうだね、かなり」
「アハハ……だよねぇ」

頭を掻いて困ったように頭を傾けるぐだ男。ぬいぐるみなので非情に可愛らしいが、残念中身はぐだ男である。ぐだ男は観念したかのように口を開いた。

「色々と隠し事してごめんね」
「……それはいつものことだからいいよ。怒ってるのは、私じゃなくてダヴィンチちゃんに相談してたこと。私よりも初対面の人を信頼したんだ？」
「だって、立香は魔術についてとかは何も知らないだろ？色々と後ろめたい話もあるし、君にそれを聞かせたくなかった。あとドッキリを仕掛けたかった」
「おいこら」

溜息をつく。……なぜぐだ男が魔術とかについて詳しく知ってい

るのだとか、所長を助けようとしたあれは何なのかとか、色々聞きたいことはある。
けど、それを聞いてしまえばきっと私達の関係に何か変化が訪れるだろう。それはいい変化かもしれないし、悪い変化かもしれない。どちらにせよ、私は今のぐだ男との関係をもう少し続けたかった。心地よくてかけがえのないこの関係を。

「まー、いいや。ただし、今後はちゃんと私にも相談すること！」
「うん、相談すべき時はするさ」
「ならよし。とりあえず今日は疲れたからもう寝よっか」

ぐだ男の手を掴み、一緒に布団の中に潜り込む。しかし、なぜかぐだ男は驚いた顔をしながら抵抗する。さっきも一緒に布団の中にいたろうに、今更何を暴れる必要があるのだろうか？

「待って立香、この展開はおかしい。さっきはあんなに恥ずかしがって暴れたのに、なんでしれっと一緒に寝ようとしてるの……？」
「……？いつも一緒に寝てるじゃん」
「実体がある状態と幽霊状態では話が違うと思うんだよね俺は」
「今更そんなので恥ずかしがらないよ？さっきは、その。あれだったから恥ずかしがっただけだし、せっかく触れられるようになったんだから。ほら、早く」
「女の子がぬいぐるみとは言え男と寝るのはよく無いと思う」
「フォウ君に蹴られてようやくネタバレしたスケベ幽霊が何を言うか」

ポンポンと私の隣を叩く。微妙に納得していない顔をしたぐだ男を強引に引き寄せ、胸に抱いて寝ることにした。そもそも、私がキスしようとしても微動だにせずいた奴が今更そんなことを言うな。本屋行く時いつもエロ本コーナー覗いてるの知ってるんだぞ私は。

――――

三日後。ついに、聖杯を巡る旅――――聖杯探索が始まる。
妙にピチピチなスーツを着て、管制室に向かう。ぬいぐるみ状態のぐだ男も一緒だ。
女の子はやはりかわいいぬいぐるみには弱いようで、すぐにマシュや他職員に受け入れられた。マシュに抱っこされた時に鼻の下伸ばしてたので少しお仕置きしたり、ノッブやマシュを交えて４人でゲームしたり、ノッブ対ランスロットのシミュレーションを使った模擬戦で白熱した勝負を繰り広げたりと、楽しい３日間を過ごせた。
それも今日で一旦終わりだ。ここから数日間は、あの冬木のような――――危険な冒険が始まるだろう。ランスロットやノッブのような強いサーヴァントでも、相性によっては簡単に負けてしまうらしい。油断していたらすぐにその報いを受けることになるだろう。

「よし、集まったね皆。それじゃあ、レイシフトについて簡単に説明するよ」

ドクターロマンの解説によると、マスターである私とマシュは霊子筐体、通称コフィンという器具に入れられるらしい。そこからコフィンに魔術をかけ生命活動を観測できなくさせ生きているか死んでいるか分からない箱に仕立て上げ、粒子変換で肉体を分解させ、そして――――。

「カルデアスのデータを元に遥かな過去に跳躍、そこから人理修復を開始する、というわけだ」
「……ねぇぐだ男、理解できた？」
「理解しようと思わない方がいいよ？細かく覚えると頭がパンクするレベルの超技術の代物なんだから」
「まー儂もまったく分からんかったしの。ある程度理解できれば技術を盗みようもあったのじゃが、流石にこれは盗める気がせんわ」

ノッブが歯ぎしりしながら悔しがる。話はあんまり理解できなかったが、つまり超危険な試みだから覚悟して臨んでくれ、という感じの説明だった。

「一応聞くんじゃが、儂らもそのレイシフトとやらは使えるのか？」
「問題なく行える。ただ、カルデアの電力にも限りがあるからサーヴァントが増え続けた場合、直接レイシフトするのではなく現地で霊脈を見つけ、霊基サークルを展開してサーヴァントを召喚する、という形になるかな」

ノッブの質問に、ドクターロマンに代わりダヴィンチちゃんが説明する。ちなみに事前にぐだ男もレイシフトに同行できるのは確認済みだ。人形持ったままコフィンに入ればいいらしい。雑だな。

「さて、それじゃあいよいよレイシフトを開始するよ！今回レイシフトする場所はフランスだ。立香ちゃん、ぐだ男君。コフィンの中に入った感想はどうだい？」
「ちょっと狭いですかね？」
「そりゃ結構大きなぬいぐるみと同室だからね」

コフィンの数の都合上、ぐだ男は私のコフィンと同室でレイシフトすることになった。それって大丈夫なのだろうかと心配になったが、ダヴィンチちゃんによると「むしろ安全」らしい。何が安全なのかは分からないが、ぐだ男も大して心配してないようだし信じることにする。

「ハハッ、まあ少し我慢してくれ。カルデアスタッフたちの誇りにかけて、必ずこのレイシフトは成功させる。それじゃ――――始めようか」

その声と同時に、コフィンの中に光が溢れ視界がふさがる。ドンドンと自分の体が何かに引き寄せられていくような感覚。あの時と同じだ。

思わずぐだ男の手を握る。手が震えているのが自分でも自覚できる。ぐだ男は私と違って何の怯えも無く、ただ握られた手をそっと握り返すだけだった。

『3、2、1……！グランドオーダー、実証を開始する！』

―――

ブワッ、と視界が開く。目を開けるとそこは森の中のようだった。隣では初めて味わった感覚に「ふむ」と手を見て考えるノッブと、唸り声をあげ周囲を警戒するランスロット。レイシフトが成功したことに安心するマシュ。そして、私と手を繋いでいるぐだ男。

「レイシフト完了みたいだね。流石はカルデアスタッフ」

「フォウフォウ」

「はい、ぐだ男さんの言う通り無事レイシフトは完了したようです。そして、なぜかフォウさんがいますね……前のレイシフトの時と同じようにコフィンに紛れ込んだのでしょうか？」

『あーあー、聞こえるかい？無事レイシフトが完了したようで何よりだ。立香ちゃんたちがいるのはＡＤ１４３１年ロレーヌ地方のドン・レミ村のようだ。だいぶ田舎だけど、許容範囲内だ』

「１４３１年のフランス……」

たしか、百年戦争の最中だったはずだ。この特異点が生まれた原因に関わっているのかもしれない。

『ひとまず情報収集をしに行こう。適当に現地民と接触して、情報を聞き出してくれないかい？』

「分かりましたドクターロマン。皆、行こう！」
「はい！」
「ｒｒｒｒｒ……」
「おう、任せておくのじゃ！この儂がいるからには、特異点の修復など楽勝だよネ！」
「なぜかフラグが建てられた気がする！」

こうして、第一特異点の修復が始まった。

蹂躙開始

まずは情報収集、ということで森を出て近くにあるドン・レミ村に向かう事になった。幸い森は小さかったので迷うことも無く森を抜けられたのだが……。

「……なに、あれ？」

『これは……信じられないほど大きな、何らかの魔術式か？おそらく人理焼却に関わっている何かだが、残念ながら今調べることはできない。……無事な集落や砦を見つけて、そこで情報収集を行ってくれ』

「……了解です、ドクター。行きましょう、先輩」

「うん、けど……」

森を出た後に見た光景は、遥か宙に浮かぶ巨大な光の輪と、焼き払われたドン・レミ村と思われし焦土だった。思わず固唾を呑む。こんな光景を容易く作り出せる相手が、私達が戦わなければならない敵なのだ。

「村を焼き払う、のぉ。こりゃ見たところ、侵略目的じゃなさそうじゃ。ただ燃やして破壊すればいい、損害など知ったことかの雑な攻め方。山賊でもまだ上手くやる。……気に入らんな」

「ノッブ……」

「儂ならこの村全部を無傷で手に入れてやったものを！」

「あ、そこなんだ？」

ノッブは雑な侵略がお気に召さないようだ。ランスロットもうんうん、と頷いてる。国のために戦った者同士、こういうシビアなところは割と似てるんだなぁ。

「立香、行こうか。見ててあんまり気持ちいいものでもないし」

「……そうだね。ドクター、ドン・レミ村以外でここから近い、人がい

そうな場所は？」
『ヴォークルールという町が近いようだ。一旦そこに……おっと？
生体反応あり、どうやら近くに人がいるみたいだ』

周囲を見渡してみると、たしかに少し遠くに何人かの兵士らしい格好をした一群があった。疲弊しているようで少し雰囲気が暗いが、話せる程度の元気はあるだろう。
ひとまず、彼等に接触してみよう。

「先輩、どうコンタクトを取りましょうか？」
「ん～……ここは、私が行くよ。ぐだ男、ついてきてくれる？」
「了解。それじゃ、行ってくるね皆」
「頑張ってください先輩、ぐだ男さん！」
「ミスらんようにするんじゃぞ～」

二人の激励と、ランスロットのサムズアップに背を押されながら兵士達に近づいていく。
兵士達は私に警戒しているようで、槍や剣を構え一触即発といった空気だ。ぐだ男は私の後ろからちまちまついてきている。……よく考えれば動く人形ってすごく怪しいな？

「えーと、すいません。私達はとある場所からやってきた、旅の者なのですが」
「旅の者だと？……その人形、独りでに動いているように見えるがまさかお前呪術師じゃないだろうな」
「あーいえ、この子は……精霊みたいな感じです！」
「ぐだ男です、よろしく」
「よ、妖精だと？……たしかに、害は無さそうに見えるが……」

ジロジロと私とぐだ男を観察してくる兵士達。幸いにも、武器とかは持っておらずぐだ男が小さくて弱そうに見えるからか、いきなり襲

うとかは無いようだった。

「……おい、どうする？奇妙な服装をしてるし奇妙な妖精を連れているが、市民ということで連れ帰って保護した方がいいのか……？」
「いや、だが怪しすぎないか？もしかしたらこいつら竜の魔女の手下かもしれんぞ」
「竜の魔女？」

首を傾げると、兵士達は一度向かい合い頷いた後、竜の魔女について説明してくれた。
竜の魔女とは死んだはずのジャンヌ・ダルクが怨念により復活を果たし、竜を引き連れ侵略してきたことから付けられた二つ名のようなものらしい。ヴォークルールという町もワイバーンの軍勢の襲撃を受け陥落寸前だとか。

「……そんなことが」

おそらく、そのジャンヌ・ダルクこそがこの特異点を作り出した原因、つまり聖杯を所有している者なのだろう。早くも手掛かりゲット、幸先は良い。
ぐだ男は妖精らしく振舞おうと変なダンスを踊ってる。兵士達には好評のようで、微笑まし気にそれを見られており少し顔を赤らめてる。恥ずかしいならやらなきゃいいのに。

「うーむ。どうやら竜の魔女についても知らないようだ。入れてもいいんじゃないだろうか？この妖精、ぐだ男と言ったか？彼も悪い奴じゃなさそうだし」
「ありがとうございます！助かります！あ、あと３人ほど仲間がいるんですけど、彼等も連れて行っていいですか？」
「ああ、構わんぞ。それで、その仲間というのはどんな？」
「それは……おーい、マシュ、ノッブ、ランスロット！いいってさ～！」

「おー、上手く行ったようじゃのぉ！やるではないか！」
「ｒｒｒｒｒｒ……」
「お疲れ様です、先輩！」

声に反応して、大きな盾を持つ騎士の少女と、異国の服を身に纏う少女と、ただならぬ雰囲気の鎧を纏う騎士が出てくる。それを見て固まった兵士達は、３人を指さす。

「あれ本当に仲間？」
「あ、はい。頼りになるし危険はないので安心してください！」
「……わ、分かった。信用しよう！」

というわけで、なんとか説得の末に５人そろって町に案内してもらった。

――――

「……ひどい。ドン・レミ村と同じだ」
「ああ。何度も襲撃を繰り返されて、もうボロボロさ。次を耐えきれるかどうか……」

沈鬱な顔で言う兵士達。町の中にいる人たちも、何時来るかわからぬ襲撃に怯えている。ノッブは関心を示さず通り過ぎていくが、ランスロットはそれを見て何か思うところがあるようだ。親に抱きしめられた少女をジッと見ている。

「だが、最初は怪しいと思ったが強そうな騎士さんが来てくれて安心したよ。喋らなくて少し怖いが、ワイバーンにだって勝てそうなくらい覇気がある！」
「おい待てい。儂はどうなんじゃ儂は。この第六天魔王織田信長を見て、まさか頼りにならぬというか？」

「え？」
「あーダメじゃわこれ。やる気失せたわー、あーもう知らん。儂はもう知らんぞぉ！おい猿、ゲームを持て！特異点なんぞもう知らんわ！」

思わず、と言った風にノッブを見る兵士さん。その目にはありありと「君戦えるの？」と言った風な驚きが見て取れる。ノッブは拗ねた。

「ま、まあまあ。ノッブが強いのは皆知ってるから！」
「そうですよ、信長さん！ランスロットさんとのガチンコ勝負、素晴らしかったです！あれほど円卓最強を追い詰めるなんて流石です！」
「そうそう。それに、今回の特異点で一番活躍するのノッブだと思うよ？ワイバーンに相性いいし」
「フハハ、そうじゃろうて！いやーやっぱわかる奴には分かるんじゃよなこのオーラ。まあ？そこにいるタイマン特化な騎士より？儂できること一杯ある万能サーヴァントじゃからなぁ！」
「……ｈｕ」
「おい貴様今鼻で笑ったな？よしいい度胸じゃ再戦と行こうか。儂の宝具が火を噴くぞ」

二人のやり取りに苦笑してると、カンカンと鐘が鳴らされる。

「ワイバーンだ！ワイバーンが来たぞ！」
「くそ、ついに来たか！君たち、すまないが民を守るのに協力してくれないか!?」
「勿論！マシュ、ランスロット、ノッブ！行――――あれ？」

ノッブいなくない？そう思って周囲を見渡すと、いつの間にかこの町で一番高い塔に上り、上機嫌にワイバーンの軍勢を見渡していた。

「おー、なんじゃなんじゃ。随分とでかい蜥蜴じゃのぉ！」

「お、おい君！何をやっている、早く降りろ！」

塔の上で鐘を鳴らしていた兵士がノッブを心配して降りるように言うが、それを意にも介さずニヤリと獰猛に笑い私を見る。その眼に思わずゾワリと悪寒が走る。あれはまさに、魔王の眼光だ。

「立香よ。儂に何か言うことは？」

「――――ＯＫ、思いっきりやっちゃって、ノッブ！」

「フハッ！いいのう、小難しい言葉よりもよほどやる気が出るわ!!」

ノッブに魔力を吸い取られる。アーチャーとして召喚された織田信長には、宝具が二つある。どちらも強力だが、この状況で最も効果を発揮するのはランスロットと戦った時にも見せたあれだろう。対集団、それも騎乗スキルを持つ相手にはことさら効果を発揮する、かつて武田の軍勢を打ち負かした戦術が形となった対軍宝具――――！

「さて。人も乗っとらん蜥蜴如きには弾が勿体ないが。見せてやろう、儂の宝具を」

織田信長の周囲に淡く輝く光が幾つも生み出され、それらが無数の火縄銃へと変貌していく。百や二百、千などでは生ぬるい。武田の軍勢を倒すため、経費度外視で取り寄せた火縄銃の数は実に――――。

「三千世界に屍を晒すがよい。これが魔王の、三千世界（さんだんうち）じゃぁ!!」

――――その数、実に三千丁。ワイバーンの数などでは到底それを攻略することはできない。それに加え、ワイバーン達は不幸にも竜として召喚されたことにより騎乗スキルを所有している。それに加え竜であることから強力な神秘さえ持っている。つまり何が言いたいのかと言うと。

ワイバーンは羽虫のごとく、一瞬で薙ぎ払われてしまうということだ。

「「……」」

シン、と静寂が町を包む。ぐだ男とランスロットは「まあこうなるか」と納得しているようだったが、私とマシュは知っていてもあの強そうな竜達が出オチみたいにあっさりやられたのに驚愕していた。相性が良いという話は聞いたが、まさかここまでとは。

そして何の事前情報も無く、更にはワイバーンの強さをその身をもって知っていた町の人たちは当然私達よりも遥かに驚いている。何せ町を幾度も襲われ死の象徴として恐れていたワイバーンが、ものの数秒で全滅してしまったのだから。

そしてそんな静寂を生み出したノッブは。

「なーんじゃ、つまらん。蜥蜴は蜥蜴じゃったか」

心底その光景につまらなさそうに息を吐き、私の所に戻ってきた。

次の瞬間、地面を揺らすような歓声が沸き起こる。

「うおおおお!?なんじゃなんじゃ!?何が起こっとるんじゃこれ!?ちょ、やめいやめい!頭を撫でるでないわ!おい立香、ぐだ男、マシュ!見てないでとっとと助けんか!」

「いやー……ちょっとこの中に入り込むのは怖いから、暫くもみくちゃにされててね!」

「流石でした、信長さん!」

「まあ、ほら。自分達の命を救ってくれたヒーローだから、こうなるのも当然だよね!」

「おぬしらぁ!?」

結局その後、ノッブは町の住民たちからもみくちゃにされたので

あった。

「あー、酷い目にあったわい。連日攻められて疲弊しているだろうによくやるのぉ」
「それほど嬉しかったってことでしょ。もう少しこの町に居てくれって言われたけど……」
「特異点を修復する、というのが私達の目的な以上あまり長居はできませんね。なるべく早く特異点の原因を解決して、皆さんを安心させてあげましょう」
「そのためにも、まずは情報収集だね～」

あの後、町の人たちから解放されたノッブを連れて私達は町を出た。町の人たちのことは心配だが、彼等の他にも救わなければならない人はいる。名残惜しむ町の人々を説得し、私達は次の街に行くことにしたのだった。したのだったが……。

「車とかないから、歩くの大変だぁ……」
「先輩、大丈夫ですか？もしよければ私が抱っこして運びますよ？」
「やー、流石にそこまでしてくれなくても大丈夫だよ。疲れて一歩も歩けないってなったら頼むかもしれないけど……」
『フランスは広いから、それなりに歩く必要があるね』
『特異点での移動の手段は現在鋭意考案中だ。今は徒歩で我慢してくれたまえ』

かれこれ１０分ほど歩いているが、まだ目的地は遠かった。ぐだ男は人形だしサーヴァントは人間よりも優れた身体能力を持っているので平気だろうけど、ただの人間である私には徒歩で歩き続けるのは疲れてしまう。早めに移動手段が欲しいところだ。

『ん……？これは、皆気を付けてくれ！サーヴァントの反応が近づいてきている！おそらく、さっきのワイバーンの群れが倒されたのを感

知して来たんだ！』
「サーヴァント……！」

マシュとランスロットが私の前に出る。ノッブは宝具を展開し、ぐだ男は私の背に登る。ワイバーンはなんとかなったが、ノッブの宝具とスキルは基本的に相性が重要となる。弱いサーヴァントなら相性とか関係なくごり押せるらしいが、ある程度の実力を持っていた場合は一気に不利になる危険性がある。

故に、相手がどんな英霊かを見極めなければならない。それがマスターの仕事だという。

歴史はそれなりに成績が良かった私の観察眼を見るがいい……！

『な、これは――――!?立香ちゃん、敵のサーヴァントの数は5騎だ！相手の方が多い、急いで逃げ――――いや、速い！間に合わないか!?』

サーヴァント達は、空から襲来してきた。ワイバーンに乗り、黒い旗をたなびかせ。憤怒に染まったようなその瞳に睨まれ、思わず背筋が凍る。まさか、あれがジャンヌ・ダルク……!?

「マスター、先手を取るぞ。良いな？」
「……うん、お願い！」

ノッブの宝具である千丁の銃が一斉に放たれ、ワイバーン達とその騎乗者達を襲う。しかし襲撃者はそれを見ても何ら動揺を浮かべず、一匹のワイバーンが集団の先頭を飛び、それに乗った一人の騎士――――おそらくはセイバーが、剣を構える。

「――――百合の花咲く豪華絢爛（フルール・ド・リス）」

舞うように振るわれた剣技が、白百合を描き、迫る銃弾を切り捨てる。おそらくは近代のサーヴァント。神秘がほとんど存在しないだ

ろうが、騎乗スキルは持っているはず。にも関わらず、ノッブの宝具が通じないなんて。
そして同時に違和感に気付く。白百合を見た瞬間から、足元がおぼつかなくなる。ノッブが焦ったように叫ぶ。
「幻惑宝具じゃ！あの百合を見るな！」
視界が何かに塞がれる。ぐだ男が顔に張り付いて視界を塞いだのだと遅れて気づく。
「ぐ、これは……!?足が、ふらついて……！」
「ッチィ、厄介じゃのぉ！」
ノッブとマシュも同じく敵の宝具による幻覚を喰らったようだ。一気に不利な状況に追い込まれる。何かが迫ってくる音、おそらくは火球。今の私達に防ぐ術は――！
「ａｒｒｒｒｒｒｒｒｒ!!!」
あった。ランスロットが宙に浮いている火縄銃の一つを手に取り、騎士（ナイト・オブ・オーナー）は徒手にて死せずにより自身の宝具に変換し、火球を撃ち抜く。黒く染まった弾丸は火球を貫き、一匹のワイバーンの頭を砕く。
それに乗っていたサーヴァント――おそらくはジャンヌ・ダルクは舌打ちをして、ワイバーンを乗り捨て地面に飛び降りる。それに追従するように他の４騎のサーヴァントも降り立ち、私達を囲むように立ち塞がった。
「――――驚いた。ワイバーンが全滅したと聞いて来てみれば、それなりに厄介なゴキブリと羽虫がいるなんて」
チリ、とジャンヌ・ダルクの身体から黒い炎が溢れ出る。ぐだ男は

私の顔から離れ、スタリと地面に着地する。
「立香、気を付けて。単純な戦力では、向こうのが上だ」
「へぇ、ガラクタもいるのね。結構可愛いフォルムしてるじゃない。焼き尽くしたいくらいに」
咄嗟にぐだ男の身体を抱き上げ後ろに隠す。彼女はそれを見て益々嗜虐の笑みを深め、手を少し掲げた。
「あらあら、その年になって人形ごっこ?まあいいわ。私の駒を削ってくれたんだもの――それ相応の報いを与えてあげないとね?」
「マスター、下がってください!」
４体のサーヴァントが、一斉に武器を構える。不味い。私とぐだ男は敵の攻撃を一撃でも受ければ消し飛ばされてしまうだろう。マシュ達は私達を守りながら戦わなければいけない上、数では相手の方が上。普通に戦えば負ける。
考えろ。令呪は3画あり、サーヴァントは万全。なんとか突破口は開けるはずだ。考えろ、藤丸立香……!
『これは――!?立香ちゃん、マシュ!さらに一騎、サーヴァント反応がある!』
「また増えるの!?」
「いや、立香。これは、敵じゃないみたいだ」
「え?」
どこからか、こちらに疾走してくる人影。それは猛スピードでジャンヌ・ダルクに近づき、槍……いや、旗を突き刺そうとする。咄嗟にそれに気づいたジャンヌ・ダルクの剣がそれを防ぎ、金属音を響かせる。
人影の姿を隠していたフードが風圧で揺れ、ふわりとフードが外れ

その素顔を露わにする。それを見て、思わず「へ」と間抜けな声を上げてしまう。なぜなら、その顔は目の前で戦っているジャンヌ・ダルクと瓜二つだったからだ。

「アハ――――アハハハハ!!ああ、なるほどそういうこと!こんなことが起きるなんてね。ちっぽけな鼠が、今更何の用かしら?」

「……助けが遅くなり、申し訳ありません」

その姿を見て、確信する。威風堂々と旗を掲げ、私達に向けて微笑を浮かべるその少女こそが。

「ルーラー、真名をジャンヌ・ダルク。あなた方の助太刀に参りました」

ジャンヌ・ダルクであるのだと。

彼女はもう一人の黒いジャンヌ・ダルクと向かい合う。ジリジリとした雰囲気が周囲を包む。黒の聖女は嘲笑を浮かべ、白の聖女は闘志の籠った視線を投げる。

『ジャンヌ・ダルクが二人……!?いや、どちらにせよチャンスだ立香ちゃん!彼女の援護を受けて撤退してくれ!』

「さっきからチョロチョロ煩い男ね。黙っててくれる?」

黒いジャンヌ・ダルクがホログラム上のロマニに視線を向けると、「あっつ!?」と言った後通信が途切れる。まさか、カルデアに攻撃を仕掛けたというのだろうか?

「……あなたは何者ですか?」

「決まっているでしょう?救国の聖女、オルレアンの魔女。フランスの英雄、ジャンヌ・ダルクその人です。あなたも薄々気づいているはずですよ?もう一人の私」

「馬鹿げたことを。あなたは聖女などではありません。私と同じように。そんなことよりも――なぜあなたは、フランスの街や村を攻撃しているのは、何故ですか」
「……何故かって？同じジャンヌ・ダルクであるのだから理解していると思っていましたが、いいでしょう。バカバカしいですが答えてあげま、ってちょっと!?」

発砲音と共に黒いジャンヌ・ダルクの横を銃弾が掠めた。ここで撃つ!?という驚きと共に、ランスロットも含めたその場にいたサーヴァント全員がノッブを見る。
しかしノッブはてへぺろ、とばかりに舌をチロリと出し可愛らしい声で言う。

「いや～隙だらけじゃからつい！あと話が長くて暇じゃったからもういいかな～と思って」
「……あの、信長さん。せめて、目的を聞いてからでも遅くはなかったのでは？」
「んなもんどうせくっだらん理由だし聞くだけ無駄じゃろ」
「わー、シナリオスキップするプレイヤーみたいな言い草だぁ」

ピキリ、と黒いジャンヌ・ダルクの額に青筋が浮かぶ。

「……よし、もういいわ。対話なんて無用ね。死にゆく者達の最後の言葉くらいは聞いてあげようと思ったのだけど、そんなものこいつらには過ぎた物だったようです。ここで潰してあげましょう！バーサーク・ランサー。バーサーク・アサシン。喜びなさい、あのサーヴァント達は強者です。勇者を平らげることこそがあなた達の存在意義、存分に貪り、喰らいなさい」

その言葉に、ランサーとアサシンが目を赤く光らせ獰猛な笑みを浮かべ、ゆっくりと近づいてくる。その姿は、まるで吸血鬼のようだ。

「――――よろしい。では、私は彼女の血を頂こう」
「あら、いけませんわ王様。血は私が頂きたいのですもの」
「で、あれば競争と行こう。どちらが獲物をより刈り取れるか」
「良いでしょう。足だけは引っ張らないでくださいね？」

その進路を塞ぐように、ランスロットとマシュと白いジャンヌ・ダルクが前に出る。チラリとノッブを見るが、傍観の姿勢を取っているところからしてこの戦いに参加するつもりはないようだ。私の護衛も兼ねているのだろうか？

しかし、ランスロットには今武器が無い。素手でも十二分に強いとは言え、サーヴァントを相手にするとなると不安が残る。しかし本命の宝具である無毀なる湖光（アロンダイト）は消費魔力が大きすぎるため、長期戦闘になると私の魔力が持ちそうに無い。そこで、いよいよダヴィンチちゃんに用意してもらった、これを使う時が来たのだと背負ってきた鞄からアタッシュケースを取り出す。

「ランスロット、これ！」
「ａｒｒｒｒｒ……！」

ランスロットはそれを受け取り、宝具の効果で自身のものとする。そう、この道具こそはダヴィンチちゃんが徹夜で作った即興武装。ランスロットのために開発した、現代科学と魔術を併せて作り上げたカルデア技術部の努力と（ぐだ男曰く）浪漫の結晶。

彼はアタッシュケースの取っ手にあるボタンをポチリ、と押した。その瞬間、トランクから光が溢れ周囲を包む……！

――――

技術部門のカルデア職員プラス氏は語る。

「ランスロットさんの宝具を聞いた時は、ビビッと来ましたね。だって、現代兵器さえ宝具にできるんですよ？サーヴァントにすら効くようになるんですよ？しかもある程度カスタマイズできるそうじゃないですか。そんなん聞いたらもう――作っちゃうしかないじゃないですか」

同じく、技術部門の有澤氏は語る。

「いいか、よく覚えておけ。変形と超火力はな――男の義務教育だ」

さらに技術部顧問のダヴィンチちゃんは語る。

「立香ちゃん、いいかい？この機能は決して無駄ではない。芸術とはつまり、自爆にあるんだ」

――そう。この武装、正式名称『フルアーマーランスロット変身セット００１号（続きを作る気満々である）』はつまり、カルデアの変態とか日本の変態とか芸術家の変態とかが張り切っちゃった末に３日かけて作られた変態武装ということだ――！

――

光が収まった後、そこには。

背中に超大型キャノン砲を取り付け。左腕にガトリングガンを装着し。右手にはレーザーブレード（魔力でなんやかんやして作った刃らしい）みたいなのを装着した。

お前どこのロボゲーだよ、と言われそうな騎士が、しっかりポーズを決めて立っていた。

「――パーフェクトだ、ダヴィンチちゃん」

「感謝の極み」

なんかやたら渋い声で言ったぐだ男は大興奮でランスロットを見ている。あとノッブも。マシュと私は何が良いのかあまり分からないのでその雰囲気についていけず、白のジャンヌ・ダルクは「ええ……？」とドン引きし。

相手のランサーとアサシンは「何やってんだこいつ」という目で私達を見て、そして黒いジャンヌ・ダルクは。

「――ちょっと、何よあれ。結構かっこいいじゃない……！」

ちょっとあれなことを言っていた。

VS吸血鬼組

「ａｒｒｒｒｒｒｒ!!」

「……風情の無い英霊だ。騎士が機械を使い闘うとは」

ランスロットが挨拶代わりとばかりにガトリングガンを撃ち続ける。敵のランサーが地面から杭のようなものを出現させ、盾のようにしそれを防ぐが、弾丸は杭を貫通しランサーに迫る。

しかし、ランサーは体を霧のように変化させ弾丸はランサーの後ろに飛んでいった。

「霧への変化……!これは、まさか」

「気づいたか。血塗られし我が逸話の正体に。であれば、隠し立ては必要あるまい」

ランサーの目が赤く光り輝く。口を歪め鋭い牙を露出させ、世界的に有名なそのモンスターは名乗りを上げる。そう、それは夜の支配者にして、ルーマニアの王。

「我が名はヴラド三世。虚構の姿を纏いし吸血鬼だとも。不本意ではあるが、マスターの命令だ。生きて帰れるとは思わぬことだ。」

幾千もの杭がランスロットを襲う。ランスロットは後退しつつガトリングガンでそれらを打ち砕くが、幾らそれらを捌いてもヴラド三世は全く消耗がないように見える。ランスロットもそれは承知の上なのか、ガトリングガンを投げ捨て光の刃を出現させヴラド三世に向かい突撃していく。

ヴラド三世は手に出現させた杭で光の刃を受け止める。一瞬の拮抗の後、杭は断ち切られ続けざまにとどめを刺そうとするが。

「そう簡単にチェックとはいかぬよ」

「――――!!」

背後からの杭がランスロットを襲う。跳躍しそれを避けるが、杭の先端から新たなる杭が生え、空中にいるランスロットを貫こうと迫りくる。光の刃でそれらを切り裂くが、切り裂いた杭が新たなる杭を生み出す地面となる。

必ず仕留めるという殺意を込めた猛攻を凌ぐランスロットだが、そう長くは持たないだろう。

「ランスロット卿、今援護を……ッ!?」

「あらあら、よそ見をしていていいのかしら?」

マシュが加勢に駆け付けようとするが、その隙を逃すまいとバーサーク・アサシンが魔力の弾丸を私に向けて飛ばしてくる。マシュが咄嗟にそれを防いでくれたが、もし数瞬でも遅れていれば私は死んでいただろう。

攻撃されるまで、その気配を感じ取れなかった。これがアサシンの能力か。

「あなたの相手は私よ、お嬢さん。あなたの血はどれほど私を美しくしてくれるのかしら?」

「ぐぅ……!」

マシュに近づき、鋭い爪による近接攻撃を仕掛けてくる。攻撃力は大したことはないようだが、息もつかせぬ連撃に反撃する暇を与えられない。

だが、アサシンが警戒すべきはマシュではなく、もう一人のサーヴァントの方だ。

「はぁっ!!」

「ッ!仮にも聖女がそんな闘い方をするなんてね。少し驚いてしまっ

たわ」
「私は自分のことを聖女だなんて思ったこと、一度もありませんから」
アサシンの背後から白いジャンヌが近づき、旗による突きで襲い掛かる。その攻撃に対応しきれず、少し吹っ飛びうめき声を上げるが、大したダメージを受けている様子はない。
白いジャンヌはマシュの隣に立ち、見るものを奮起させる笑顔で言う。
「焦る必要はありません。相手の攻撃を見定め、反撃の隙を作るのです。私が攻撃を担当します、あなたは防御を。合わせられますか？」
「――――はい！任せてください！」
「ありがとうございます。では、行きます！」
マシュと白ジャンヌが連携してアサシンを攻撃する。数の不利による劣勢に顔を顰めながらアサシンが迎撃するが、攻撃は全てマシュに防がれ、隙を晒せば白ジャンヌによる強烈な一撃を食らうことになる。おそらく、この二人であれば問題無く勝てるだろう。
「ま、こんくらいは簡単に勝てるようにならんとこの先が思いやられるからの。相手の大将が油断して慢心かましてる内にとっととあの二騎を討ち取ってしまえ」
「ノッブは戦わないの？」
「参加せんでも問題なかろう。マシュの方は見ての通りじゃし、ランスロットの方も……ほれ、そろそろ決着がつく」
ランスロットとヴラド三世の闘いは益々激化していた。圧倒的な数の杭をすべて防ぎ切りながら、少しずつ近づいていく。ヴラド三世は少し焦りを見せながらもランスロットを近づかせないよう杭による迎撃を繰り返しているが杭の攻撃に慣れたのか、苦もなくそれを捌きながら、杭を足場にさえしながらヴラド三世の喉元に近づいてい

く。

「ａｒｒｒｒｒｒｒｒ!!!」

「……なるほど、認めよう。貴様は私が思っていた以上の騎士のようだ」

杭の生成を止め、大きく後ろに下がるヴラド三世。その行動に警戒し、すぐに攻撃しようとはせず立ち止まるランスロット。両者の間に緊張した空気が流れる。

先に動いたのはヴラド三世だった。右手を挙げ、高らかにその名を唱える。

「我が血に濡れた生涯をここに捧げよう。さあ、この宝具を捌き切れるか、湖の騎士よ！極刑王（カズィクル・ベイ）!!!」

幾千、いや幾万の杭がランスロットを襲う。その攻撃範囲は私やマシュ、そして味方であるはずのアサシンにまで及んだ。

「よっと。おいマスター、ぐだ男。あまり近づくでない、こういうことが起こりうるからの」

「ご、ごめんノッブ！ありがと！」

「この規模からみて、対軍宝具かな。オスマントルコ兵を串刺しにした逸話が宝具となったものか」

「儂の宝具と同じようなものか。味方も纏めてとは、連携が全く取れんと見える」

ノッブが私とぐだ男を抱えながら、あまり使ったところを見たことがない刀で杭を切り払う。ランスロットの方に杭は集中しているので、私たちへの攻撃はおまけのようなものなのだろう。白ジャンヌはマシュの盾によりダメージを受けておらず、マシュ自身もその防御力で防ぎ切っている。しかし、味方であるはずのアサシンは杭の攻撃を

食らったのか、顔色を悪くして腹の辺りに滲んでいる血を押さえていた。

「ぐっ……！」

「これだから狂戦士というやつは。平時なら、というよりまともなサーヴァントとして召喚されていればしっかり宝具をコントロールしていたじゃろうに」

「バーサーク・サーヴァントってやつだよね」

「うむ。狂化を無理やり付与なんぞするから、技量も下がり判断能力も鈍る。そんなもの幾ら数を並べても碌に連携もとれまい。それも、あんなサーヴァントであるならなおさらの」

「まあ、一部技量が下がらない例外がいるけど。あそこにいるバーサーカーとか」

斬り、砕き、打ち払い。先ほどよりも遥かに速いペースで襲い掛かる杭を、新装備を駆使し退けていく。中世の騎士がＳＦチックな装備で戦っている様は少しだけシュールだが、初めて使うであろう武器を何の苦もなく使っている様はランスロットのスキル無窮の武練による効果だという。精神的デバフにかかっていようと何の問題もなくその技量を振るえるという、特定状況下においては絶大な効果を発揮するその時代において無双ともいえる活躍をした英雄にのみ与えられるスキル。

それをもって、彼は剣以外の近代兵器でさえ自分の手足のように扱っていた。しかし、それも限界が来る。

「――――」

「さあ、どうする湖の騎士。もう逃げ場は無いぞ。その剣で打ち払おうとも、天高く飛ぼうとも逃がしはせぬ。さあ――――覆せるものであれば、覆してみるがいい!!」

ヴラド三世が手を振ると共に、周囲を囲んでいた杭が一斉にランス

ロットに襲いかかる。思わず令呪を使おうとするが、ぐだ男に手をつかまれ静止される。しかし、この状況をなんとかする術なんて――。

ドン

大地を揺るがすほど大きな銃音が響く。まるで大砲のようなその音は、ランスロットが背負っていた巨大なキャノン砲から発されたものだった。

発射された銃弾は、杭の包囲を貫通し――ヴラド三世の胸に巨大な穴を開けていた。

「な……に……？なぜ、霧となれぬ……！これは、まさか……！」

『その通り。そのキャノン砲は対使死徒用に作られた銀の弾丸を使った武装さ。ぐだ男君に頼まれて作ったけど……最高の場面で効果を発揮してくれたようだね？』

杭が消え、ヴラド三世が膝をつく。しかし、まだ消滅する気配はない。普通であれば死ぬほどの重傷だが、何かスキルの効果が働いているのだろうか。

ヴラド三世は忌々し気に自分の身体を見る。

「おのれ――忌まわしきあの宝具の効果さえなければ、このようなことにはならずに済んだのだがな。不甲斐ない」

血を吐くような憎悪を込めそう言うヴラド三世は、重傷の身体でありながら飛び上がり、ワイバーンの背に乗る。

アサシンも同様に傷を負ったためか、撤退することを選んだようだった。

「――はぁ。判断を誤りました。あなた達に任せるべきではありま

せんでしたか」
「待ちなさい。私が攻撃を受けたのはそちらの見境い無い攻撃をした男のせいなのだけど？」
「貴様が血に拘りすぎるあまり、手加減をしたのが原因だろう。なぜ宝具を使わなかった。それさえ使えばもう少し善戦できていたはずだが？」
「黙りなさい。あなた達に私の決定に対し反論する権利などありません。それに……ゴミ虫と思ってはいたけど、野犬くらいにはやるようです。であれば、私たちも少々本気を出すとしましょう」

黒いジャンヌが味方のサーヴァント2騎と共に、ゆっくりと近づいてくる。おそらくすでにあちらに慢心はない。宝具を惜しみなく使ってくるはずだ。
マシュがチラリとこちらを見る。このまま戦っても、消耗している私たちで勝てるかは微妙だ。さらに相手の戦力もまだ明らかになっていない。私は頷き、叫ぶ。

「総員撤退！　態勢を立て直そう！」

「逃がすと思っているのかしら？」

黒い炎が私たちの行く手を阻む。これは、やるしかないか……!?
そう考えた直後に、どこからか美しい女性の声が響いた。

「ヴィヴ（フ）・ラ（ン）・フランス（万歳）！」
「な――!?」
「ガラスの馬車ぁ!?」

その声と共に、車体や馬までもがガラスでできた美しい馬車が、私たちと黒いジャンヌの間に割り込むように突進をしてくる。
その運転手である少女は、薔薇のような笑顔を浮かべ言う。

「初めまして、皆さん。あなたが誰なのかは知っているし、とても怖いのだけれど――あなたがこの国を侵すというのであれば、私は戦わなければいけません」
「――ヴェルサイユの華。マリー・アントワネット王妃。こんな状況でなければ、諸手を振って喜んでいたのですけどね」
「マ、マリー・アントワネット王妃!?」
「はい！ご紹介ありがとう！そして、あなたの出番よアマデウス！」
「まったく、おてんばな運転だなぁ！だけどナイスだマリー！さあ、僕からも一発良いの喰らわせてあげよう！聞くがいい、魔の響きを！死神のための葬送曲（レクイエム・フォー・デス）!!」

その場所に乗っていた黒服を纏った金髪の男が、幾人もの演奏家を出現させ聞くもの全ての能力を下げる演奏を行う。黒のジャンヌは鬱陶し気に耳を塞ぐ。

「面倒な宝具を……!!」
「いやぁ、そう言ってくれると嬉しいね！僕みたいなサーヴァントにも使い道はあるってことさ！さあ、乗ってくれ君たち！さっさとしてくれないと、僕の宝具が効きづらいやつが追ってくるぞ！」
「ぐだ男、マシュ、行こう！」
「はい！」
「了解！」

ぐだ男の手を取り、馬車に乗り込む。ランスロットとノッブは馬車の屋根に上に立ち、追い撃ちとばかりに弾幕を張り追ってこれないようにする。
最後に後ろを見てみると、憎悪の炎を目に宿らせた黒いジャンヌが、去っていく私たちを鬼のような形相で睨んでいた。
「……あれがデレデレになるんだから主人公ってすごい」

「ん？何か言った？」
「いんや何も～」
そんなこんなで、謎のサーヴァント達の協力もあって私たちは逃げきれたのであった。

聖女（鉄壁）と聖女（今回は鉄拳は無しです）

「……まさか、逃げられるなんてね。酷い屈辱だわ」
「おお、ジャンヌ。どうやら敵の陣営には、バーサーク・ランサーを倒す程の実力を持つサーヴァントがいる様子。何の手立ても無ければ、我々の障害になり得るでしょう」
「ええ、そうね。それに加え、あの黒い騎士。真名看破で確認しましたが――彼は湖の騎士。竜殺しの逸話を持つ英霊です」
「なんと……！」

黒いジャンヌ――竜の魔女は自身の居城たるオルレシアンに戻り、側近たる男と今後の作戦を話し合っていた。
男の姿は不気味な色のローブを着用し、眼を広く？く蛙顔をした恐ろしい風貌の巨漢。彼は少し考える素振りを見せた後、竜の魔女に進言する。

「であれば、あの騎士に対して相性の良いサーヴァントを宛がうしかないでしょう。ファフニールが倒されたとなれば、大きな損失を生みます。しかし、我らが召喚した英霊の中で湖の騎士に相性がいいサーヴァントと言うと……」
「問題ありません。いないのであれば、また呼べばいいのです。ジル、召喚の準備を。新しいサーヴァントを呼びましょう」
「承りました、ジャンヌ。しかし、一体どのような英霊を召喚するおつもりで？」
「ふふ、簡単なことよジル。あの騎士がかつて王を裏切り、国の崩壊を作った男であるならばそれを恨む者も数多いでしょう。であるならば――」

そうして、新たなるサーヴァントの召喚が実行される。召喚されたクラスは――バーサーク・ランサー。
堅牢な鎧に身を包み、美しい白い手を持つ彼女は、狂わされ濁った

その目で自分を呼び出した主を見る。
その様子を見て、竜の魔女の口は邪悪に口を歪めた。

「――――ふぅ。はい、ここまで来たら安心かしら？」
「みたいだね。いやー、ヒヤヒヤしたよ！マリアがいきなり突進していくもんだったからね。といっても、あの状況ではそれが正解だったようだけどね」

私たちは現在、戦闘した場所から少し離れた森の中で休憩していた。
ピンチな場面で助けに来てくれたサーヴァント、ジャンヌ・ダルクとアマデウス・モーツァルトとマリー・アントワネットは自己紹介と事情の説明を行ってくれることになった。

「それじゃあ、まずは私からね！先ほども名乗りましたが、私の名前はマリー・アントワネット。召喚されたクラスはライダーです」
「そして僕の名前はさっきマリアが言ってくれたように、アマデウス・モーツァルトだ。クラスはキャスターだが、戦闘能力には期待しないでくれ。何せ、多少魔術を齧っていたとは言え戦士や王様じゃなくて音楽家だ。僕は天才だが、闘いなんてのは専門外でね」
「えーと、たしか……フランス王妃と、レクイエム作った人、だよね？」
「だね。ほかにも色々逸話とかはあるけど、それは俺があとで説明するよ。真名やクラスも大事だけど、俺としてはまずなんで助けてくれたのかとか、そういうのを説明してほしいかな」
「おいおい、そう焦るなって人形君。説明がいる存在としては、君の方も大概だと思うけど？」
「コラ、アマデウス！そんな言い方はダメよ。今は竜の魔女を倒すために協力しなくてはいけないのだから」
「……ま、そうだね。それじゃ、そっちの自己紹介もお願いできる？僕

たちはまだ君たちが何者かも知らないんだよね」

マリー・アントワネットにたしなめられ、渋々と言った感じに丁寧に対応するアマデウス。彼はぐだ男を見て何か思うところがあるのか、ぐだ男に対して少し辛辣に接しているように思える。ぐだ男もそれに対し気にする様子も無く、まるでこうなることが当然だろうという風にアマデウスと接している。少し違和感を覚えたが、ひとまずは言われたように自己紹介をすることにした。

「では、私から。シールダー、マシュ・キリエライト。人理保障機関カルデアの職員にして、先輩の第一のサーヴァントです！と言っても、英雄の力を借りているだけなのですが……」

「うむ！では、次は儂じゃな！儂の名は織田信長。第六天魔王、魔王のクラスにて召喚された織田信長よ！……え、ちゃんとアーチャーって言えって？わかるからええじゃろそんなもん」

「……ｒａａａｎｓ……ｒｏｏｔ……」

「あ、この人はサー・ランスロット。バーサーカーで召喚されているので、喋ることはできませんが理性はちゃんとあるので安心してください！」

フンス、と少し誇らしげに名乗るマシュ。少しふざけながら名乗るノッブ。そして名乗ろうとするも唸り声しか上げられず、代わりにマシュに言ってもらうランスロット。最後に、私とぐだ男も名乗りを上げる。

「俺はぐだ男。立香のメンタルケアのために作られたロボットだよ～。よろしくね」

「えーと、私は藤丸立香って言います。カルデアで、マスターをやってます」

「マシュに信長にランスロット、ぐだ男と立香ね！よろしくね、皆！」

「よろしくお願いします、マリーさん」

「……今のマリーさんっていう呼び方、とても良いわ！」

各々の自己紹介が終わり、最後に白いジャンヌ・ダルクへと視線が集まる。ジャンヌは少し迷った後、意を決したように口を開いた。

「ルーラー、ジャンヌ・ダルク。その……恥ずかしながら、英霊としての自覚が少し薄いです。私が知っているのは、オルレアンがジャンヌ・ダルクを名乗るもう一人の私……便宜上、竜の魔女と呼びましょう。彼女がこのオルレアンに脅威をもたらしているということ。そして、私はそれを排除するために呼ばれたのだと、漠然と理解しているだけです」

「まあ！あなたがあの聖女ジャンヌ・ダルクなのね！生前から一度は話したかったと思っていたの。会えて嬉しいわ！」

「……私は聖女などではありません。私は自分の信じたもののために旗を振って、そして己の手を血で染めました。勿論それに後悔はありません。ですが、私は自分の行いがどれほどの犠牲を生むのか理解していなかった。自分の理想のために夢を見た田舎娘は、流れる血を見てもそれでも畏れることはなかったのです。……そんな私が聖女など呼ばれても、私自身が最も納得できません」

「たしかにそうかもしれないわ。けど、あなたが歩んだ道は、そしてあなたが作り出した物語は真実です。そしてそんなあなたを見て、私達は憧れを抱き、そしてあなたを忘れないのです。フランスの英雄、ジャンヌ・ダルクという名を。けれど、自分のことを聖女ではないというのであれば私もそれに倣いましょう！私はあなたのことをジャンヌと呼ぶから、あなたも私のことは是非マリーちゃんとお呼びになってくださいな」

「いえ、それは……。……分かりました。けど、流石に馴れ馴れしすぎるのでマリーさん、とお呼びさせていただきますね？」

「ええ、それでも構わないわ！」

流れるようにぐいぐいと相手に踏み込み、そして相手の心を開かせ

たマリー・アントワネットの手腕に思わず感嘆する。初対面の人間をああも褒め称え、そしてすぐに距離を縮めるなんて私にはとてもできないことだ。それに加え、彼女のそれには一切の悪意がない。あれがベルサイユの華と呼ばれた、マリー・アントワネットのコミュ力か……！

「ボッチの立香や俺じゃ、とても真似できないねあれ……少し羨ましいなぁ」

「う、うるさいなぁ。……まあ、事実だけどさ。私もあんな風になれてたら、友達とかいたのかな」

「ん～……その場合、時々虚空に向かって喋りだす変な奴っていうマイナスイメージがあるから、俺と喋る頻度を減らした上であんな風にできればワンチャン？」

「ならいいや。友達なんていなくても困らなかったし」

「マシュやサーヴァントにはあんなに仲良くなれるのに、なんで普通の人とは仲良くなれないのかなぁ……」

あまり長々とこの話はしたくないのでさっさと打ち切る。それに、ぐだ男がいなかった時期から私には友人なんて一人もいなかった。小学生時代はそれなりにいたと思うけど、引っ越しや親のことでそれ以降会うような人もいなかったし。中学生時代もまあ、あまり思い出したくもない記憶でいっぱいだ。私は初めから、友達とかを作るのには向かない性格なのだろう。

そんなことを考えている内に、アマデウスが説明をしだした。

「ふむ……おそらく、彼女も僕らと同様このオルレアンで起きた異常事態を解決するために聖杯に呼び出されたんだろうね」

『聖杯に？それはどういうことかな』

「僕もマスターが存在しないのに召喚された理由は分からなかったんだけど……」

そこから、アマデウスによる説明が始まった。

簡潔に纏めると、マスターがいないにも関わらず召喚されたサーヴァント達は、竜の魔女が所有していると思われる聖杯に呼び出された、野良サーヴァントと呼ばれるものらしい。通常より魔力配給は受けられないが現界する程度の魔力は与えられ、この地で起きている異常事態を解決させるために抑止力の介入により召喚されたのだとか。

こちらの事情はドクターロマンが一通り説明してくれた。アマデウスはふむと頷く。

「なるほど。ことは重大なようだね」

「フランスだけの問題ではないというのであれば、これは益々負けられません！」

「とは言っても、戦力差はなかなかに大きいからねぇ。それに加えて、あまりよろしくないニュースもある」

『よろしくないニュース？』

「サーヴァント以外にも脅威があるということだ。僕らが情報収集している中で、巨大な黒い竜が目撃されたという情報があった。ワイバーンのような亜竜ではなく、正真正銘本物のドラゴンがいるということさ」

『そんな！もしそうなら、サーヴァント以上の強敵だ。竜は幻想種の中でも最強格。それを打倒するには、竜殺しの逸話があるような英霊じゃない、と……あ、いたねそういえば』

そう言って、ドクターロマンはランスロットを見る。

「ランスロットって竜殺しの逸話があるんですか？」

『正確には火を吹く大蛇を殺したという逸話だけど、その逸話がランスロットの無毀なる湖光（アロンダイト）に竜殺しの特性を付与させたようだ。絶対とは言わないまでも、ランスロットであればおそらくその竜に対して有利をとれるだろう』

「ほんと色々できるね、ランスロット」

「まあ円卓の騎士、それもその中でも最強の騎士だったからね。対

サーヴァント戦では切り札みたいなものだしね。燃費は最悪に近いから、全力を出せる時間は限られてるけど。それに加えて、マスター殺しをなんとかできるマシュもいるし、大群相手にはノッブがいる。大抵の相手はどうにかなると思うよ？」
『アハハ、けどあんまり油断はしないようにね。サーヴァントには相性というものがある。もしランスロットや信長公に相性の良い敵をぶつけられたら……』
「ええ。それに加えて、竜の魔女も私と同様に、ルーラーのクラススキルを所持しているはずです。真名看破により、ランスロット卿が竜殺しの逸話を持つことも知っているはず。であれば、何らかの対策を立ててくるでしょう」
『ああ、そうか……。やっぱり一筋縄ではいかないね。ひとまず、今日のところは休んで――――!?皆、話の途中だけどワイバーンだ！どこかで戦闘しているようだ、急いで様子を見に行ってくれ！』
「ッツ!?了解です、ドクター！先輩、行きましょう！」
「うん！ぐだ男、乗って！」

ドクターロマンの案内に従い、戦闘が行われているという場所に駆けつける。そこでは、ワイバーンを相手に苦戦している様子の騎士達の姿があった。
騎士たちを率いている隊長格らしき人は戦えているけど、ほかの騎士はワイバーンに怯んでしまっている。このままでは全滅してしまうだろう。

「マシュ、ノッブ、お願い！ランスロットは悪いけど待機で！」
「ａｒｒｒｒ……」
「うん、ほんとごめん！実はさっきの戦闘で結構疲れてるんだ！」
「まあ、あんだけ大立ち回り繰り広げてたらね……。宝具も使用しっぱなしだったし」
「燃費が悪いバーサーカーはそこで待っておれ。なーに、別に全部倒してしまっても構わんのじゃろう？」

「さっきはランスロット卿ばかり活躍してましたし、今回は出番をもらっていきますね。マシュ・キリエライト、突貫します！」
「ジャンヌさんとマリーさんとアマデウスさんもお願い！」
「了解です！」
「えー、彼女たちだけでいいんじゃないの？僕は弱いぜ？」
「愚痴ばかり言ってはいけないわ、アマデウス。さあ、行きましょう！」

一匹のワイバーンがこちらに気づき炎を吐くが、マシュがそれを盾で受け止め、炎を受け止められたことで少し硬直した隙にジャンヌが首に旗を突き立て仕留める。
他のワイバーンも強敵の存在に気づき一斉に襲い来るが――。

「～～～～～♪」
「ほーら、コンサートの時間だ！即興だが君たちの耳には勿体ない位の出来栄えさ！」
「お、なんじゃ面白い演奏じゃの。であれば、儂からは火縄銃の合唱でもくれてやるかの。ほれ、世の中にはコップで演奏することもあるらしいし？」

マリーの歌と、アマデウスの魔術を交えた演奏によりバタバタと地面に落ちていく。撃ち漏らしもノッブが処理していき、ものの数秒でワイバーンの群れは全滅してしまった。
その様子を茫然と眺める騎士達だが、騎士の隊長と思われる男がハッと気づいたようにジャンヌを見る。

「ま、まさか貴方は。ジャンヌではありま――」

パシッ、と何かをつかむ音がその場に響き渡った。
その音がする方向を見てみると、ジャンヌの前に立ちはだかったランスロットが、騎士の一人が投げたらしい石を片手で掴んでいる姿が

あった。

「竜の魔女、ジャンヌダルク……！貴様のせいで、我らの故郷、が……!?」

「――――」

ランスロットは凄まじい怒気を放ち、石を投げた騎士に視線をやる。騎士達はその気迫にたじろぎ、一歩後ろに下がる。

しかしジャンヌはそんなランスロットの前に出る。

「構いません、ランスロット卿。お気遣いは不要です」

「……」

「き、貴様が蘇ったせいで！故郷は竜の群れに焼かれ、家族も失った！幾人もの戦友は死に、そして今なおこの惨劇は続いている！全て、貴様のせいだ!!」

「やめろ貴様達！彼女は我々を助けてくれたのだぞ！」

怒りで我を失っている騎士達は、今にもジャンヌに襲い掛からんと息巻いている。ジャンヌはそれを少し悲しそうな顔で見つめ、踵を返す。

「行きましょう、皆さん。……この場にいては、皆さんも巻き添えを食らいます」

「けど……事情を説明しなくてもいいの？」

「事情を説明したとしても彼らが納得するとは思えません。彼らが混乱するだけでしょう。それに……」

ジャンヌは少し微笑み、優しい顔で言う。

「彼らが私への憎しみで立ち上がるというのであれば、それでも良いかと思えるのです。馬鹿な考えだとは分かっていますけど……それ

がきっと、私にとって何よりも大切なものだと思えるから」
「……そっか。分かった、それじゃあ――――」
「立香、下がって！」

ぐだ男が急に私の手を引っ張り、マシュが私の前に飛び出し盾を構える。私がさっきまでいた場所に小さな渦が発生し、それが弾け爆発する。
それは地面を抉り、私を庇ったマシュは後ろに吹き飛ばされる。爆発が収まるとそこには小さなクレーターを作られていた。もし私があれの射程範囲にいたら、と思うとゾッとしてしまう。
「流石にこれくらいは防げるみたいね。マスター殺しはあまり好きではないので安心しました」

声がする方を見ると、そこには青く長い髪をなびかせる、竜の魔女に付き従っていたサーヴァントの一人がいた。
青い髪のサーヴァントは手に持った錫杖のようなものを構え近づいてくる。
「……あなたは」
「初めまして、オルレアンの聖女、ジャンヌ・ダルク。あなたを試しにやってきました」

聖女のような美しい笑顔で、そのサーヴァントはジャンヌを見た。

閑話　織田信長ＶＳランスロット

「ほー、シミュレーションルーム、とな？そんな便利なものがあるんじゃのぉ」
「と言っても、ドクターロマンから話は聞いているっていう程度だけどね～」
「それと、守護英霊召喚システム・フェイトっていう設備のおかげでサーヴァントは消滅したとしてもカルデアで記憶を保ったまま復活できるようになってるね」
「ほうほう、消滅しても平気、と」

現在、私達はマイルームで雑談にふけっていた。メンバーはノッブと私、内容はカルデアの不思議設備についてだ。
ノッブは特にシミュレーションルームに興味があるらしい。こんなものがあれば幾らでも強い兵士が生み出せたのにのぉ、とはノッブの談である。私も使ったことが無いので少し興味があった。

「せっかくカルデアに来たんじゃ、せっかくだし使ってみるかの！よし立香、ついてまいれ！」
「それはいいんだけど……多分今は先客がいるよ？」
「先客とな？」

私とノッブがシミュレータールームに着くと、そこにはモニターを見るダヴィンチちゃんとぐだ男がいた。
ぐだ男はマイルームでの一件の後皆に紹介されたのだが、マシュは少し驚いた後仲良くなり、ランスロットは大して驚かずノッブは「なんかアイデアが浮かびそうじゃなこれ」などと言っていた。
カルデアの一員としてのぐだ男の仕事は私のメンタルケアのはずだが、特に問題無しと判断された場合は職員の手伝いや、書類の整理などをしているらしい。

「おっと、立香ちゃんに信長公じゃないか。シミュレータールームを利用しに来たのかな？」
「そうなんじゃが～……なるほど、先客というのはあやつか」
「だね～。いやー、凄まじいもんだね。冬木では、ランスロットがいたからかなりスムーズに探索ができた。その分、魔力消費がでかすぎるという弱点はある。けど――――」
「このシミュレータールームではそれを心配する必要は一切無い、というわけさ。体の調子や戦力の確認のためにはうってつけだ。今は全力時の力がどれほどのものかテストしているんだけど……彼、まだまだ余力を残してるみたいだね。一応現在の難易度が現状出せる最大の難易度のはずなんだけどなぁ～」

モニターには、冬木（まだ燃えてない状態らしい）を模した場所で大量の仮想敵を相手にゲームみたいに無双してるランスロットの姿があった。
仮想敵のレベルは最大、下手をすればサーヴァントとも張り合える敵相手にもランスロットが苦戦する様子は一切無く、手に持った黒く染まった湖の剣で何十もの仮想敵を切り裂いていた。
「ふむ……のうぐだ男。あの騎士、名はランスロットと言ったか。もし儂とランスロットがやり合った場合、どっちが勝つと思う？」

その質問に、ぐだ男は少し考えて。

「状況によるとしか言えないかな。ランスロットがセイバーとして召喚されていれば、宝具の特効効果が載るけど今はバーサーカー。騎乗スキルは持ってないし、あまり相性が良いとは言えないけど……それが無くても戦国時代の魔王、織田信長の実力は折り紙付き。どうなるかはマスターの腕次第、かな？」
「ほほう、なるほどのぅ。技術顧問よ。奴の全力を見たいといったな

？」
「……ああ、なるほど。了解だ、少し待ってくれ。今いる奴が片付け終わった後で登場させよう」
ノッブは不敵な笑みを浮かべ、シミュレータールームの待機室へと進んでいく。
まあ、つまりはそういうことなのだろう。
「円卓最強の騎士と戦国時代の覇王って、普通じゃ考えられない闘いだね……」
「それが聖杯戦争の醍醐味ってやつだからね。立香、ちゃんと見ておきなよ？自分の使役するサーヴァントの性能を知るのは、良いマスターになるための近道なんだから」
「うん。けど、実際どうなるんだろ？ランスロットの凄さは冬木で知ってるけど、ノッブの強さはまだ何も知らないからなぁ……本人から簡単に紹介してもらったけど」
ノッブ曰く、アーチャーとして召喚された彼女の最大の武器は相性ゲーにあるらしい。
セイバーとライダーに刺さりまくる騎乗特効を持つ第一宝具と、高い神秘、例えば神性などを持つ相手には致命的になるほどの第二宝具。
これらの内どれか一つでも刺されば、かなり優位に立って戦闘ができる、らしい。
「さて、二人とも雑談はそこまでだ。そろそろ始まるぜ？」
そして、ランスロットのほかに何もいなくなった倉庫街に新たなサーヴァントが現れる。
少しばかり目立ちたがりな彼女はコンテナの山の上に立ち、期しくもその対峙はかつてバーサーカーが参加したある聖杯戦争と酷似し

た状況だった。

――――――――

「――――――」

精霊より委ねられた聖剣を片手に、湖の騎士は眼前に立つ強敵を前に唸り声を上げる。

目の前の英霊がどのような逸話を持つのかは知らず、そしてどのような闘い方をするのかはまるで分からないが、確信できることは一つあった。

まず間違いなく、この英霊は――――強い、と。

「いやー、いきなりすまんのう。儂も身体を動かしたいなーって思ってる時にちょうどおぬしがおったものでな。せっかくだからやり合おうと思ったんじゃが……やる気満々みたいじゃな」

何も答えず、華奢な体に見合わぬ覇気を放つ少女に剣を向ける。

今回のマスターとマシュ・キリエライトに宿った英霊の影響により多少狂化が薄れ理性が戻っていようと、それでも自身の本質は暴れ狂う狂戦士。

円卓最高の騎士である剣士の姿ではなく、物言わぬ狂戦士として呼ばれたのであれば、自身がすべきことは一つ。

故に、剣士の時であれば少しの戸惑いがあったであろうこの少女を相手にも――――この剣の切っ先が揺らぐことはない。

今この場に必要なのは、目の前の少女がアーチャーであり、自身が

バーサーカーであるという事実だけだった。

「まどろっこしい言葉はいらぬようで何よりじゃな！さて、異国の兵（つわもの）よ――簡単に倒れてくれるなよ？」

「ａｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒ！」

一撃で決着をつけるつもりで放つ全力での跳躍からの上段斬り。

大地が割れ、爆発が起きたかのような風と共にアーチャーに渾身の一振りを見舞うが、それで倒れるほどの英霊で無いのは分かっている。

ギリギリと鈍い金属音を鳴らしながら、アーチャーは腰にかけていた刀を抜き、聖剣の一撃を防いでいた。

「あ、こりゃダメじゃな。白兵戦は無理と見た！」

「――！」

いかに名刀と言えど、神造兵装である宝具の一撃を耐えるには無理があった。

たった一撃でアーチャーの持つ刀は罅割れ、これ以上剣を交えるのは不可能だと悟るや否やすぐにその場を飛び退き自身の宝具である『三千世界（さんだんうち）』を展開。

宙に浮かぶ大量の火縄銃が騎士に放たれる、が。

「……傷一つつかんとか、ちょっと出鱈目過ぎんかお主」

銃弾の雨を避けながら、時には斬り落としながら、アーチャーに近づいていくバーサーカー。

流石にいずこかの聖杯戦争で戦ったどこぞの桜色の髪をした剣士のような反則的な移動はしていないが、それでも十分にアーチャーの首元に迫るには足りていた。

「ぬおお!?ていうか今更ながらバーサーカーなのに魔力気にしなくていいの反則的じゃな!?」

自身の両の手にも火縄銃を生み出し、数より質とばかりにレーザーのようにド太い銃撃を放つ。

通常の弾丸よりも速いそれにバーサーカーは怯む様子も無く剣を盾に突進する。

普通の剣であれば破壊されていただろうが、バーサーカーが手に持つ剣はかの騎士王が持つ聖剣と同じだけの強度を持っている。

例え宝具による一撃であろうと、その剣が破壊されることは有り得なかった。

コンテナの陰に隠れながら逃げ回り、火縄銃で迎撃するアーチャーとそれを追い詰めるバーサーカー。

勝敗は殆ど決まったと思われた。

「――――なるほどのぉ」

しかし、追い詰められて尚、アーチャーは笑った。

その笑みにどこか底知れぬ気迫を感じ取ったバーサーカーが一気に勝負をつけようと銃弾が己の鎧を掠めるのも気にせず、防御を捨てて攻勢に移る。

「少しばかり様子見をしたが、うむ。地力では完全に儂の負けじゃネこれ！いやー、勝てる気がしないネ！」

ケラケラと笑いながら、自身の首筋を狙った一太刀を壊れかけの刀で受け流す。

刀は耐え切れずにガラス細工のように破壊され破片が飛び散るが、アーチャーは仕事を果たした愛刀の柄を褒めるように撫でた後、真の切り札を開放するために己が身に宿る魔力を開放する。

「種は割れた。お主のその剣の強さのな。察するに、その宝具は自身のステータスを向上させる効果とかがあるんじゃろう。そしてその宝具の効果に加え、狂化によるステータス上乗せにダメ押しとばかりに剣技は鈍らず、いやーマジで反則級じゃネ！最強の騎士と呼ばれるに足りる奴じゃ」

――――周囲一帯が火に包まれる

まるで現在のマスターとともに駆け抜けた冬木のようになっていく様子に、バーサーカーの長年の経験で培った第六感が危険を告げる。

このままでは不味い、なんとかしなければ負ける、と。

だが、それを気づいたところでもう時は遅く、そしてそうなるようにアーチャーは戦場を整えた。

気が付けば港湾区画から少し離れた河川敷近くまで誘導され、隠れられる場所も無くアーチャーの宝具から逃げられない場所まで誘き出されていた。

「だからこそ、残念じゃったな。その力こそが命取りよ」

バーサーカーは気づく、自身の霊基が歪み、燃やされ、存在を保つことすら容易ではない状態になっていることに。

そして、アーチャーの身体が神秘を殺す炎に包まれ燃え盛っていることに。

「三界神仏灰燼と帰せ――――」

「■■■■■■!!!!!」

発動される前に勝負を付けなければならないとバーサーカーは理解し、自身の宝具である無毀なる湖光（アロンダイト）の真名を開放する。

赤黒く染まった魔力が剣から発され、過負荷によって漏れ出た光はその剣が人間によって作られたものでは無いと示しているかのよう

だった。
自身の全力の宝具を叩き込むため、地を蹴り剣を掲げ、そして――。
「――――!?」
「我が名は第六天魔王波旬、織田信長なり」
――バーサーカーの宝具は、たしかにアーチャーに命中した。アーチャーが左腕で受け止めようとしたが、腕ごと両断することも可能なはずだった。
しかし、ありったけの魔力を注ぎ込んだはずの無毀なる湖光（アロンダイト）は鮮烈な笑みを浮かべる目の前の少女の腕の薄皮一枚すら切り裂けなかった。
剣から漏れ出ていた光は消え失せ、周囲は完全にアーチャーの支配下と化した。
「さあ――三千世界に屍を晒すが良い」
ダメ押しとばかりに、周囲に展開された三千丁の火縄銃。
これより、魔王の蹂躙が始まる。

――――

「――すごい」
私はその光景に思わず息を呑んだ。
あのランスロットが碌に反撃することもできず、追い込まれている。
鎧が砕け、血が流れ、灼熱の世界から逃げ延びようと必死に動くが、

その動きも今までのものと比べて格段に落ちている。
　それでも尚、食らいつき隙を伺ってるのは流石だが、これは……。
「彼女の宝具は神性と神秘を殺す、対神性特化の固有結界に似た空間を形成する宝具ということか。うん、無茶苦茶だね。相性ゲーにも程がある」
「固有結界？」
「魔術の最上級、術者の心象風景を形にし、現実に侵食させ塗りつぶす魔法に最も近い大魔術――――と言っても分からないかな？」
「簡単に言うと、自分の有利な空間に相手を閉じ込めるってことさ。色々と制限もあるし、強いかどうかは物による。だけど、この宝具は殆どの強力なサーヴァントに対し、強力な切り札になり得るものだ。彼女の場合、神性や神秘が濃い者ほど弱体化……下手すればそのまま消滅なんてこともあり得る、とびっきりのものだね」
「……それじゃあ、ランスロットは神秘ってのが滅茶苦茶濃いってこと？」
「ランスロットに宿る神秘は確かに高いが、それだけじゃないね。ランスロットがそれに気づけば、まだ勝負が分からないけど……今のランスロットのクラスはバーサーカーだ」
「バーサーカーのクラススキル、狂化は複雑な思考をできなくするデメリットを持つ。ランスロットは戦闘に関する技量は失われないけど、戦術に関しては別だ。狂化されて尚卓越した戦闘能力が発揮できると言っても、撤退するべきか否か、相手の弱点が何か、そういうことを考える能力が失われるというのは、マスターからの指示がないこの状況では致命的だね」
「バーサーカーはある意味、どのクラスよりもマスターの技量が問われるクラスだからね～」
「なるほど……」
　ぐだ男の言う『それ』が何なのかは分からないが、つまり今の状況はランスロットにとって致命的に悪いということは分かった。

狂化のデメリットである技量低下を防げるランスロット凄い、と思っていたが、狂化とはそれほど簡単にデメリットを打ち消せるような安いものでは無いらしい。

「……うん、そろそろ決着が付きそうだ」

モニターを見ると、ランスロットは既にボロボロの状態なのに対し、ノッブは傷を一切負っておらず、現在の優劣は誰が見ても明らかだった。

ランスロットは燃え盛る町の中を逃げ続け、森の中にある城のような場所まで追い詰められていた。

「……あ」

「ん？」

モニターを見ていたぐだ男が何かに気づいたように声を上げる。

「ねぇダヴィンチちゃん。シミュレーション内のステージを指定したのって、ランスロット？」

「ん？ああ、軽く意思疎通はできたからね。ある程度場所の指定なども彼自身に行わせたけど……それがどうしたんだい？」

「あーいや……そっか、この冬木は、１９９４年の……だとしたら、アインツベルン城には……」

「……おーい、ぐだ男～？」

ブツブツと小さく、何かを確認するようにモニターをいじくり何かを確認している様子のぐだ男。

それらが終わった後、ぐだ男はふぅ、とため息を付く。

「……あー、そっか。精霊の加護……危機的局面で優先的に幸運を呼び寄せるスキル。それが発動したのか？」

「えっと、どゆこと？」
「ん～……見てれば分かると思うよ？……ほんとに理性無くなってるのかなあのバーサーカー」
そして、ランスロットとノッブの模擬戦は最終局面を迎えていた。

――

「よく耐えたものじゃのぉ。こんな場所まで逃げ込むとは……じゃが、魔力を気にしないでいいのは儂も同じじゃ。幾ら時間を稼ごうと、儂の宝具が時間切れになることなぞ無い」
宝具の影響でほぼ全裸のアーチャーが、城を前に肩で息をするバーサーカーに向け三千丁の銃を展開する。
宙に浮かぶすべての火縄銃が一斉にバーサーカーに銃口を向ける光景に、バーサーカーは何を思ったのか兜が割れ露出した口元に笑みを浮かべる。
「終いじゃ」
そして、銃が火を吹く――その一瞬前に、バーサーカーは己の手に持つ宝具をアーチャーに向け投擲した。
だが、それにもはや力が残っていないのを知っていたアーチャーは宝具ごとバーサーカーを蜂の巣にしようと一斉に銃弾を浴びせた、が。
「……何？あやつめ、どこに……」

土煙が晴れた後、ランスロットの姿はどこにも無かった。
ダヴィンチから終了の合図が出なかったことから、まだ生きているのは間違いない。
本来であればすぐにでも気配を察知し追いかけることができただろうが、アサシンの気配遮断を使っているかの如く気配を察知することができない。
いや、気配はするがまるで墨汁をぶちまけ滲ませたかのように周囲一帯に気配が拡散しており、この屋敷のどこかにいるということしか分からないのだ。
バーサーカーの3つある宝具の一つ、『己(フォー・サムワンズ・グロウリー)が栄光の為でなく』の効果によるものだが、アーチャーがそれを知る由は無い。

「まあ良い。ここにいるのは分かるのであれば――――燻りだすまでよ」

城に隠れたのであれば城ごとぶち壊せばいい。
中に隠れているバーサーカーにトドメを刺すため、アーチャーは城を火縄銃で取り囲み絶え間なく銃弾を浴びせ続ける。
幾多もの銃弾により破壊されていく城壁の中で、僅かに見えた黒い煙のようなものをアーチャーは見逃さなかった。

「そこか」

制圧射撃が集中砲火に切り替わり、大量の銃弾が石の壁を破壊する。
煙が晴れ、隠れていたバーサーカーの姿が露わになっていく。

「……いやいやいや、ちょっと待てお主」

その姿に、アーチャーは思わずシリアス顔を崩し冷や汗を流す。
バーサーカーの手には、小さい球体が握られていた。

バーサーカーが城内のとある部屋で見つけた、とあるマスター（魔術師殺し）が第四次聖杯戦争の間保管していた大量の火器。
その内の一つ、そのままでも人体には過剰なほどの火力が秘められたその手榴弾（グレネード）を騎士（ナイト・オブ・オーナー）は徒手にて死せずによりDランク相当になったそれの安全装置を。

「ちょ、おま!?」

ピン、と小気味よい音を出し、抜いた。
その瞬間、辺り一帯が爆炎に包まれ、屋敷が崩壊していく。
爆炎の中から咳をしながら出てきたアーチャーの身体は、予想外の攻撃により大きなダメージを受けていた。

「ふざけんなお主現代兵器使うとか反則じゃろ!?ていうかなんでこんな場所にそんなもん置いてあるんじゃ！」
「ａｒｒｒ……」

爆炎の中から、アーチャーと違い大したダメージを受けていないバーサーカーが狙撃銃と拳銃を両手に持ち現れる。
スキル天下布武により、神秘の薄い物に対しては宝具やスキルの効果が薄れてしまうという弱点を持つアーチャーにとって、現代兵器を扱う英霊は天敵そのものだった。
ましてや、神秘の塊（アロンダイト）を投げ捨てたことで神秘の濃さが薄れてしまい、ある程度アーチャーの宝具効果を逃れることができた最強の騎士を相手にするという状況に立ったアーチャーは。

「……いや無理ゲーじゃろ」

半ば諦めの苦笑を浮かべながらも、最後まで戦うことにしたのだった。

「あれズルくないかの!?自分に有利なステージ選んで戦うとか、この円卓の騎士こすい!!」
「ａｒｒｒｒ……」

ランスロットの勝利という結果に終わった模擬戦の後、ノッブがランスロットの肩を叩きながら終盤の展開について抗議していた。
ダヴィンチちゃんによるとあのステージはランスロットはかつて参加し、衝撃的な出来事があったことで脳裏に薄っすらと刻まれたとある聖杯戦争時の冬木市だったらしい。
銃火器を使うマスターがその聖杯戦争に参加していたのは知っていたため、そのマスターの拠点であったあの城に行けば銃火器を手に入れられる見込みがあると踏んであそこに行ったのだとか。
結果その予想は的中、ノッブに対して有効打を与える武器を手に入れたランスロットの形勢逆転という事態に繋がったそうだ。

「めーちゃくちゃ悔しいんじゃが。勝てそうだったのにインチキ宝具とステージギミック使われて負けるの悔しいんじゃが～」
「ほらほら、ランスロットも困ってるんだし拗ねない拗ねない。実際、あのランスロット相手にあと一歩ってとこまで追い詰めたのすごいと思うよ?」
「うんうん。ランスロットは騎士（ナイト・オブ・オーナー）は徒手にて死せずがあったことに加えて、何故かあの状況下における最善手を打てるだけの理性がなぜかあったことで成立した結果だから、普通はあそこでノッブの勝ちだった。……ほんとなんであそこまで賢く立ちまわれたんだろ」

そんな風に雑談していると、扉が開き職員の制服を着たマシュがやってきた。

「あ、皆さん！ここにいたんですね。今ドクターロマンが隠し持ってたお菓子でお茶会することになったんですが、皆さんも一緒に来ませんか？」

ニコリ、と華のような笑みを浮かべるマシュに、ランスロットはどこか嬉しそうに応じた。

まるで娘の成長を眺める父親のような優しい目に、ノッブとぐだ男は納得したように頷いた。

「あれか。娘にかっこ悪いとこ見られたくなかったとかそういうのか」

「だろーね。多分それのおかげで狂化の効果が少し落ちて、あんな戦い方できたんじゃない？」

「納得いかんのじゃが～！よしランスロ、お茶会終わったらもっかいやるぞ！最初から全力で行けば多分行けるじゃろ！」

「さーて、私もちょっと休憩しようか。ロマニが隠していたお菓子だ、格別に美味しいだろうからね」

ノッブが騒がしくランスロットに絡み、ダヴィンチちゃんは伸びをしてお茶会がある場所に向かう。

そしてマシュは、私に手を差し出して笑う。

「さあ、先輩もご一緒に！」

その笑顔に思わず頬が緩みながら、私はその手を取ったのだった。

「うん！」

――――

「……うん。この二人なら、きっと大丈夫」

最後にぐだ男が言った言葉の意味を、この時の私は理解できずにいた。

立香ちゃんは無茶しがち

『気を付けて立香ちゃん！そのサーヴァントも他のサーヴァントと同じようにバーサークサーヴァントのようだ、気を抜くと一気に負ける可能性もある！』

ドクターロマンが焦る声でそう言うと同時、ノッブの火縄銃が火を噴き、ランスロットが近くの兵士から槍を奪いバーサーク・ライダーに攻撃を仕掛ける。

しかしノッブの銃弾はバーサーク・セイバーの剣技により弾かれランスロットの攻撃は地面から生えた杭により防がれる。

「君の相手は僕だ、アーチャー」

「げぇ!?相性悪い奴ぶつけてきおったか。騎乗がありそうなだけマシじゃが……立香、悪いが少し時間をかける」

「さて、湖の騎士よ。少し早いが再戦と行こうか。まだ先の傷は癒えぬが、夜は我の領域だ。今度はそう上手く行くとは思わぬことだ！」

「ｒｒｒｒｒ！」

ランスロットの刃、バーサーク・ランサーの杭、バーサーク・セイバーの剣、ノッブの刀、四つの刃が月夜の下に火花を散らせぶつかり合う。

二人とも、隙あらば私を狙おうと牽制をかけてきている上、ノッブの宝具は混戦だと味方を巻き込む可能性がある。

「ぐだ男、二人抜きで彼女に勝てると思う？」

「立香次第だね。けど、多分もうやることは決まってるんじゃないの？」

「一応確認取りたかっただけ！それじゃ……二人とも！兵士の人や私を巻き込まないように、少し遠くで戦って！」

ノッブはニヤリと笑い、火縄銃を二人の周囲に展開し、巧みに誘導していく。
バーサーク・セイバーとバーサーク・ランサーもその誘導にあえて乗るかのように私達から離れて行った。
「多少兵法が分かるようになってきたようじゃの、立香！そら、おぬしはこっちじゃ男か女か分からん奴！」
「あまりその呼び方は好かないけれど、ライダーの願いだ。バーサーク・ライダー。ここは任せたよ」
「ええ、あなた達の闘いが終わるまでには決着をつけましょう」

最も戦闘力が高いサーヴァント二騎がいなくなったことで、今いるこちら側のサーヴァントはマシュ、マリー、アマデウス、ジャンヌ。
それに対してバーサーク・ライダーは一騎だけだというのに、その気迫はこちら側が追い込まれていると思ってしまう程に強かった。

「おいおい、こりゃ不味いんじゃないか？こっちの強いのを抑えられちゃったぜ」
「それでもこの場にいるサーヴァントは４人。数の上では有利です！」
「マリー、忘れちゃいけない。その４人は僕と君とサーヴァントになって間もない新人、唯一頼れる戦場のプロも今は魔力がカツカツだ。それに、こういっちゃなんだがマスターである彼女の魔力は一般的な魔術師よりも低い。幾らカルデアからのバックアップとかいうのがあったって、三体も、それもそのうち一体はバーサーカーともなればこれ以上の契約は困難。まあ要するに……結構ピンチってとこかな」
「説明ありがとう、アマデウス。けれどピンチだからって諦めるわけにはいかないわね！」
「おしゃべりは終わりかしら？」

バーサーク・ライダーは錫杖を掲げる、それと同時に何匹ものワイバーンが私達に向けて火炎の息を吹きかける。

「先輩、ぐだ男さん！」

マシュがそれを防いでくれるが、炎の中を突っ切って近接していたバーサーク・ライダーが振り抜いた錫杖がマシュを盾ごと吹き飛ばす。

続けざまに私達に向かい錫杖を振るが、その攻撃はジャンヌさんの旗により防がれた、が。

「弱いわね、聖女ジャンヌ・ダルク」

「くっ……!?」

「わっ!?」

力で競り負け、私達を巻き込んで後方に吹き飛ばされる。

このままじゃ不味い、完全に力負けしている。

「あんまり闘いは得意じゃないんだけどな！」

「ならば黙っていなさい、音楽家。あなたの下品な曲は聞くに堪えない」

「ああ、Ｌ（俺）ｅｃｋ（の）ｍ（尻）ｉｃｈ（を）ｉｍ（舐）Ａｒｓｃｈ（め）（ろ）は嫌いだったかな？」

軽口を叩きながらも繰り出されたアマデウスの指揮棒から放たれた魔力の塊はバーサーク・ライダーの動きを牽制する。

その間になんとかジャンヌと共に起き上がり、この状況をどうにかする策を考える。

「さて、どうしようかこれ……！ちょっと思った以上に戦力差がでかい気がするなぁ」

『魔力の攻撃だけじゃなくて、近接戦闘まで強いだなんて想定外だな

！こうなったら二人の闘いが終わるまで耐えて、戻ってきたらそのまま数と質で押しつぶすしか……！」
「ロマン、それじゃダメだ。彼女とは、俺達だけで決着をつけなきゃならない」

ぐだ男は珍しく好戦的な意見を口にし、暫く考え込んだ後私を見る。

「立香、ジャンヌさんと仮契約するだけの魔力は残ってる？」
『な……!?無茶だぐだ男君！立香ちゃんの魔力容量じゃ、４騎の同時運用なんて不可能に近い！ただでさえ燃費の悪いバーサーカーがいる状況で、更に数を増やすなんて！』

ぐだ男の眼を見る、人形なので瞳とかは無いのだけれど、その眼は私のことを案じながらも信じている、いつも勇気をくれるあいつの眼そのままだった。
溜息を吐き、ニヤリと不敵に笑って見せる。

「ぐだ男は私がそれをやれると思ってるんでしょ？ならやるよ。ランスロットも今は私のことを気遣って戦ってくれてるみたいだし、多分行ける！」
「……本当にいいのですね？　藤丸立香さん」
「うん、不甲斐ないマスターだけど任せて！マシュ、アマデウス、マリーさん！時間を稼いで！」
「了解です、マスター！」
「ええ、任せてちょうだい！五秒くらいなら稼げると思うわ！」
「僕は三秒も稼げる気がしないけどね。ま、合わせれば八秒だ、なんとかなるだろう！」

以前クー・フーリンと契約を結んだ時のことを思い出しながら、初めの一言を口に出す。

「――――告げる」

令呪が描かれた手が焼かれるような感覚と共に、疲労感が押し寄せるがそれを堪えて詠唱を続ける。

「無理をしてでも勝ちに行く姿勢は評価しましょう。けれど、敵の強化を許すほど私は甘くない！」

「敵に強化を邪魔させるほど、私達も甘くは無いです！」

マシュの盾がバーサーク・ライダーの錫杖とぶつかり合う、やはり相手の方が力量は上だがそれでも必死に食らいついてくれている。

アマデウスとマリーの歌と演奏を鬱陶し気に打ち払いながらも、ついにその杖の矛先がこちらを向く。

「終わりよ、一手遅かったわね……！」

「マスター!!」

『立香ちゃん、ぐだ男君！』

私の目の前に、魔力の渦が発生する。間に合えと願いながらも、その魔力の渦は弾けて――――。

「ごめん立香、少しの間だけ借してくれ」

ほんの一瞬、人形からではなく幽体となったぐだ男の声が聞こえると同時に、私の左手は魔力の渦に手を向ける。

たったそれだけの動作で、その魔力の渦は空間が切り取られたように消滅する。

力を失ったようにぐだ男の人形が私の肩からポトリと落ちる、それを自由になった左手でなんとか受け止めながら、ようやく契約が成された。

「その力は……!?　……ならば、もう一度！」
「いいえ、もうやらせはしません」

再び魔力の渦が出来上がる、しかしそれはさっきよりも早く打ち払われた。
ジャンヌが旗を振るっただけで、バーサーク・ライダーの攻撃は打ち払われた。

「感謝します、マスター。あなたのおかげで、体中から力が漲ってくるようです！改めて、ルーラー・ジャンヌダルク。あなたと神のために戦うと誓いましょう！」
「うん、間に合ってよかった……ってそうだ！ぐだ男、大丈夫!?」
「だ、大丈夫。大丈夫だから、今は敵に集中して！」

ぐだ男に言われ、バーサーク・ライダーを見る。彼女はジャンヌを見て、少し微笑んでいるように見えた。
しかしすぐにその顔は歴戦の戦士のように鋭く、そして明確な敵意を持った眼に変わる。

「……そういうことなのね。私はきっと、このために呼ばれたのでしょう」

急に地面が揺れる、それは今まで感じたことも無い程大きく、地震が多い日本でも味わったことのない程の、立っていられない程の地響き。
何事かと地面を見て、すぐにその正体に気づく。この揺れの正体は――！

「闘いましょう、ジャンヌダルク。我が真名はマルタ。バーサーク・ライダーとして召喚された、あなた達の試練となる存在！」
『マルタ、聖女マルタだって!?気を付けてくれ、皆！聖女マルタはかつ

て竜種を屈服させた英雄！つまり彼女はライダーとして最上種――
――ドラゴン・ライダーだ！』
「さあ、来なさい――――愛知らぬ哀しき竜よ!!!」

ドクター・ロマンの声と同時に、地面から出現した亀のような甲羅を背尾った獣のような竜は、確かな殺意を持って私達を睨みつける。
私は深呼吸をし、本気を出した聖女マルタを見すえる。

「皆、やろう！」

私が大声を出すと同時に、マルタとの決戦が始まった。

――――――――

「ぐっ!?この巨体でなんてスピード！」
「マシュと私はタラスクとマルタの相手をします！マリー・アントワネットとアマデウスは兵を守りつつ、援護を！」
「ええ、分かったわ！アマデウス、もう少し頑張りましょう！」
「泣くほど嫌だが君の頼みであれば仕方ないね！惚れた弱みという奴だ、全力でやってやろう！」

マルタが呼び出したタラスクは、ジャンヌとマシュの二人がかりでも簡単に打ち破れるものでは無かった。
マリーとアマデウスの援護でなんとか戦えているが、それでもこのままではジリ貧だ。
私の魔力が不甲斐ないばかりにみんなに苦戦を強いていることに悔しさとやるせなさを覚えるが、立ち止まってばかりはいられない！

「マシュ、一気に行くよ！」
「はい、先輩！」

ダヴィンチちゃんが作ってくれた秘密兵器は、ランスロットのごちゃ混ぜシリーズ（正式名称は長いから忘れた）のほかにもう一つある。

私が今着ているカルデアの制服に仕込まれている、三つのサーヴァント支援機能、『応急手当』『瞬間強化』『緊急回避』。

カルデアのマスター全員に配られていた物とデザインは同じだが、へっぽこマスターたる私のためにダヴィンチちゃんが改良してくれた即興魔術！

「ジャンヌさん！」

「ええ、合わせます！」

『瞬間強化』により筋力のステータスをランクアップさせたマシュの盾と、ジャンヌの旗が同時にマルタに襲い掛かる。

これなら、少しはダメージを与えられるはずだ！

「なるほど、少しはやるようです。ならば――――刃（タ）を通（ラ）さぬ竜（ス）の盾（ク）よ！」

宝具の真名開帳、それによりタラスクが瞬間移動のような素早さでマルタの前に盾となり現れ、二人の攻撃を防いだ。

甲羅には全くダメージが入った様子はなく、その目はまだまだ健在であることを示している。

「これでも攻め切れないのか……！」

「宝具も使わぬ攻撃で、タラスクを突破できるとは思わないことです。……ですが、あまり時間をかけてもあちらが終わってしまうでしょう。一気に決めさせてもらいましょう」

タラスクの身体が白く輝き、周囲を照らし浮かび上がる。

今までとは違う攻撃――――さっきの防御型とは違い、攻撃に特化させた宝具！

『皆、気を付けてくれ！この反応、強力な宝具が来るぞ！』

「マシュ、宝具を！」

「はい！所長、私に力を……！真名偽装登録――――宝具展開！」

「星のように――――愛知らぬ悲しき竜よ!!」

タラスクが回転しながらものすごい勢いで迫ってくる、大質量のドラゴンを高速でぶつけるシンプル故に恐ろしい威力を持つ鉾を前に、マシュは息を吸い込んで。

盾に魔力を集中させ、頼りになる後輩は自身が持てる最大の盾を展開した。

「疑似展開／人理の礎!!」

マシュの宝具はタラスクの一撃を受け止める、その衝撃は凄まじく遠くで見ていた兵士達も怯えている程だった。

なんとか防げてはいるものの、タラスクはその盾を打ち破ろうと回転を続け、ジリジリとマシュが押され始めている。

このままでは――――

「マスター。宝具の開帳を許してくれますか？　私の宝具は防御に秀でています。マシュと合わせれば、マルタの宝具を完全に防ぎ切れるでしょう」

「本当!?なら、すぐにでも！」

「ですが。あなたは今、合計四騎のサーヴァントを扱っています。それに加えて私が宝具を使えば、今までよりも遥かに大きい負担がかかるはず。事実、今もかなり疲弊している」

『そうだ、今君は前代未聞の四騎同時使役をしている。この状況で二

人同時に宝具展開なんかしたら、令呪を使ったとしても耐えれるかどうか……！』
「うん。念には念を入れて、令呪二画で行くべきだ。立香の負担を減らすためにも」

ぐだ男の助言を聞いて、ほんの一瞬だけ考える。
たしかに私は大分疲れてる、体がすごく重いし息切れしてるし、こんな状況でも無ければ寝転がりたいくらいには。
そんな状況で宝具を更に使うなんてすれば、負担に耐え切れずに気絶する可能性が高いだろう。
令呪を使った方が安全だというのは分かる――けど。

「令呪は使わない！ジャンヌさん、宝具を使って！」
「立香、それは――」
「たしかに令呪を使った方が確実にその場を凌ぎ切れると思う。けど、きっとこの先でマルタさん以上の敵や、最後にはあの黒いジャンヌが待ち受けてる」

ここで楽をするならば、令呪を使うべきだというのは分かっている。
けれど、こんなところで足踏みして切り札を使うようでは、この先の戦いを勝ち抜けない。
何よりも、彼女――マルタは私の思いの強さを見極めている気がした。
令呪に頼らず、自力で耐えてみせることで彼女を認めさせられるのだとしたら！

「それに私が負けず嫌いなの、知ってるでしょ？さあ、行くよ！」
「立香……分かった。けど無理だと思ったらすぐに令呪使ってね!?魔力切れはマスターの死亡要因の一つなんだから！」
「……あなたの覚悟は分かりました。マスター、あなたに敬意を」

ジャンヌの旗が光輝く、それは救国の聖女により与えられる天使の祝福、あらゆる攻撃から味方を守る神の御業。

「主の御業をここに。我が旗よ、我が同胞を守りたまえ！我が神はここにありて（リュミノジテ・エテルネッル）!!」

――光が周囲を包み込む

それと同時に、私は魔力の使いすぎで碌に立っていられなくなり、ペタリと座り込みそうになって……それを予想してたかのように、あきれ顔のぐだ男に受け止められる（受け止めるというよりはクッションだったけど）。

またマシュに心配かけちゃうな、なんて思いながらも、ぐだ男の心地よい暖かさに負けて私は意識を閉ざした。

「――よく、頑張ったわね。ジャンヌ・ダルクと、そのマスター」

最後に聖女としてのマルタの声が、かすかに聞こえた気がした。

ぐだ男くんは空を見た／立香ちゃんは星を見た

結果だけなら、辿った通り。それほど驚くべきことでもない。
藤丸立香とそのサーヴァント達は、狂化を付与された竜退治の聖女を打倒し、先に進む。
事態がひと段落して、他の皆が森の中で焚火を囲んでいる中、一人で夜空を見上げていた。

「……勝った、か」

そのはずなのに。勝った気はあまりしなかった。
いや、違うかな。これは、ただの嫉妬なのだろう。
輝かしく、美しく。勝つべくして勝ったのではない、実直で、難しいこと無しのガチンコ勝負。お互いズルなんて一つも無くて、お互いが死力を尽くし、勝ち負けが決定した。
それがどれほど輝かしくて、どれほど素晴らしいものなのかなど。語るまでもないだろう。
そんなことを思える身分じゃないのに。どうしようも無く彼女が羨ましい。
英雄に認められ。聖女に善き人間だと言い渡され。沢山の助けを借りて、彼女は前に進むのだ。
ああ、それは――なんて、かっこいいのだろう。

「なにを腑抜けておる」
「……織田信長」
「まったく、他の者は良い感じの雰囲気であちらで喋っておるというのに。マスターがお主のことを探しておったぞ」
「うん、ごめん。しばらくしたらすぐ戻るよ」
「……見るからに不貞腐れておるのぉ」

多少の損傷を負いながらも見事デオンを退けた信長は、ぶっきらぼ

うに俺の近くで座り込む。
マルタから竜殺しの大英雄ジークフリートの情報を託され、多少の損傷はあったがバーサーカーとセイバーを撃退し、見事藤丸立香はまた一歩先に進んだ。
サーヴァントと絆を育み。マシュに慕われ。人間として成長を続けて。
そうなるように、と願った僕ですらも驚く程に、多少の違いはあれど道筋通りに物語は進む。
ただ一つ、奥底に眠る疑問を除いては。

「くだらん顔をしておる。どこぞのキンカンと同じ顔じゃ」
「……えーと、明智光秀のこと？」
「難しい顔をして、爆発しそうな何かを溜めこんでおる顔じゃ」
「流石は日本で一番有名な戦国武将。俺の心中なんてすぐ察せちゃうか」
「まあ人形の顔なんぞろくに分かるわけ無いがな！雰囲気でなんとなくじゃ！話くらいは聞いてやるから、口にしてみよ」

それで分かるのもまた人外染みてるが、と考えながら馬鹿笑いする織田信長に呆れながら、俯きがちにまた空を見る。相も変わらず、空にはあの巨大な穴が広がっていた。
ある意味で、この物語を象徴する空。人類の生存をかけた戦いを示す空。
俺がどうにもできなかった、あの物語で見上げた空と何一つ変わらなかった。

「立香にとって」

ポツリ、と言葉を吐き出す。
言葉にしたところで、得られる物は何もない。けれど、溜まった心の膿を少しでも吐き出したかった。吐き出したところですぐ溜まる

けれど、それでも吐き出してしまいたかった。

「俺は、必要な物じゃなかった」

「ほう」

「むしろ、害悪なのかもしれない。俺がいたせいで、立香は本来背負うはずの無い物を背負ってしまった。彼女に罪を、背負わせてしまった」

あの時、オルガマリー所長を助けたとして。それがよい方向に転がるかなど、分かりはしない。レフ・ライノールに利用され状況を悪化させる可能性もあったし、第二部……異聞帯を巡る物語において、それは最悪の一手になったかもしれなかった。

それでも、二度同じ光景を見た時に思ってしまった。

彼女を助けたい、と。彼女が居る未来を見たかった、と。

その結果が、あのザマだ。

「考えれば分かるはずだった。僅かな時間一緒にいただけの彼女と、無駄に長い時間を過ごしてしまった俺とじゃ。立香がどっちを優先するのかなんて、考えれば分かるはずだったんだ。本当ならどっちを助ければいいかなんてこと、あの短い期間で彼女に分かるはずは無かったんだ」

「ほうほう」

「何もしないべきだった」

漏れ出た言葉は、もう止められなかった。

「自分のことしか考えていなかった。思えばずっとそうだった。立香に付き纏ったのも、この旅についてきたのも、この世界に来たのも。結局は俺がそうしたいからだった」

物語と同じように。そう進めば、最後は全て上手く行くと知ってい

たはずだった。
俺は主人公じゃなかったから無理だったけど。彼女なら、藤丸立香ならそれを成し遂げられると分かっていたはずだった。だから、何もしないべきだった。
「俺は何も、分かっちゃいなかった。何もしないべきだった。全部立香に、真の人類最後のマスターに任せるべきだったんだ。俺は結局、あいつに無駄に負担をかけることしかしていない」
「ほんほんほん」
「……あの、もしかして聞く気あんま無い？」
「聞いとる聞いとる。あ、煎餅食うか？」
「なんだかぐだぐだしてきた気がしてきたなぁ」
「話終わったなら帰るかの！」
「あ、うん。聞くとは言ったけど悩み解決するとかは言ってないねそういえば」
織田信長は当然ながら、俺の話に何の興味も抱かなかったのか煎餅の袋を空にした後、俺の身体を持ち上げ運ぶ。人形の身体になってしまってからは歩幅が小さくて困る。
「だっておぬし、ただ単に失敗してへこんでるだけじゃろ？」
「失敗というか、後悔というか……正直失敗しかしてないな、ってのを再確認したというか」
「そんなもの、是非もないよネ！とか言って笑い飛ばせばええじゃろう」
平然と、彼女はそう言って笑う。
「わしですら失敗ばかりの道を歩んできたというのに、お主ごときが人類を救う戦いを失敗せずに歩めると思うたか。不遜すぎるわこのうつけ者め」

「けど、俺は学べる機会があったはずだった。それすら活かせず、また同じ過ちを繰り返した」
「それを何度も裏切られて死にかけたわしの前で言うとは、なかなか肝が据わっとるの？」

苦笑を浮かべ、俺の言葉にまったく眉を動かさず、月の下で淡々と言葉を流す。
普段の陽気な顔でも、戦闘の時の苛烈な顔でもない、何かに思い耽る人間らしい優しい目。

「失敗から学べ。おぬしがどんな秘密を持っとるかは知らんが、どうせおぬしはただの人じゃ。わしは胡坐を掻く阿呆は許さぬが、躓こうと前に進む人間は許す」
「……」
「くだらぬ感傷に浸るより、今はただ前を向け。戦場で後ろを振り向く馬鹿はおらぬじゃろう。前を向き、おぬしが戦うべき相手を、守るべき背中を見るがいい」

段々と、皆の楽しそうな笑い声が聞こえてくる。
きっと彼女達は、沢山の英雄に囲まれ、いろんなことを学びながら進むのだ。かつての俺なんかよりも余程沢山のことを学んで、そして憐憫の獣にその解答を突きつけるのだ。
誰かの受け売りなんかじゃない。いろんなものを見て考えた、自分が出した結論を。

「ありがとう、織田信長」
「気にするで無い。おぬしから聞いたことは黙っておいてやろう。どうせ知られたら不味いことなんじゃろ、同じ過ちやらなんやらとか」
「……あ、あはは。まあ、はい」
「なら言わないでおいてやるわい。ほれ、帰るぞ」

先ほどまでの、どこか母性を感じるような優しい目から一転し、いつものように型破りな笑みを浮かべて「なんじゃなんじゃ、面白いもの焼いとるのぉ！……いやマジで面白いもの焼いてるの。え、ワイバーン？」等と言いながらすぐに輪の中に入っていく織田信長を見て、なんとなく。

本当になんとなくだが、拗らせた彼女達の部下の気持ちが分かった気がした。

「先輩？まだ起きていたんですか？」

「あ、ごめん。起こしちゃったかな」

少しの時間の歓談と、作戦会議を終えた後。

バーサーク・ライダー。マルタに教えてもらった、この特異点で唯一、あの黒い竜ファブニールを倒せるであろうサーヴァント……最高峰の竜殺し、『ジークフリート』を捜索するため、今日は早めに寝ることになった。

見張りはサーヴァントの皆が取ってくれるらしいから、別に私が起きている必要はない。けれど、眠ろうとする度に瞼の裏にある光景が映ってしまい、上手く眠れない。

「……その、私で良ければ何か悩みを聴けないでしょうか？」

「え、なんで？」

「先輩の顔が、少し悩んでいるように見えたので」

少しだけ驚き、マシュを見る。マシュは真剣な目で私を見て、「助けになりたい」と訴えかけてくる。とても可愛らしいと思うと同時に、醜くも思う。あんまりにも、眩しすぎると。

「えっと。ぐだ男がノッブと一緒に帰って来たの見て、ちょっと妬いちゃったんだ」

特に嘘を言う必要が無いと思ったので、パチパチと音を立てる焚き火を見ながら正直に話すことにした。自分でも最近自覚したのだが、私は案外嫉妬深いというか、面倒臭いというか。あいつが私だけに見える、という状況にきっと慣れ過ぎたのだろう。

脳裏を過るのは、ノッブに抱えられ戻ってきたぐだ男の姿。まだ表情の変化機能は実装されてないので分かりづらいが、あいつ明らかにノッブに懐いていた。心を許していた。私に向ける目とは別の、私が知らない目を彼女にだけ向けていた。

それが、どうしようも無く怖かった。

……そしてしばらくの間反応が無かったので、疑問を感じマシュの顔を見ると。彼女は顔を赤くして、何かを口に出そうとパクパクと口を動かしているところだった。

私は己の失策に気づく。これではまるで、私がぐだ男に『そういう感情』を向けているように見えるのでは？はた目から見れば、これ恋愛相談とかその類なのでは？

「マシュ、ごめん言い方を間違えた。私は別にぐだ男にそういう感情向けてないからね？」

「し、しかし先輩。ドクターによると、嫉妬とは主に恋愛が絡んでいるもので、その嫉妬がトラブルの種になり段々と物語が膨らんでいくと……！」

「恋愛経験無さそうなドクターの言うことを真に受けちゃダメだよ!?」

どこかから泣き言が聞こえた気がするがスルーである。

なんか未来から猫の威嚇のようなものが届いた気がもするがスルーである。

「ぐだ男は相棒だから！ずっと一緒にいた相棒！」
「相棒、ですか。……その、先輩。やはり、ぐだ男さんは冬木でクー・フーリンさんが言っていた、『何か』の正体なのでしょうか？」
「そうだよ」

あまりにもあっさり肯定したからか、少し困惑した様子のマシュに微笑みかける。
彼女が言いたくても言えないことは何となくわかっている。けれど、彼女がそれを口に出さない以上、私から言い出すのも変だろうと思い、先ほどの話を続けることにした。

「それで、その。あいつ、私に見せないような懐き方でノッブと話してたからさ」
「たしかに、ほんの僅かな時間でぐだ男さんと仲良くなった雰囲気がありましたね。流石は戦国時代で最も知名度の高い英雄。人と仲良くなるのもすぐでした」
「うん。私も、凄いな～って思ったんだけど。同時に、ぐだ男が前と違って私以外と話せて、触れ合うことができる。その状況をようやく理解した、というか。何というか」

いうなれば、そう。

「私だけのぐだ男じゃ、無くなったんだなぁって」

当たり前の事だ。ぐだ男は好きで私だけと話さなかったんじゃない。ただ、私だけが何故かぐだ男を認識できたからぐだ男は私のところに来てくれたんだ。
私はぐだ男から相談なんて受けたことは無い。相談するのはいつも私からだ。当然だ、私はぐだ男よりずっと子供だ。見た目的にはあんまり離れているようにも見えないけど、あいつは妙に達観してい

て、いつも私の親か何かのようなことばかり言ってくる。
けれど、実際はぐだ男だって私が思う程強くも無いんだろう。ノッブはあんな感じだけど、織田信長という日本人なら誰でも知ってるような凄い人だ。そんな英雄を前にすれば、私もぐだ男もおんなじような物なのだろう。
それでも、どうしてもそれが喉に引っ掛かった。
変わらなかった日常が、誰かの手で壊されたように思えてしまった。

「先輩……」
「うん、自分で言っててなんだけど割と最低だね私！完全に悪いの私だしね、これ！いやー、きったないなぁ私」

ノッブもぐだ男も何も悪くなんてない。悪いのはこんなことを考える自分だけ。
日常なんてとっくに壊れているはずなのに、何故か私にはそうは思えなかったのだ。ただ仲良くすべき人が増えて、救うべき人が増えて、頑張らなきゃいけないことが出てきただけ。

「マシュみたいに、綺麗にはなれないや」

まるで、新しい学年になってクラスが変わるだけのような。ほんの少し、環境が変わってしまっただけ、なんて考えてた私の方が異常なわけで。
マシュみたいに、誰にでも優しくできて。誰かを本気で心配できて。何の悪感情も持たないような、純粋無垢な人間になんてなれなくて。
だって、私は結局――――

「先輩！」
「うわっと!?」

マシュはぐいっ、と顔を近づけてくる。
至近距離で見るマシュの瞳は、相変わらず綺麗だった。なんの不純物も混じらない、宝石のような紫色の瞳。思わず目を背けてしまうような、どこまでも純粋な目。
「私は、ぐだ男さんに嫉妬しているのだと思います！」
「へ？」
突然の宣言に、思わず目が点になる。
マシュは少し頬を紅潮させながらも、私の目を見て言葉を放つ。
「私は、先輩にとってぐだ男さんほど大事な存在ではないと分かってます。例えどれだけ一緒にいても、超えられないであろうことも分かっています！」
「……」
「それでも。先輩は、あの時私の手を握ってくれました」
マシュは、私の手を握る。あの時の光景が蘇る。
「あの時、どうしようもなく先輩がかっこよくて、輝いて見えたんです。冬木の時も、何も知らないはずなのに気丈に立って、笑顔でい続けたあなたが誰よりも頼もしく見えました！だから私は、先輩のことが大好きです。ずっと一緒にいたいって思ってます！」
「そ、その。マシュ」
突然の告白に、思わず顔が赤くなる。いやまあ、恋愛的な意味ではないと知っているが。
こうも直接的に大好きだとか言われると、とても困る。
「先輩が一番に思っているぐだ男さんが、少しだけ羨ましいんです。

もしぐだ男さんより早く、私が先輩に出会えたらって考えることもあります！だから未だに、ぐだ男さんに話しかけたりできないでいます！」
「そうは見えないなぁ」

そんな呟きを聞いていないのか、惑いは意図的に無視しているのか。
彼女もまた、顔を赤くして言葉を続ける。その様子に思わず、ほんの少しだけ頬が緩む。
本当に、彼女はどこまで行っても優しい子だ。

「だから、私が綺麗だと言うのなら先輩だって綺麗です！私も誰かに嫉妬するような悪い子です、先輩と同じです。だから――！」
「ありがと、マシュ」

言葉を遮って、笑顔を浮かべる。
マシュは少し涙目で、けれど目は逸らさず私を見ている。どこまでも出来た後輩で、私はどこまでも駄目な先輩だ。まさか先輩たる私が、後輩であるマシュに教えられることになるなんて。

「よし。少しだけ元気出た！なんか色々とスッキリした！マシュに相談して良かったよ、ありがとね！」
「お役に立てたなら良かったです」

なんてことは無い。私の感情なんて、要は姉が妹に向けるようなそれなのだ。つまりは、親を取られたく無いと駄々をこねる子供のような、単純で馬鹿らしいものなのだ。
ぐだ男はきっと、私を置いてどこかに行ったりはしない。
だから、これからもきっと大丈夫。
マシュと一緒に夜空を見上げる。
星はずっと一つだけ。安らぎを与えてくれる小さな星がポツンと

一つ。その星が私の視界を照らしてくれた。私の足元を照らしてくれて、そのおかげで私は歩くことができた。
それ以外に星はいらないと思っていたけれど。
今日は、珍しいことにほんの一瞬だけ。
二つ目の、綺麗な紫色の星が見えた。